
東方死神行

くりすていあーね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方死神行

【Nコード】

N8734Q

【作者名】

くりすていあーね

【あらすじ】

悪人面の死神が登場。

正義には特に関心をもたない、殺戮成分過多の異常人格！という程でもない。

某NARUTOの人物と似た風貌を持ち合わせているが、彼は正真正銘のオリキャラ！

そんな彼が幻想郷で織り成す物語は、ジャシン様に捧げる殺戮の物語…？

怠慢勤務（前書き）

こんにちは、くりすていあーねです。

前回、自来也が幻想入りの小説を執筆したものです。

新たに小説を投稿しましたが、読む前に注意事項を幾つか。

テンプレですが、東方の二次作品という事ですので、キャラ崩壊は原作無視、設定改変などに嫌悪感を抱く方はブラウザバックを推奨します。

また、この小説には各漫画やアニメ等のトレス成分が含まれております。

上記の項目に該当しない方でも、小説を読んでるうちに嫌悪感を抱いてしまった場合も、同じくブラウザバックを推奨します。

さて、今回の小説の主人公はオリキャラです。

しかし、完全にオリキャラにしてしまつては書きにくい！

という事で、NARUTO好きの筆者は考えました。

NARUTOキャラの性格を混ぜて割つた性格にしようと思ひました。

筆者的には、鬼鮫×飛段÷2

といった感じですかね。

しかし、実はこの小説、自来也が幻想入りと同じく、区切りの良いところまで既に執筆済みです。

ざっくり書いてみたところ、どうにも飛段成分が多い。

そんなつもりはなかったんだよ…伊吹たんがヤンデレでも良いじゃないか！

さて、長くなりましたが第一話となります。

怠慢勤務

「——さつてと、…寝るか」

暇を持て余した俺は、睡眠をとる事にした。

さて読者諸兄の皆、こんばんは。…いや、まだ人間達が活発な時間帯だが。

「・・・おい！勤務早々昼寝してるんじゃないやあねえぞ愚図！」

「…チツ」

この光景を見て頂ければ理解して頂けるだろう。

俺は大絶賛、勤務中であり、年配の位一つ上の上司に怒鳴られた。

「まったく、こんな愚図がクビ切られねえなんぞ、若いつてのは羨ましいもんだ」

俺の働きっぷりに参ったのか…否、サボリ具合に頭に血が上ったのだろう。

捨て台詞を吐きながら俺を後にする。

ご覧頂いて貰ったとおり、俺には名前がない。

只、呼び名が全く無いというわけじゃあない。

先程の上司が呼んだとおり、周りからは”愚図”呼ばわりされてい

る。

ここで俺の今に至る過程を簡単に説明しよう。

俺は数年前に此処——現在地で言えば三途の川に当たるだろう。

そこに俺は”堕ちて”きたのだ。

原因は全く不明。本来は死者の魂が辿り着き、審判を下される神聖な場所なのだが。

どうしてか俺は生きたまま、当然生身の身体でこの地に堕ちてきたのだ。

原因不明、現地の住民には当然その存在自体を怪しまれる。

そんな時、この地のお偉いさん……まあ、四季映姫・ヤマザナドゥと呼ばれる人物に保護された。

そして今の役職は、三途の川で渡し舟を担当している、という訳だ。

名前が無いのも単身、所謂”あの世”言われる世界に堕ちてきたのもあり、記憶がなかった。

当然その旨は俺の完全なる上司である四季映姫様にも伝えてある。

名前もなければ住む所も、勿論元居た世界も憶えていない。……いや、そんなもの元々なかったのかもしれない。

そんな俺は知恵が足らない。そんな訳だから先程の年配の上司にも愚図呼ばわりされている。

それが何時しか、名前の無い俺に定着していたわけで。

……ま、知恵は働かないが、悪知恵のほうは足りない脳をフル回転させられるのだが。

現在も悪知恵のほうがり、勤務中に昼寝に走っているわけだが——

「……ああ、先輩のあたいよりも先に床に就いたあ良い度胸してるじゃないか」

死神用の渡り船に横になっている俺の耳に、直接の上司に当たる死神が声をかけてきた。

「お勤めご苦労様です、小町さん」

一応は直接の上司に当たる小野塚・小町に敬語で対応する。

「ご苦労さんて、まだ始まったばかりだよ。人生は有限…ま、あたいらには無限なんだけどね」

俺の上司である小町さんは死神である。

俺は記憶を失くしているので、自分の種族は解からない。

だが人材不足の役職を突如任せられ、更に死神かも不明な生物に靈魂を導かせる訳にはいかない、と。

四季映姫様による簡単な血の契約と、適当に立てかけてあった鎌を投げ渡され一言。

”これで貴方も立派な死神”と決め付けられ、早々に今の職務に就く事になった訳である。

「死神にはそうかもしれませんがねえ、俺は死神と言い張るには確証が足らねえですよ」

「なに、その立派な鎌で十分証拠になり得るもんさ。…それと、その気味の悪い敬語は止してくれないかね」

立派な鎌と言われても、真っ黒な棒に、何を思っつか刀身が三段に渡って設けてある。

それに刀身が赤い上に、素材も何でできているか分かったもんじゃない。
あない。

「別に良いじゃあないですか。普段の言葉遣いが汚い、せめてもの罪滅ぼしみたいな奴ですって」

「あの憎まれ口の元で何年も仕事してりゃあ口も悪くなるもんだねま、よく自殺しなかったねえ」

一年前までは、冒頭で俺に怒鳴りかけてきた上司が専属であつた。だが、現在は目の前にいる小野塚・小町という死神が専属の上司だ。俺の口が悪いのも、何の記憶もない無垢な俺にご丁寧に調教してくれた結果というわけで。

「それにしても良い名前を付けて貰ったもんだよ。”愚図”なんて今のお前にゃ分相応じゃあないか？」

「名前じゃないですし、命名した人物の思考回路を知りたいですねえ」

「でも呼ばれると反応するんだろう？因果なもんだねえ、悪戯に時が過ぎるのも。」

なあ愚図、と改めて俺を呼ぶように小さく呟いた小町さんを睨みつけてみる。

すると小町さんは悪戯を思いついた子供のような表情をして

「なんだい、そんなに見つめて。あたいに惚れたのかい？」

「・・・はあ、小町さんてめんどくせー性格してますよね」

食えない性格だという事は、出会った当初から理解しているつもりだ。

「グズも敬語とか関係なしに他人の名前に敬称を付ける辺り、前世はきつと善人だったんさね」

「いや、俺は死んでませんし。それと、それで呼ぶの止めてもらえませんかねえ…マジでぶっ殺したくなる程腹が立つんで。」

小町の突発の問いかけや独り言は既に慣れっこだ。

彼女はどうかやら沈黙を嫌うタイプのようで、事あるごとに口を開いている。

そんな歌舞伎者の彼女だからこそ、稀に汚い言葉を投げかけるのも厭わない。

「だからいつも言ってるだろう？あたいが命名してやる！ってさ」

「冗談でも止してくださいよ…素っ頓狂な名前を付けられる身にもなってくださいって。」

俺と小町さんが他愛の無い話で盛り上がっていると、早くも仕事が転がり込んでくる。

「おっと、早速本日第一号の靈魂さんで・・・っと、お？」

眉間の辺りに掌を当て、遠くを見やる小町さん。

俺も渡り船から身体を起こして、それに習う。

「なんだか、靈魂の割にはしっかり存在してますねえ」

靈魂と言えば、俺が知る限りではふわふわ浮かんでいる物体。

話しかけても、基本的にはうんともすんとも言わない。…稀に言葉を口にするのもいるが。

「面倒臭そうだねえ、ジョニー、あんた相手してきなよ。」

「誰がジョニーですか…、俺は寝起きで身体が動かねーっすよ」

「知らないよ、あたいより先に寝てるのが悪いんじゃないか。よって、あたいは傍観してるよ」

身体を完全にリラックスさせ、動こうとしない小町さん。

しようがない、黙ってみているわけにもいかないし、俺が動くしよう。

「ヤレヤレ…、その靈魂さーんっと。」

重たい身体を動かし、四肢を扱い靈魂の場所まで飛んで移動する。

試しに、と靈魂に言葉をかけてみるが、返事は無い。

それどころか、突然靈力弾を放ってきた。

「おっと、危ねえな。…あー、めんどせーけど始末すつか。」

この世界の奴らは靈力をそのまま放出しているから、効率が悪いっ
たらありやしない。

かくいう俺も、始めは靈力弾なるものを使用していたのだが。

「風遁・圧害」

掌を靈魂に突き出し、技名を宣言する。

何故か俺が靈力を練り、技を想像するだけでその名称が頭に湧いて
出てくる。

そして靈力を練る事で、風やら炎、さしては雷までも操る事ができ
る。

無論、大きな術技ともなれば手を巧みに動かす、印なるもので変換
する必要がある。

これも、俺が靈力を扱いだした頃に頭に湧いて出てきたものだ。
頭に浮かべば馴染むのも一瞬だった。

食事の際に、料理の横に置かれたスプーンの使い方を知っているの
と同じで、扱ってみれば後は身体が勝手にやる。

「——ハハッアツケナインダネ、魂ッテ…ウ、ウワアアアア…ッ！
」

どこその人間の台詞を吐き捨てた靈魂が、そのまま術により遠くへ
ぶっ飛ばされた。

というか、喋れたのかお前は。

「はあ、後はお隣の渡し船の奴に任せればいいわな」

風の力で靈魂を隣の、といっても遙か遠くの渡し船担当の死神に押し付ける事に。

「意識ある靈魂はめんどくせーんだよなあ、報告書とか書かないいけねえし…って」

俺がトボトボと帰還すると、先輩上司である小町さんは既に夢の中であつた。

「畜生…これじゃあ俺が寝れねーじゃねえか…」

二人で渡し船を担当——つまり、一人眠ってしまえばもう一人が番を取る形になる。

こうして、先輩上司に当たる小町の尻を拭う破目になった愚図（仮定）であつたとさ。

小町さんが寝ている間も、当然職務は遂行せねばならない。

寝ていても仕事ができるのか、と質問されればイエス、と答える。

「しかし大丈夫なのか…」

俺は渡し船を漕ぎながらも呟いた。
漕いでいるという事は、絶賛靈魂運搬中な分けでして。

三途の川は幽霊自身の生前の行ないをあらわす歴史の幅である
幽霊の所持金額が多ければ多いほど三途の川幅が0に近くなる。

「ま、そんな事言っただけよ。小町さんが寝てるんじゃあ川幅も操
れないってもんだぜ」

三途の川の渡し船担当は何箇所か設けられている。

当然各持ち場に渡し船を操船する死神がいるわけで、皆何かしらの
能力で川幅を操る事ができるそうだ。

小野塚小町さんは、直接距離を操る事ができる。

他の持ち場の死神は…知らない。

要は靈魂の生前の行いで、三途の川を渡るのに苦労するかしないか、
って事だ。

善行を積み、他人から多くお金を使って貰っていけば、幽霊になっ
た時の所持金額が変動する。

・・・まあ、結局のところは幽霊になった時点の所持金額によって
三途の川の幅が変わるって事だ。

「コイツは極悪人だったのかねえ、雀の涙ほどしか持ってねえとは
な」

こんなんじゃあ駄菓子を手一杯しか買えないぜ。

「…ま、良いか。小町さんも寝ちまつてるし、悪人だろうが善人だろうが幅は変わらねーしよ」

こんな調子で何人か三途の川を渡らせた。

それも二桁に達するかというところで、漸く我が先輩上司、小野塚小町が目覚ました。

「おはよう、職務は真面目にこなしているかい？」

欠伸をし、更には気持ち良さそうに伸びをする小町さん。

「ええ、まあ。しっかし幻想郷っつーところは大して死者も来ませんねえ」

俺が率直に疑問を吐き出した。

「元々人の数が少ないみたいだしね。外の世界を担当してる死神は毎日が多忙みたいだよ」

俺の疑問に解答する小町さん。言葉尻に、早く自殺する死神が出ないかねえ、と呟いてた。恐ろしや。

「こんなだから、お前もあたしもサボり癖何かついちまつたんじゃ

「あないかねえ」

「小町さんのサボり癖は天性ですよね。俺は此処に左遷されてから身に染みちいましたよ。」

「ま、仕事を適当にやる事については俺も天性ですがね。」

「あたいはお前と違って仕事には真正面さね」

「適度に手を抜かないとやってられませんよ、こんな仕事」

俺と小町さんが駄弁っている理由としては、仕事量の少なさだ。

一日中渡り船の船頭を努めていたのにも関わらず、その靈魂の数は二桁にも満たない。

こんなんじゃあ働き盛りの若者二人にはサボりの一つや二つ程度、簡単に身に付くだろう。

「それも程ほどにしときなよ、映姫様にバレでもすりゃあ完璧にヤバイからね」

「分かってますって。あんな小さいのでも怒らせたら、俺程度は殺されちまうかもしれませんし。」

小町さんは四季映姫様に忠誠心はあるみたいだが、俺には大して忠誠心はない。

もしそれがあるとすれば、主従関係による忠誠ではなく、上司と部下という立場上の忠誠心であろう。

「はっはっは！何言ってるんだい。あたいら死神が殺されはしない

よ。」

「あたいらと言われましてもねえ、俺はまだ自分が死神だって自覚はないですよ」

「映姫様の事だから、あるとすればまた何処かに左遷させられるんじゃない？」

実のところ、俺は四季映姫様により小町さんの処へ左遷させられて来たのだ。

始めに所属した渡り場所は割りと多忙であり、適度に手を抜く俺何かは毎日が叱責の日々であつた。

仕事ができないから左遷させられた、という訳ではない。

多忙な船頭場を担当する年配の死神は、スパルタ性もあり仕事を真面目にやらない俺に遂に鉄拳制裁を下したのだ。

日頃の上司に対する鬱憤も溜まっていた俺は、その年配の死神ともめてしまったのだ。

それを見かねた四季映姫様以下、あの世の執行役員の皆様方が私の左遷を決定致しまして。

そうして小町さんの持ち場である、幻想郷の渡り船を担当する破目になったのだ。

単に仕事量が少ないから幻想郷の渡り船に左遷させられたわけじゃない。

「・・・まあ、本当に自分が死神になったか試したくなったら言いなよ。」

あたいが直々に頸を刎ねて証明してみせるからさー！」

小野塚小町は、死神の中でも頭一つ飛び出た実力者であるからだ。そしてその性格ゆえに、俺のような怠慢癖があり、更には口も悪い性格も容認しているのだ。

万が一俺が暴れたとしても、上のお偉い方は小野塚小町なら俺を止める抑止力となると思っているのだろう。

「止して下さいよ。自分で自分の頸を刎ねるならまだしも、俺の頸を刎ねられたんじゃあ普通は死にますよ」

ま、その豪快な性格が嫌いじゃあない上に、仕事もそんな苦ではないので現状に甘んじている。

微妙な変化は好きだが、大きな変化が嫌いな俺は、今の生活がずっと続けば良いと願っている。

「大丈夫だつて。死神なら頸を刎ねても、縫合して安静にしとけばまたくっつくよ」

「その発想が有り得ないと思える俺は、きっと前世は人間だったんでしょーね」

だからこそ、こうして仕事が終わりを迎えても小町さんと駄弁っている事が多い。

他に話相手がいないのもあるが、仮に他の死神と会話を始めると俺がダメなパターンが多い。

俺の渾名が渾名だけに、他の連中は平然とその名で呼んでくる。

穏やかな気分の時はどうでも良いが、ピリピリしている時に呼ばれると怒りが爆発してしまいかねない。

「さてと、あたいは映姫様に報告しに行ってくるよ」

「了解です」

小町さんは仕事が終わる度に、事後報告を映姫様にあげに行く。下っ端の俺はそれに追従する義務は無いので、適当に散策に出る。

俺は適当に辺りを散歩する。

あの世は広いので散策のし甲斐があるが、変化が乏しい場所なので飽きが来るのも早い。

何の宛てもなく散歩していると、川原に辿り着く。

「嗚呼、胸糞悪い所に来ちまったな」

此処は賽の河原である。

三途の川の川原である場所だが、自分の担当する場所とは違う場所だ。

幻想郷の川原には基本的に何も無い。

未練や遺恨を残している愚か者が少ないからだ。

居るとすればそれは力を持て余した哀れな妖怪くらいか。

だが目の前に広がる賽の河原は、外の世界の三途の川に属する場所だ。

眼前に広がるのは、子供や老人が川原に石を積み上げている風景だ。

「・・・ちつ、鬱陶しいんだよ！」

俺は目の前で子供が積み上げた小石の山を蹴り飛ばした。

腰くらいに位置するまで積みあがった小石の山は、真横からの衝撃に耐えられず、無残にも崩れる。

やっとの思いで積み上げた小石の山を蹴り崩された子供の霊は、”

嗚呼…”と泣きながら呟くだけだった。

それを合図にしてか、付近で石を積み上げていた子供や老人の霊が一斉に逃げ出す。

「石を積む行いは三途の川を渡る事には繋がらねえ。

此処は正しく、未練や遺恨を残した屑供の溜まり場って訳だわな」

俺に気付いた子供の霊が逃げ出す様を見て、思わず笑みが零れる。

「・・・うん？」

ふと気配に気付いて横に目を向けると、逃げようとしないう子供の霊がいる。

その子供が積み上げた小石の山は、この辺りでは一番大きかった。

「くだらねえ事してるじゃあねえか。」

俺が徐々に近づくと、子供の霊は自分が積み上げた小石の山を全身を使って守ろうとする。

俺はその様を見ていると、面白くて面白くて。思わず喉の奥から笑い声が漏れてくる。

「さつさと消えちまえよ。目障りなんだよ、オメーはよ！」

傍から見れば八つ当たりとも取れる俺の言動に深い意味はない。

言葉と同時に俺が小石の山を”破壊”すると、それを庇っていた子供の霊も蹴鞠玉のように飛んでいった。

喉の奥から搾り出したかのような、或いは潰された牛蛙のような声を出して子供の霊が砂利に叩きつけられる。

足取り悪く立ち上がると、一目散に逃げ出す子供の霊。

「———たく、救われないねえ。どいつもこいつも。」

此処で石を積み上げている連中は、生前に未練や遺恨を残して成仏し切れなかった靈魂だ。

未練を残したのが全員此処に堕ちてくるのではなく、幼いうちに命を落としてしまった子供などが多い。或いは、孤独死をした老人ども。

「石を積む事が善行だと思ってやがるんだな。……んな事する暇あんなら三途の川を渡っちまえっつーのに。」

……いや、幼いうちに死んだのだから所持金がないのか。

そう考えれば、石を積む事で金でも貰ってるのかねえ。

どちらにしろ、愚かな行いであり、俺としては目障りなほど鬱陶しい行いだぜ。

だからこつして、暇を持て余すたびに隣の賽の河原へと出向く事がある。

怠慢勤務（後書き）

はいどうも。

因みに今回のコンセプトは、悪人風味の効いた主人公、です。
正義に燃える熱い人ばかりなので、こんなのもアリかなあと思っ
て書いたのです。

で、そんなこんなでやはり飛段成分多い。

戦闘の台詞なんかは、アスマvs飛段のもろパクリになりました。
心臓を一突きだぜ！

以上です。

既に執筆済みですので、次回は予約投稿となります。

ここまでの御精読、ありがとうございます。

愚図

「あつ、グズ先輩！」

賽の河原で暇を潰した俺を呼び止める者がいた。

「なんだよ…、つつかオメー誰だ？」

このように、俺と初対面にも関わらず愚図呼ばわりする不屈き者がいる。

まあ、当然といえば当然かもしれないのだが。

「ヤマザナドウ様が先輩を呼んでいましたよ。」

どうやらコイツは映姫様の言伝を預かってきたらしい。

その言伝とは実に簡潔で、解かり易い物であった。

「はいよ、ご苦労さん。つつかお前さん俺より格下かよ…」

目の前で俺をグズと呼ぶ後輩らしき人物。

敬語や俺の事を先輩と呼ぶ辺り、実質俺のほう先輩なのだろう。

その後輩分が俺に、確かに伝えました。と言うや否や俺の前から姿を消した。

「さつてと、嫌な予感しかしねえけど行ってみるとするかねえ」

上司の御呼びとあらば、部下としては有無を言っ前に足を運ばねばなるまい。

そして四季映姫・ヤマザナドウの仕事場へと足を運ぶと、そこには見知った顔がいた。

我が先輩上司に当たる、小野塚小町その人だ。

「四季映姫様、何か御用ですか？」

小町さんは既に映姫様に説教された後のようで、小さくなっていた。数時間後の自分の姿を想像し、気分を曇らせる。

「やっと来ましたか。……………名前が無いと呼び難いですね」

四季映姫様は俺の事を愚図呼ばわりはしない。

理由は知らないが、恐らくは体裁という奴なのだろうか。

「そうですねえ。此処の生活での一番の悩みですよ」

それで一体何の用件だろうか、と再度訊ね様とした処で映姫様から切り出される。

「貴方が私の言い付けを守っているか、再確認しようと思ひまして。」

「言い付け、ですか。そりゃあ守ってますよ。最近では暴れてませんし、言葉遣いだって、ご覧の通りです。」

四季映姫様が俺を左遷する前に、色々と約束事が生じた。

まあ、聞いての通り、見ての通りなのだが。

暴れるな、綺麗に話せ、仕事を真面目にやれ。

「確かに貴方は改心し、立派に職務を真つ当しているようですね。下品な言葉も少なくなりましたし、上出来です。」

「いえいえ、滅相もない。」

「今日の幻想郷での靈魂は如何でしたか？」

映姫様が今日の成果を聞いてきた。

おかしいな、その事については小町さんが報告したはずなんだが。

「本日は若干8名つて処ですかね。相も変わらず仕事量が少なくて暇を持て余しますよ。」

「可笑しいですねえ、小町の報告書と数が合わないのですが。」

映姫様が然も不思議だ、と言わんばかりの表情を浮かべる。

「それに小町担当の渡り船方面から、謎の突風と共に靈魂がぶっ飛んできたと報告が上がっています。」

コレ、貴方の仕業でしょう？と四季映姫様が俺を見据える。

確かに俺の術技ならば風を起こす事も可能だし、今朝靈魂を一人隣の持ち場の奴に押し付けた。

俺が思考を巡らせていた為に口を紡いでいると、映姫様が捲くし立てる。

「困るんですよ。何が困るかって、その事態に対する対処報告が上がってない事何ですよね。」

靈魂を押し付けた事に関しては問題無いようだ。

「良いですか、全ての仕事に対して言える事。報告、連絡、相談。この三つであって——」

嗚呼、映姫様の説教が今夜も始まるのか——

さて、映姫様の説教は読者諸兄も聞く耳もたない事であろう。ここいらで俺の容姿の話をしようじゃあないか。

記憶を失くしているわけで、身長体重は不明だ。

性別が男という事は分かるので、その関係もあり慎重は大きいほう

だろう。

映姫様は当然、小町さんよりも身長は大きい。

髪型は逆毛、と言ってしまえば漠然としているが、前髪を後ろへ流している。

オールバック、と言ってしまうと少々語弊が生じるかもしれない。色は銀髪、或いは白髪。此処に堕ちてきた当初から銀色であったので、前者と考えたい。

小野塚小町に出会った当初は、目つきが蛇のように鋭いな。と言われたのは今でも憶えている。

服装は鎖帷子、上下薄い緑色と思わせるが、上半身の鎖帷子は黒を基調としている。

これ等の服は普段は見えないようになっている。

その理由としては、俺があのに世に堕ち、死神という職務に就いた時に大鎌と供に渡された黒の外套を着込んでいるからだ。

真っ黒な外套が中の鎖帷子などを戦装束を隠してくれている。

常に戦装束では何かと敬遠されがちであったが、外套のお蔭で問題なく、死神らしく生活できている。

「…なあ、グッさん」

小町さんが俺に小声で話しかけてくる。

映姫様の説教が大よそ二時間を越えた辺りの頃だ。

「グッさんて何ですか。俺は今、読者諸兄に説明を…」

「グッさん映姫様の話聞いてたか？」

「聞くわけないじゃあないですか。既に耳にタコができてますよ。」

小町さんが小さくなりながらも、俺に訊ねる。

「…良いのか？グッさんこのままだとまた左遷されるぞ？」

グッさんというフレーズを気に入ったのか、俺の中でビールに対しての葛藤が生まれた。

「左遷って…どういう事ですか？」

「映姫様がお前に——」

小町さんが俺に説明をしようとしたところで、映姫様から叱責が飛んでくる。

「私の説法を前にして私語とは、随分偉くなりましたねえ、小町？」

「いえいえ、滅相もない……」

「ま、良いでしょう。そういう訳だから、貴方には幻想郷へと赴いてもらいます。」

「——あん？」

四季映姫様から聞こえてきた、理解するには少々時間を有する発言に思考が停止する。

俺の上司に対しては若干無礼な返しに、映姫様は若干眉目を歪めた

が、それに留まった。

「ですから、貴方には幻想郷へと赴いてもらいます。そこで私に代わり、多種多様な種族が入り混じる幻想郷の住人に、”白黒”を付けてきてもらいたいのです。」

「白黒、ですか。」

「ええ。小町の持ち場は彼女一人で十分対応できます。かと言って貴方を他の持ち場に左遷すれば、前のようなトラブルになるでしょう。ですので、貴方には幻想郷へと赴き、罪人に直接審判を下してほしいのです。」

詰まるところ、やっぱり仕事できないから異動してもらうよ。だけど他の持ち場にいつてもトラブルメーカーだね。だから単独で幻想郷で……。って、どうみても島流しです本当にありがとうございました。

問題児である俺を追いやるには丁度良い理由である。

「直接審判を、と言ってもそれは死神の仕事じゃあ無いですよね。」

「いえ、それも立派な死神の役割です。そもそも死神の役目というのは――」

嗚呼、墓穴を掘ってしまったようだ。

隣にいる小町さんも、何をしているだ。と言わんばかりに俺を睨みつけている。

そうして若干30分に及ぶ説明が終わりを迎える。

「ですから、死を迎える予定の人間、或いは妖怪を魂のみの姿で彷徨い、悪霊化するのを防いでもらいたいです。

…当然、寿命の続く者でも、悪行を働くものであればそれを正すのも忘れずに。」

「分かりました。」

口上では了を言うが、実のところ半分も聞いていなかった。

「…ですが、俺にそんな役目を任しちゃって良いんですかねえ。」

「他でもない貴方にしか頼めない仕事なんですよ。幻想郷は基本的に平和ですが、血の気の多い人間も多いですし。」

俺の事を血の気の多い、戦闘狂とでも思っているのだろうか。

こんな流れで、俺が幻想郷という地に直接送り込まれる事が決定してしまったのだ。

まるで島流しを宣告されたかのように、あの子の空気は冷たかった。周りのお偉いさん方には、またコイツか。と言った冷めた表情で睨まれ、同僚は目を合わせようとすらしらない。元々、他の死神との関係は疎遠だったのもあるだろうが。

「お前も大変だねえ、…あたいの落ち度もあるんだろうけどさ」

「小町さんは悪かないですよ。元々俺にや向いてねー仕事だったっただけで。」

普段の豪快さを残しつつも、俺に対する罪悪感を顕にしている小町さん。

俺としては大して気にしていない。大きな変化は嫌いだ、噂の幻想郷に行ってみるのも悪い事じゃないだろう。

「ところで、幻想郷ってどんな所なんです？」

「そうだねえ…非常識人が多い所、かな。」

後は宴会が多いな、と付け加えたが、酒に通じない俺には大した話ではない。

「あたしも幻想郷に行く時は仕事をサボる時ぐらいだからねえ。何所が栄えていて、何所が貧しいかは分からないな。」

「そーですか。…うーん、当ての無い旅も悪くないけどねえ。」

当ての無い旅は嫌いじゃあない。

だが後先考えずに行動し、身寄りもなく住処も安定しなければ流石にヤバイ。

そういった意味では、幻想郷に行った事のある小町さんの知恵を借りたかったのだが、ご覧の有り様だ。

「当ての無い旅、か。頼れる奴ができなけりゃあ、異変でも起こして見れば良いんじゃないか？」

「異変…とは？」

異変と言う単語を聞いたことがないわけじゃあない。

俺が死神として働いていた頃に、何度か耳にした事がある。

ま、その時は外の世界の持ち場を担当していたので実体験したわけではない。

「異変つてのはねえ…、あたかも具体的な説明はできないから何とも。」

例えば春なのに冬が続いたり、夜が明けなかったりとか？」

「へえ…、って。そんな異常気象みたいな異変なんて起こせるわけじゃないじゃないですか。」

夜が明けない、何て異常気象を遥かに超越して原因すら不明のレベルだろう。

「ま、今のは例えだよ。幻想郷の力のある連中は血の気が多いからね。過去に異変騒動を起こした奴も異変が解決した後には、仲良く酒を飲み交わす仲に進展してるからね。」

全く、可笑しな連中だよ。と笑いながら語る小町さん。
そんな小町さんが、俺に注意を促す。

「気をつけなよー、お前は死神だから死にはしないだろうけどさ。幻想郷で力のある連中は皆、能力者だからね。」

「能力者…？小町さんでいう、距離を操る程度の能力、ってやつですかね」

「そ。後は種族には気をつけな。人間の姿をしてるからって、舐めてかかると返り討ちに遭うよ。」

「何だか争う事前提の話になってますねえ。俺だって話し合いで解決できるならそうしますよ。」

でも面倒臭い事になるなら、破壊して解決するのも悪くない。
そう考えてしまう俺は恐らく、まだまだ精神が幼稚なのだろう。

「何にせよ、それ程戦闘狂が多いって事だよ。前に教えただろ？スperlカードルール。
あれに託けて弾幕ごっこだ、と言って迫って来る事があるからね。」

「弹幕ねえ、俺は苦手ですね。直接戦うのが一番良いですわ」

そう言っただけ俺は手に握る黒く刀身が赤い、更に三つの刃が設けられている異形の鎌を地に叩く。

「相変わらず変な鎌だねえ。映姫様も良くもまあそんな鎌を所持していらしたもんだ」

「最初は扱いにくかったがね、今ではコイツが一番使いやすいですよ」

刃が三つも付いているのは、俺の能力に関する事である重要な役目を担っているのだが。

このように幻想郷の話や鎌の話で盛り上がっていたのだが、話が逸れていたのに小町さんが気付く。

「――で、クズは名前にするのかい？流石に幻想郷に言っただけ名前がありません、じゃ不審者も良いところだ」

「その軽い言い方が妙に腹が立ちますね。名前は考えてみたんですがねえ、自分じゃあどうにも思いつきませんよ。」

「じゃあ、あたいが命名してやるよ」

もう何度目かになる、小町の命名案。

その度に聞いてみたり、黙秘を貫いたりするのだが。

「名前を命名してもらうのは良いんですがね。改名して、次からそれで反応しろ。と言われても難しいものがありますよね」

例えば太郎、という名前の人がいた。

その人に、お前の名前は明日からステファニーだ。と言っても無理難題がある。

「その点に関しては小町先輩に任せると良い」

「ジョニーだのグッさんだの呼んでいた人を信じろ、と言われてしましてもね」

「お前の眼は蛇みたいに鋭いからな。そして事ある毎に暴れていたな」

小町さんが俺の身体的特徴を指摘し始めた。

幾ら鈍感な俺でも、命名した名前を説得力ある物にする布石、という事は理解できる。

「事ある毎に暴れてたのは昔の話です。小町さんの所で暴れた憶えはないですよ」

自分でも吃驚するほどに、小野塚小町という存在は俺の抑止力となってくれていた。

「九頭龍」コレがお前の名前・・・」

小町さんが聖人のような笑みでそう告げてきた。

「そんな偽善者ぶった瞳で訴えられてもねえ。どうせ愚図と九頭をかけたんじゃあないですか？」

思った事をぶちまける。

愚図を九頭。　つまるところ、言葉遊びだ。グズをクズ。

くだらねえ、と思いつつも、渾名の九割を含んだその名前は、自分に適しているんじゃないかとも思ってしまう。

「あたかも文献で読んだ程度なんだけどね。九頭龍ってのは蛇の化け物の事なんだよ。

ま、色んな説が存在するけどね。お前の蛇目に暴れ癪。そして此方で渾名で考えても丁度良いだろう？」

内心自分でもそれで良いか、と思っている俺は

「ああ、まあ。そうですね」

と返すことしかできなかった。

俺のその言葉を肯定と受け取った小町が、けらけらと笑いながら喋る。

「はっは！ツて事はあたいがお前の名付け親って事になるのかねえ」

「そうですね、小町さんが俺の名付け親ですね。」

下手に言葉を返すと、どう弄られるか分かったもんじゃあない。此処は面白くない返答であろうと、オウム返しするのが最適だ。小町さんも俺のこんな対応には慣れたのか、話題を変える。

「九頭は、明日にでも出立するんだろう?」

口調も穏やかになり、明日の予定の事を訊ねてくる小町さん。先程命名した九頭龍の九頭と言っているのか、或いは普通にクズと言っているのか。

そこは言葉のニュアンスによるので、俺には判らない。

「そうですね。朝にでも此処を出ようと思っています。」

お偉いさん方のほうで、手続き云々は既に終えているようで。後は俺が出立するのみである。

「そうかい。…じゃあ最後に一杯、酌み交わさないかい?」

小町さんが悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう訊ねてくる。断る理由も無し、酒に通じてない俺でも今宵ばかりは良いか、と。

「構いませんよ、全然」

俺が了解を取るや否や、小町さんが懷から酒瓶とお猪口を取り出した。た。

その表情は、非常に喜々としたものだった。

「そう言うと思ってたよ、あたい特製の高級酒を用意してたのさ！」
取り出した酒瓶に書いてあったのは、”死神殺し”
不死の死神を殺すというのも可笑しな話だが。

「あー、不穏な空気じゃありませんわ。大体、死神殺しって何ですか。こんな飲まされた日にゃあ、明日の朝日は拝めそうにないだろ…」

最後のほうは眩き気味に言う俺。
それを確りと聞き取っていた小町さん。

「はは！やっぱお前は敬語よりもタメ口のほうが似合ってるよ」

言いつつ、お猪口に酒を注ぐ小町さん。

「元々はタメ口でしたしね。映姫様に説かれなかったら、恐らく今こうして敬語を使ってる事もなかったでしょうね」

「まったく、九頭は映姫様に何をされたんだい・・・」

グイツ、とまずは両者共に一気飲み。

その度数の強さに、俺は思わず咳き込み、喉を詰まらせた。

「はっはっは！弱いねえ、九頭」

対する小町さんは何でも無かったかのように、二杯目を注いでいた。

「グッ、ごほっ…何で死神殺しなのに平然と飲んでられるんだよ…」

思わず本音が零れるが、小町さんは気にしない。

グビグビと飲み続ける小町さんに、一口含むだけで顔を赤ませる俺。とても酌み交わしていると言いたいその光景だが、小町さんはご満悦だ。

酒もそろそろ尽きる頃に、小町さんが改めて口を開いた。

「なあ、九頭。」

「何です？」

酔いが回り、思考が上手く巡らなくなっている俺に小町さんが話しかける。

同じく酔いが原因だろう、頬を染めて甘美な声が俺に耳に入り込む。

「やっぱ、あたいに敬称は付けなくていいよ。それと、下手糞な敬語もね」

今までに何度か聞いたその言葉。

それを実行するたびに、やっぱリムカツクから止めよう、といった話になる。

「そーですね。気が向いたらそうさせてもらいますよ」

「気が向いたら、ねえ。九頭と顔を会わせるのも最後になるかもしれないってのに、つれないねえ。」

「なに、生きてたらまた会うこともあるでしょーて。何せ、俺達は

死神なんですから。」

「なんだ、自分が死神って事を遂に認めたのか？」

「この酒飲んで一発で酔っちまう辺り、俺も死神って事なんですよ
うね」

お猪口数杯で酔ってしまった。

不甲斐ないと言えばそれまでかもしれない。

だが、元々アルコール度数が強いうえに、その名を冠するのが”死神殺し”。

俺は酒に通じていないが、弱いという訳じゃあない。

「九頭もあたいの所に左遷された時とは、随分成長したじゃあないか。…こんな遅くなっちまって」

小町さんのほうも酔いが回り始めたのか、俺にボディタッチでその成長ぶりを確認してくる。

正直、ここでカミングアウトするならば、俺は下心満載の変態だ。

豊満な胸の女性がお触りしてくるとあらば、男として”嫌”という気分にはならないだろう。

むしろ自分としては歓迎状態だ。コレがシャイなボーイならばノーサンキューだろうがね。

詳しい状況は説明できないが、俺の冥界を出る最後の夜はこんな感じで幕を閉じた。

最悪の朝を迎えた。

何が最悪かって？そんな事は言わずもがな。

昨晚の盛り上がりへの代償とし、今朝の二日酔い。

若干自分の肌にツヤを感じつつも、二日酔いによる吐き気、頭痛からは逃れられない。

「よお、起きたな九頭。」

男らしくも声質は女性。正しく小野塚小町その人である。

俺に対する呼び名がクズなのか、それとも九頭なのか。

呼ばれる度に疑問に感じるが、それも一瞬だ。

「…おはようございます、小町さん」

気だるそうに身体を起こす。事実、身体が重かった。

「なんだい、あたいの事は普通に接して良いと言っただろう？」

「昨夜にそう言われても、はいそーですか。とは言えせんねえ。理解はしているつもりですが。」

「ま、それも九頭らしいっちゃ九頭らしいけどね」

小町さんとの他愛の無い朝の挨拶を交わし、俺は早々に仕度を終える。

どうやらお偉いさん方との顔合わせはないようだ。

四季映姫様には口酸っぱく、色々と指摘されたが。

それでも盛大とはとてもじゃないけど言えない、質素な旅立ちである。

見送り兼、幻想郷までの案内をしてくれるのは小町さんだ。

無縁塚という場所に辿り着いた。

この時点で、幻想郷との事だ。だが、小町さんは魔法の森まで送ると言い張るのでそれに甘んじることにした。

そのまま通り道に、再思の道という場所を通った。

幻想郷は現在、冬を思わせる気候だ。

この再思の道というのは、秋になれば彼岸花が咲き誇り、自らの命を絶とうとする人間が、

彼岸花の毒気によって生きる気力を取り戻すことから「再思の道」と呼ばれている。

そしてそのまま暫く歩くと、魔法の森らしき場所に出た。

道中、何故距離を操る能力で道を縮めなかったのか訊ねたが、

まあ、良いじゃないか。歩くのは健康に良いんだぞ。とはぐらかされるばかりであった。

「さあ、着いたよ。ここが魔法の森だ。」

壮大な森が永遠に続くかと思わせる、魔法の森。

入り口を見ただけで、森に入るのに恐怖を覚えてしまうほどに壮大であつた。

「ありがとうございます、小町さん…つと。」

俺は小町さんにお礼の言葉を述べ、早々に魔法の森に入ろうとする。別れよりも好奇心が上回つた結果だ。

そんな俺を見て小町さんが、待ちなよ。と俺を諫める。

「もし行き場所…いや、生き場所かねえ。それに困る事があつたら戻ってきなよ。」

少しくらいならうちで世話してやってもいいよ」

鎌を背負い、右足のつま先を左足の左側に置く…つまり、立ちながら足を組む。

「生き場所…ですか。ま、困つたら訊ねてみますよ。」

「ああ、そんなときや無縁塚の墓地に来な。気付いたら迎えに行つてやるさ」

ニイツ、と子供のような笑顔を浮かべる小町さん。

思わず魔法の森を前にし、若干の恐怖に煽られた俺から毒気が抜けた気がした。

そして小町は、それと、最後に……。とまだ俺を呼び止める。

「最後に一度くらい、あたいの名前呼んでくれても良いんじゃない？」

「……？名前ならずっと前から呼んでいるじゃあないか。」

何を可笑しな事を、と思いつつも、昨晚の事を思い出して思わず表情が緩む。

そして俺は目の前で此方を見つめる小町に対し、名前を呼ぶ。

「またね、小野塚小町。今度また一緒に酌み交わそうか。」

「——ふん、素直じゃないねえ」

「お互い様だ」

互いに大雑把な性格でも、やはり不器用な部分は存在するわけで、それが互いに同じ処で不器用なだけだったのかもしれない。

こうして俺は小町と別れを告げ、小町のほうも次までに死神殺しを造酒しておく。との事だ。

俺の眼前には壮大な魔法の森。さて、コイツをどう突破するか——

どうやって魔法の森を突破するか、なんて考える必要もなかった。

「飛べば良いんだよな、飛べば。わざわざ森に迷い込む必要もないって訳だ」

魔法の森上空を飛びながら呟く。

眼下には広大な魔法の森が広がる。

飛ぶ事により、魔法の森で迷い込む事を回避できた。
だが、飛ぶことによりデメリットも存在する。

「…冷えるな。」

冬の乾燥した風がモロに直撃する。

それは当然、俺の体温を確実に奪ってゆく。

「嗚呼、駄目だ。森を抜けたら直ぐに降りよう。」

この寒さでは、流石に死神といえど死んでしまうかもしれない。

いや、実際死にはしないだろう。だが、人の成をしている以上、体温が下がり続けるのは好ましくない。

俺は早々に地上に移動を切り替えようとした。

森を跳び越し、眼前に広がるのは野原だ。

あの世とは違い、陰湿な空気など毛ほども感じられない。

「あの世とは違うねえ。こんな朗らかな時は、寝るに限る。」

四季映姫様は、幻想郷で白黒審判を下して来い。との事だが、期限のような物は告げられなかった。

という事は無期限なのだろう。
白黒つけると言っても、悪行を積んでる物がそこいら中にいるわけじゃなし。

俺は自由気ままな幻想郷ライフを送ることにする。

頭の中に湧いて出てくる印を結び、大量の霊力を込める。

総量の大よそ8割といった、膨大な量だ。

印を結び終わり、大地に手を付けると共にその霊力を解き放つ。
術名も自然と、頭の中に湧いてくる。

「四柱家の術」

そう呟くと、俺の前方に木製で出来た一軒家が地中から姿を現す。
地中に隠してあったのではなく、俺の霊力によって具現したものだ。

「――ふう。今日は此处で寝るか。」

ほとんどの霊力をつぎ込み、思わず身体が重くなるが、代償なので致し方ない。

代わりに立派な拠点ともなる家を、簡単に手に入れたのだから。

魔法の森付近に突如出現した木製の家。

誰がどう考えても、怪しい作りだろう。

そんな事など露知らず、”九頭龍”は床に就くのであった。

不死の片鱗（前書き）

あとがきにて、書き忘れた事を書いておきますので、興味ある人はよんでみてください。

不死の片鱗

——目が覚める。

先日とは比べ物にならないほどに、素晴らしい朝を迎えることができた。

あの世とも違い、木造で造られた家の窓からは快晴を窺える。

こうして見れば九頭龍は、この上なく素晴らしい一日を迎えられるようにも捉えられる。

「・・・なんだよ、コレ」

家内に広がる霧が、それを否定するのが分かる。

今朝、素晴らしい朝日と共に目覚めた俺は、晴れ晴れとした気持ちで一階の、所謂リビングまで足を運んだ。

しかし、リビングに辿り着くや否や、異変。

「家の中でも霧ってのは発生するもんなのか」

階段からリビングを見下ろし、思わず呟く。

読者諸兄も思うだろう？朝起きて、喉を潤そうと台所まで足を運ぶ。そうして台所のある場所に着くと、視界も儘ならない濃霧が包んでいたら悟りもする。

そもそも霧とは、水蒸気を含んだ大気の温度が下がり、水蒸気が小さな水粒となって空中に浮かんた状態の事を指す。

別段、害のあるようなものにも見えないので、パニックに陥る事はなかった。

「ま、良いか。とりあえず水が飲みてえ。…つつても即席で建てた家に給水施設はない」

当然と言えば当然。

立派な成りをし、外装も内装も立派な家。

風情のある大人数が囲める木製のテーブルに、それに見合う飾り気の無い、だが確かに己を主張する椅子。

インテリアは完璧だが、それらに見合う施設などはからっきしだ。水道など当然、井戸すらも存在しない。

「近くに川があるはずだ。…とりあえず飛んで探すか。」

俺は簡単な木で出来た水汲みを持ち、川を探す事にした。

家内に広がる霧は…まあ、昼になって暖かくなれば収まっているだろう。

上空へ飛び、冬の寒さを感じつつも幻想郷を見下ろすと目的のものはすぐに見つかった。

川があるという事は、その付近に人間が住んでいてもおかしい話ではない。

近くに人里があるのだろう。

まあ、人間には興味が無い。そして仕事も、勝手に転がり込んで来るまでは遂行する気も起きない。

「この川にも魚はいるんだな。あの世と違ってグロテスクなのがー匹もいねえな」

俺は水を汲みつつも、優雅に泳ぐ川魚を見て感想を零す。

三途の川の魚は、太古に絶滅した魚が主だ。

そうもなれば当然、見た目もグロテスクな種類が多くなる。

幻想郷に生息してる魚ならば、捕獲すれば食べられそうだな。と考
えながらも汲んだ水を家に持ち帰る。

木造建築で出来た我が家に戻ると、案の定霧は消えていた。

やはり気候による物だったか。朝よりは若干気温も上昇している事
だし。

だが、中に入り所謂リビングに足を踏み入れると、またしても奇想
天外な事象を目の当たりにする。

「・・・なんだよ、コイツは」

俺が四柱家の術で創造した家。

外見に見合う立派な、大人数で囲めるテーブルに見た目幼い女の子
と思われる人間が寝ていた。

手に持っていた水を、形だけは確りと作られたキッチンに置いてお
く。

此処に給水施設が整えば、完璧なのだろう。と若干の文句を呟きな
がら、テーブルに大の字で眠る幼女を観察する。

「角があるな。頭にリボンをつけている。瓢箪を手をしている。」

見たままの感想を述べ、じつくりと考えてみる。

先程述べた容姿で、他所の家で堂々と眠る幼女の正体を探る。

まあ、角がある時点で鬼である事は間違いないだろう。

堂々と他人様の家に上がりこみ、惰眠を貪る度胸も認める。

「…ま、いいや。飯でも用意するか」

今の俺には、無礼な鬼を如何こうする気は起きなかった。

何せ幻想郷に舞い降りて第一号の地元民（？）なのだ。

道中、妖精のような鴉妖怪のような物体を見掛けはしたが、絡む事は無かった。

我が家にて堂々と惰眠を貪る鬼は後回しに、俺は食料の調達に赴く。と言っても、敢えて森の中に迷いに行く事もしない。

木の実や野草など、不確定要素満載な魔法の森に食料を調達しに行くよりも、

先程訪れた川にて川魚を捕獲するほうが安全であり、収穫も期待できる。

永遠に続くかと思わせる川を、我が物顔で泳ぐ川魚。

我が物顔で泳ぐのは別段どうでも良い。

問題はその川魚たちを、どう捕獲するか、だ。

「鎌じゃあ魚が潰れちゃうし…何よりも命中させる自信が湧かねえ」

銚子のように魚を捕獲するのに特化している訳ではないので、鎌で捕獲するのは至難の業だろう。

「ならば術技で…うーん…」

俺が腕を組み、有効な術を模索する。

すると何時もの様に軽い頭痛と共に、頭の中に術技が過ぎる。

それを感じ取り、若干の不安と新しい術技に対する期待を込めて、

発動を試みる。

「雷遁・感激波」

川に直接手を突っ込み、術技を宣言する。

すると、川に電撃が走り出した。

辺りを泳いでいた川魚は、その危機を察知するまでもなく一瞬にして死に絶え、気絶した。

気絶した魚が浮かび上がり、俺は上出来だ。と言わんばかりに川魚を回収する。

「少々卑怯な気もするが……。ま、大漁だな」

ほくほく顔で自宅に戻る。

中に入ってみれば、まだまだ二本角の鬼と思われる少女は眠っていた。

太陽の光も真上に上がり、時間帯的に言えば昼時であろうか。

俺は早々に腹ごしらえを済まそうと、台所に向かう。

木造建築の家で火を使うなどご法度だが、此処の台所には確りと火災予防が為されていた。

IHクッキングヒーターなどあるはずがない。

代わりに、鉄の串が用意してあった。

今まで誰かが住んでいたのであろうか、と死神の癖に少々恐怖してしまった。

炭や石などで出来た焔炉代わりの物。

鱗などを取り、何とか食せるように処理した川魚を鉄串に刺し、焼き魚にする。

塩などの、万民向けの調味料はあの世から用意してきてたりする。あの世と幻想郷での生活水準など知らないが、焼き魚をそのまま食しても微妙だろう。と、確りと塩焼きにする。

暫く焼いていると、辺りに香ばしく食欲を湧き立てる匂いが充満する。

「そろそろ出来上がるだろう。後は飛び火しないように注意してりやあ良いな」

割としつかりと焼く事ができた。

木造住宅なので飛び火して火災に至らせないよう、注意だけしてれば意外と快適に過ごせるかもしれない。

「・・・う、・・・ん・・・」

台所に立つ俺の後ろから聞こえてくる、幼い声。

どうやら香ばしい匂いに釣られ、目を覚ましたようだ。

俺は台所を後にし、幼女の眠るテーブルへと足を運んだ。

「よお、お目覚めかい？」

意識を覚醒しようとする鬼の前に立ち、その一言。

我ながら気障な起こし方だったかもしれない。気をつけよう、うん。

「・・・んん、……おお？」

目を乱暴に擦り、意識を覚醒させる鬼。
意識を取り戻し、覚醒させた小さな鬼が俺を見るなり一言。

「お前は誰だ？」

「その一言をそっくりそのまま返すぜ、此処は俺の家だ」

肩を落としながらも俺は言い返す。

大体他人の家に上がり込んで、誰だお前、はないだろう。
そんな俺の考えなど露知らず、目の前の人物に興味を無くした小さな鬼が、

周囲に溢れる香ばしい匂いに釣られる。

「んー、良い匂いが…お腹減ったぞ」

匂いに釣られ、顔をあっちへこっちへ忙しく動かす。

そして最後は小声で、お腹を擦りながら呟いた。

そんな状況に、死神ながらも憐れに思った俺は台所へ向かった。

…ま、これも地元民と縁を築く為だ。

台所には、鬼に食べさせる事を想定し、通常よりも多めに塩焼きを作っていた。

案の定予感ハ的中し、小さな鬼に馳走する事になった。

「ほら、食べよ。熱いから気をつけろよ」

俺が串に刺した塩焼きを何本か手にし、そのまま鬼に手渡す。

受け取った鬼は喜々とした表情になり、この程度じゃあ火傷なんてしないよ。と

豪快に言い放つなり塩焼きに本能のままに食いついた。

「おお！美味しいぞ、コレ！」

食べながらも塩焼きの感想を述べる。

頭から豪快に食べる様、そして骨など気にしない食べ方に矢張り目の前の幼女は鬼なのだ、と想像させる。

そもそも塩が幻想郷にあるかも分からない。

塩焼きに使ったあの世特製の塩なので、味には自信がある。手前自分はまだ食べていないが。

「そうかい、良く噛んで食べよ。…ところで、お前さんは鬼かい？」

骨ごと丸齧りする幼女を見て不安に思いつつも、目の前の存在が鬼なのか訊ねる。

それを聞いた幼女は、食べる手を止めて質問に答える。

「私は伊吹萃香、鬼だよ。…お前は何て言うんだい？」

自らの種族を明かし、名を名乗る幼女。もとい、鬼。

名前を名乗られたのであれば、自分の名乗らない訳にはいかない、と俺も目の前の鬼に名前を名乗る。

「俺は…えーと、グズ…じゃなかったな、九頭…そう、九頭龍

だ」

何年も愚図呼ばわりされていたので、ついこの前に改名していても、咄嗟に名が浮かんでこない。

そんなんで名乗ったもんだから、当然相手には

「ふーん…偽名かい？」

と疑われても致し方ないわけで。

「そういう訳じゃあないさ。今まで名前が無かったからね。新しい呼び名に慣れてないんだよ、すまない」

小町さんから聞いた、幻想郷における鬼は総じて勝負事が好きだと聞いた。

そして嘘が嫌いと来るもんなので、偽名と疑われてもしたら殺されかねない。

なので俺は、正直に身の振りを相手に伝える。

伝わるか伝わらないかは別で、相手に伝えようとする意志が大事なのだ。

「そうなんだ。すまないね、疑ったりして。…ところでお前さん、人間じゃあないね」

鬼…もとい、伊吹さんがそう訊ねてくる。

「一応、自分が人間ではないのは知ってるが、種族は分かん」

死神と知られても、相手が鬼なら別段どうって事ないだろう。

ただ説明が面倒になるかもしれないので、此処は明かさない事にする。

「人間じゃあないならきつと妖怪だよ。九頭…だっけ、お前さんはいつから此処にいるんだい？」

少なくとも、昨日までは此処にこんな立派な家はなかったよ。と伊吹さんは呟く。

これも隠してもしようがない、というより鬼相手に嘘を言っただけでもしたら命取りだ。

「此処に家を建てたのはつい先日だ。幻想郷には前からいるかなあ」

最後のほうは誤魔化しが強くなってしまい、変な口調になってしまった。

だが担当の職場が幻想郷と言えば幻想郷だったので、嘘ではない。

「へえ、そうかい。…コレ、もう無いのか？」

「まだあるぞ。俺はもういらんから、全部食え」

伊吹さんが塩焼きを催促する。

俺の腹は2本も食べれば十分に満たされるエコ仕様なので、残る全てを伊吹さんに譲った。

「お、悪いねえ。今度私の酒を飲ませてやるよ！」

そう言つて肌身離さず持つていた瓢箪を俺に見せ付ける。

正直に言わずとも、いらない。

特に酒が好きなわけじゃあないし、強いわけでもない。

「伊吹さんは此れから如何するんだ？何時までも此処で暇を潰して
る訳じゃあないよな」

「…え？その心算だっただけだ」

どうやら我が家に居座るつもり伊吹さん。

俺としては特に問題は無い。鬼と親交を深めるのも、今度の為を考
えれば深めておきたいところだ。

川魚の塩焼きを頬張っている伊吹さんを尻目に、俺は話を切り出
す。

「それじゃあ、俺は出かけてくるからね」

「うん？何所か行くのか？」

「周辺の地理を確認しておこうと思つてね。此処らの地理には乏し
いんだよ」

周辺の地理どころか、幻想郷全域に渡り地理が分からない。
昨日来たばかりだし、魔法の森くらいしか通っていない。

「そうかそうか。で、何所に行くかは決めてあるのか？」

「うーん、飛んでいる時に見えた山にでも行ってみるかね。」

「へえ、お前さんも命知らずだねえ。あそこは天狗の縄張りだよ？」

天狗か。

あの世で聞いた話では、幻想郷に昔から住んでいる妖怪であり、仲間意識が強いと併に排他的らしい。

天狗にも何種類が存在するらしいが、俺としてはどうでも良い。同じ天狗というカテゴリーに入るのなら、容姿にも大差はないのであろう。

「天狗、か。まー何とかなるだろう。死にはしねーよ」

俺が半ば投げやりに言葉をぶつけると、伊吹さんが立ち上がる。

「そうそう、さっきから言おうと思ってたんだけどねえ。」

よっころしよ、と年寄り臭い立ち上がり見せ、言葉を紡ぐ。
何やら真剣みが含まれているので、俺も黙って耳を傾ける。

「私の事は”萃香”って呼びなよ、九頭。そうだねえ、食事の礼に一つ保険をやるよ。」

妖怪の山で面倒な事が起きたら私を呼ぶといい。」

「面倒な事ねえ…、伊吹萃香の名で全てが丸く収まるのなら、これ以上の保険はないな」

「名前だけじゃあ奴らは動かないよ。私が直接解決しに行つてやるさ」

自信に満ち溢れた声で、親指を突き出す。

私に任せろ、といったオーラを醸し出している。
でも何故…

「何で萃香さんの名前で面倒事が片付くんだ？」

俺の疑問に、萃香さんが自信満々に答える。

「それはね、私が”鬼”だからさっ！」

萃香さんを家に残し、俺は妖怪の山を散策しに行く。

話に聞くと、天狗や河童などの妖怪が社会を築いている——程しか知らない。

我が家からはそう遠くない場所に位置する妖怪の山。

歩けば恐らく遠いのだろうが、生憎俺は空を飛んでいる。

無論、それは道中までだ。妖怪の山を散策するのが目的なので、山に着いてからは地上に降りる。

「意外と時間がかかったな…、入り口が分からないから途中からで良いだろう。」

妖怪の山の入り口が、新参者の俺には不明なので下の方から侵入する事にした。

地上に降り立つや否や、辺りから殺気が垣間見える。

と言っても、それは俺に向けられているものではない。

山そのものが、そういった空気を醸し出しているかのようにも思える。

これでは、並みの人間ならば山に一步踏み出す前に逃げ出すだろう。

「さてと…適当に頂上でも目指すか」

山道を歩くのが物凄く面倒臭い。

こんなに面倒だとは思わなかった俺は、妖怪などに絡まれたらすぐに下山しようと思った。

まあ、早々絡まれる事はないだろうが。

「お、コレ食えそうだな」

道中、木の実らしき物を見つけては口に放り込む。

傍から見ればまるで犬のような行動だ。

その度に、異常な苦味に口内の物体を吐き出し、予想外の酸味に顔を渋めたりしていた。

そんな中、大分山道を歩いた頃。

少し歩いた先に、通りがけには見なかったような珍しそうな物が落ちていたのが分かる。

俺は、お宝か！と思い、勇み足でそれに駆け寄る。

「・・・お宝とは程遠い物であった。…ま、物好きな奴なら欲しが
りそうだがよ」

そこに落ちていたのは、白骨化した人間の骨だった。

お宝ではなかった事に、少々残念な気持ちを抱きつつも、妖怪の山
には良くある事。と納得した。

何せ、幻想郷に来るまではその後の処理を行っていたのだから。

気を取り直しつつも、歩みを進める。

まだ中腹にも辿り着かないであろうに、その刺客は突然現れた。

突然突風が起きたかと思い、体勢を崩さぬように身構える。

かと思いきや、その突風はすぐに止み、気付くと頬には一滴の液体
が垂れていた。

「ん、誰だ。こんな奇襲紛いな事して来る奴はよ」

眩きながらも、索敵はしない。

何故なら俺の目の前に、攻撃を実行した犯人が存在するからだ。

目の前にいるのは、銀髪に狼の耳を生やした少女だった。

少女、というフレーズに驚異は感じられない。

だが、その少女の持つ紅葉が刻まれた盾に、良く手入れの行き届い
た曲刀。

それらが目の前の敵…つまり、俺に対して禍々しいほどの殺気を放
っていた。

「我が名は犬走椋。侵入者が、妖怪の山に何の用だ。」

目の前の犬走椀という奴が、俺を警戒している理由は簡単だ。
俺の持つ凶器、所謂大鎌をぶら下げて歩いてる辺り、警備兵である
椀は俺を悪意のある侵入者だと思っっているのだろう。

「用事って程の用はないねえ。強いて言えば、後学の為に。かね」

両手を頭の後ろで組み、リラックスしたポーズで答えた。

相手を小ばかにしたような回答に、犬走椀が怒気を含めて言い放つ。

「ふざけるな、私も気が長いほうではないんでな。人間風情が、あまり調子に乗っていると・・・殺すぞ・・・！」

犬走椀の言った、殺す。

その言葉に、俺も少々喧嘩腰に入る。

「はあ…何だ？その、殺すぞ！ってのは。」

地面に突き刺していた大鎌を手に取り、肩に担ぐ。

対する犬走椀も、それに合わせて曲刀と盾を構えた。

「何かそういう意気込みみたいなのぶつけられるとさ…、イラッとくんだよね。」

で、イラッとくると頭に血が上る。それで頭に血が上ると――」

「うるさい、黙れ」

犬走椀が言葉を遮る。

それだけで俺の小さな怒りを買えば、お釣りが帰ってくる。
刀身が三つも備え付けられている大鎌を軽く振り回しながら言い放つ。

「ハイハイ。…でもよー、頭に血が上るとき、
”もう目的なんてどうでもいいや、ぶっ殺しちまおう” って気にな
んだよ」

怒気と共に、殺気を犬走椋へとぶつける。
それだけで相対する俺でも、犬走椋から漏れ出る恐怖心を感じ取る
ことができた。

「へっ、おめー…喧嘩売る相手間違えたな」

「——ッ!!」

大鎌を思い切り袈裟斬りすると、犬走椋は盾を使い、防ごうとする。
だが行動とは裏腹に、そして言葉とは裏腹に俺には考えがある。

此処で天狗とトラブルを起こすのは、今後の為に宜しくない。

更に天狗は仲間意識が強いときたもんだ。

目の前の天狗一人殺しただけで、恐らく大群で復讐に来るだろう。
そうなれば幻想郷での仕事どころか、此処での生活すら儘ならなくな
る。

更には、仕事的に言えばコイツは完璧に”白”だろう。今回は明らか
に俺に非がある。

俺は大鎌を振っただけで、何もしてはいない。

袈裟斬りした大鎌は、空を切り大地を抉った。

犬走椀も、何もこないと分かり盾から身を曝け出す。

隙を窺っているのか、額に汗を滲ませながら此方を凝視している。

「——けどよ、此处で面倒事を起こしたくないのも事実だ。」

「・・・？」

何もない攻撃を仕掛けてきたと思えば、直ぐに口を開く俺を警戒する犬走椀。

「ここは話し合いで解決といかねーか？」

「話し合い・・・だと？」

犬走椀はオウム返しするが内心では、コイツ、何を考えている...と九頭龍を警戒していた。

犬走椀は自覚している。

目の前の敵に自分が及ばないことを。

そして危うく戦闘が始まるところであつたが、ここで一時撤退、増援を呼ぶ、という選択肢を取る事もできる。

その事実には、犬走椀は小さく安堵していたのを九頭龍は知らない。

だが、九頭龍の”話し合い”の意味を聞き違えていた犬走椀は、更に逆上してしまう。

話し合いと強要は違う——

「”お前は何も見なかった”：ここは一つ、大人しく通してもらえねえか？」

俺が鎌を担ぎながらも、眼前の犬走椋に問いかける。
話し合いも糞もない一方的な言動に、白狼天狗である彼女の眉間が歪んだ。

そして露骨なまでの怒りを顕にし、俺に襲い掛かる。

「ふざけるなアツ！！」

怒りのままに、目の前の白狼天狗が斬りかかってくる。

「あ、あれ…？」

話し合いの余地があったと思っていた俺は思わずたじろいだ。
まさかいきなり斬りかかって来るとは…！

刀のように細くない曲刀なので、耐久性もあるだろう。
そして手入れの行き届いたそれは、抜群の切れ味も同時に持ち合わせているはずだ。

「あーア…」

犬走椋の曲刀による斬撃を避ける。

一振り、二振りと振られてゆくが、その全てを避ける。

周りに生茂っていた木が、曲刀により薙ぎ倒されてゆく、

「ちィ、すばしっこい奴め…！」

跳躍、ステップ、バク転で斬撃を避けてゆく。

しかしそれも永遠と続くわけじゃない。

剣撃だけでは仕留められない。と悟った犬走椋は、盾を用いた攻撃も重ね合わせてくる。

「・・・つと、ヤベエ！」

俺の避ける位置を予測し、犬走椋が回り込んで攻撃態勢に入っていた。

辛くもそれを避けるが、衣服の一端を斬り落とされてしまう。そして避けると同時に、俺は周りの地形を利用して姿を隠す。

「隠れたか…、この私がるで気配を感じとれないとは…」

古くからこの地を守護している犬走椋も、山の地形を利用した隠蔽は見抜けなかった。

そして気配を消しているものだから、更に索敵が難しさを増す。

現在、地形を上手く利用して白狼天狗から姿を隠している。

相手方も冷静さを取り戻し、姿を眩ました俺を探しているようだ。

危ねえ。此処で殺り合うのも構わないが、それでは今後の為に宜しくない。

できれば話し合いで解決といきたいのが本音だが、無理そうだからこのまま帰るか…

「帰り道どっちだ？…下り坂のほうを進めば良いか」

飛んでしまえば恐らく気配で感知されるだろう。

そうなれば妖怪の山を離れるまで追いかけてきそうだ。

此処まで割りと時間をかけてきたので、いくら空を飛ばうが時間がかかる。

「おつとつと、お困りのようだね」

妖怪の山を、気配を殺しながら下山しようとする俺を呼び止める者がいる。

「萃香さんか。もう家に居るのは飽きたのか？」

「飽きるも何も、お前さんがいなけりゃあ退屈で退屈でしょうがないよ。」

小声で会話する俺に対し、通常の声量で会話する萃香さん。
そんな萃香さんに対し、溜息交じりに呟く。

「少し静かにしてもらえねーかね…、何故萃香さんが此処に？」

俺の問いに対し、萃香さんは満面の笑みを込めて言い放つ。

「前に言っただけじゃないか。面倒事は私に任せろ！って。」

ああ、そういえば数時間前にそんな話になっていた。

でも呼んでくれ、と言っていたのに、見事に呼ばずとも参上してくれた。

だがいくら鬼の萃香さんであっても、あの頑固頭の白狼天狗は落ち着いてくれるだろうか。

そんな思考に陥った俺は、半ば諦めムードで萃香さんに訊ねる。

「面倒事、ねえ。白狼天狗が逆上して襲い掛かって――」

俺が萃香さんを目の前に、事情を説明しようとした処で背後から強烈な殺気を感じとった。

「――そこかアッ!!」

刹那、本能が危険信号を鳴らし、咄嗟に身体を安全だと思える方向へ動かしした。

犬走椋が俺の居場所を探知し、その鋭利な刃物を俺に向けて振り回した。

「――ッ九頭!!」

白狼天狗：犬走椋の斬撃は、寸分の狂いもなく俺の首筋を狙っていた。

咄嗟に避けた俺は、何とか頭部と胴体が別れを告げるのを阻止した。だが、避けたにしてもその傷は深かった。

頸の半分：つまり半径は確実に”斬られた”。

頸動脈を損傷してしまったか、と言うほどに多量の血液が頸から溢れる。

だが、不思議と痛みは薄かった。

衝撃は大きかったが、痛みに換算すると指を切った時のそれだ。

無論、精神的ショックは大きい。

同時に、自身が死神：不死に近い存在になっている事を思い知らさ

れた。

萃香さんが心配の言葉を投げかけてくれるのが分かり、素直に嬉しい。

同時に犬走椋は、何か有り得ない事象を目の当たりにしているかのような表情になっていた。

それは俺の生命力に対してなのか、目の前にいる小さな鬼に対してなのかは分からない。

「伊吹、萃香・・・！」

「私の”友人”に手をかけるとはねえ。天狗も偉くなったもんだねッ！！」

犬走椋が目の中の小さな鬼に動揺しているうちに、その小さな鬼ごと、伊吹萃香は怒りを顕にする。

伊吹萃香が大きく腕を振り回す。

その何でもない行動が放たれた時、萃香の腕から炎の衝撃波が繰り出される。

「くっ……！！」

「失せなよ、天狗。これ以上殺り合っつてんなら、小さな百鬼夜行、伊吹萃香が相手になるよ！」

萃香さんの一撃を喰らい、犬走椋が撤退する。

それにしても小柄とはいえ、鬼の力は凄まじかった。

流石は幻想郷でも最上位に位置する妖怪なだけはあるな。

「大丈夫かい、九頭…って。随分余裕そうだね」

「ん…ああ、まあな。」

頸を半分切られ、頭を傾けると取れてしまいそうな錯覚に陥る。そして大量の血液が頸から溢れ出るが、別段痛みはなかった。

「やっぱお前さん、只者じゃないねえ。幾ら妖怪といえど、頸を半分に切られてもしたら痛みで悶絶するところだろうよ」

「無茶苦茶痛えよ。だけど別に感覚としてはそんなに…だな。」

「その容姿に加え大鎌。そして不死具合を見る限り、死神臭いねえ。」

萃香さんの予想は見事に的中していた。

妖怪も物理的には死なないそうだが、痛みは伴うし部位を切断されれば再生もしない。

「ただ俺は違った。」

半分に斬られた頸をよく見てみると、何と皮膚がくっ付いているのだ。

凝視してみれば斬られた跡と判断できるほどに、既に再生していたのだ。

無論、血液などで辺りは血塗れだが。

「ああ、そうだよ。俺は一応死神だ…、あの世から仕事の為に幻想

郷に滞在する事になったんだ。」

「へえ…。仕事って、何の仕事なんだい？」

自分が死神という事を暴露するや否や、萃香さんが子供のように目を輝かせながら質問する。

俺は萃香さんに事の成り行きを説明し、幻想郷に至る部分まで全て説明した。

「・・・それって要は、島流しみたいなもんじゃあないか」

「そうともいう」

そうとしか言わないよ、と呟く萃香さんを尻目に、俺は妖怪の山を下山する事にした。

此処で話し込んでいてもしょうがないし、他の天狗に見つかり面倒を起こすのも嫌だ。

会話を切り上げて立ち去ろうとする俺を萃香さんが呼び止めた。

「どこ行くんだい？まさか、此処まで来て山を降りるってのかい？」

「その通り。先に進めば天狗との衝突は避けられないだろうしな。天狗どもに負ける気はしねーが、流石に敵に回したいとは思わないんだよ」

「私がいるから大丈夫だって。さっきのを見ただろう？私は強いし、何より天狗は鬼には逆らえない。」

萃香さんの自信に満ちた顔…否、ドヤ顔に目の前に小さな鬼に力を借りるのも良いかもしれないな、と思った。

「・・・いや、遠慮しておくよ」

「——あ、ちよつと待ちなつてば！」

早々に妖怪の山を立ち去る俺を、萃香さんが追いかける図が出来上がった。

せつかくの天狗との出会いに、鬼の力を借りるのも勿体無いと思った。

自分の力で解決するのが後学の為に良いし、何よりも面白いだろう

——

不死の片鱗（後書き）

どうも、ご精読ありがとうございます。くりすていあーねです。

今回書き忘れた事があつたので、書き残しておきます。

基本的に、この小説に限って感想を受け付けておりませんです。感想で褒められると舞い上がり、執筆速度は向上するのですが、勿論その逆もあります。

今までに何度も執筆をしておりますが、ダメ出しをされるとフリーザのデスビームをモロに喰らった後に、目の前でデンデを殺された時と似たような気分になってしまうのです。

どうしても感想を寄越したい、意見させろ！という方がおりましたら、私が今までに書いた小説、何でも構いません。

それにご提示頂ければ読みますので、よろしくお願い致します。

迷いの竹林

突然だが皆は、酒を飲むと気分が高揚してしまう事があるだろうか。所謂。。上戸、という奴だ。

生憎俺にはそういった類の変化は起きない。

限界まで飲酒をした事がないだけなのかもしれないが、もしそれに挑戦してみようものならば、その変化を起こす前に気を失うだろう。

酒に飲まれない。だが、そんな俺でも不意に気分が高揚してしまう瞬間がある。

白狼天狗こと、犬走椋と交戦した時の事だ。

あの時の俺は妙に機嫌が良かったとも言える。

殺戮衝動：と言ってしまえば、単なる危険人物だ。

戦闘に対する好奇心：否、戦う事に喜びを感じる——これではまるで戦闘民族。

死に対するナニカが、俺には宿っているのかもしれない。

死神特有なのか、或いは俺が変人なのか。前者である事を祈りたいが。

酒に例え、飲まれる人と飲まれない人もいれば、酔えば泣き、笑い、怒る人もいる。

要は人それぞれ、偶々俺がそういった類に当てはまる人間：否、死神だっただけなのかもしれない。

そもそも、何故このような話をするかと言えば・・・

「・・・で、何故萃香さんが此処に？」

「何故って、そりゃあ居心地が良いからに決まってるじゃんか」

妖怪の山での騒動から数日経過した日の事。

あれ以来、萃香さんは毎日のように我が木造住宅に入り浸っていた。かくいう俺は、傷の療養も兼ねてここ数日間は大人しくしていた。

毎日のように入り浸っている萃香さんに、施しという名の食事を用意している俺も悪いのだろうか。

今日も今日とて、少々手を加えた自然の恵みを題材とした食事を取っている。

「お前さんの所か、神社くらいかねえ。あー、早く宴会でも開かないもんかなあ」

「幻想郷は宴会事が多いと聞いたな。一体誰が好き好んで開くんだけ？」

「そりゃあ私に決まってるだろう？後は異変が解決した時くらいか……」

異変が解決する度に打ち上げ的なノリで宴会を行うのか。

「神社か…、博霊の巫女って奴がいるんだろ？どついう奴なんだ？」

「博霊の巫女・・・ああ、霊夢の事だね。あいつはおっかないぞー。死神って事がバレでもしたら、退治されちゃうかもね」

「へえ…強いのか？」

「ん、強いっちゃあ強いけどね。何というか、冷酷というか気取っ

ているといつかねえ。

ま、あいつは妖怪だろうが人間だろうが分け隔てなく接する奴だね」

博霊の巫女の人柄を知っているわけではないが、噂では裏表の無い性格で、

喜怒哀楽が激しいと聞いている。

そして売り言葉に買い言葉、短絡的な会話をする事が多いとも。

せっかく幻想郷に来たので、近いうちに神社に訪れてみるのも悪くないな。

「そうそう、神社に行くのならお賽銭を用意するといいよ。霊夢の奴も苦労していてな・・・」

「うーん、今度参拝にでも行ってみるとするかな。」

巫女の会話を終わらせると、萃香さんが何かを考えるような素振りを見せる。

数分の間、静寂が起きる。

そしてその静寂を破るのは当然、萃香さんであった。

「そうだ！」

萃香さんが大きな声で、ひらめいたぞ！と言。

何事かと思い、俺はそれに耳を傾ける。

「宴会が開かれないのなら、異変を起こせば良いんだ！」

「どうしてまたそんな事を？」

「異変が解決する度に宴会が開かれるのは知ってるだろう？」

私とお前さんで、一騒動起こしてやればいいのさ。そうすれば、それが収まった後に宴会が開かれる。」

私って頭良いな、と小躍りする萃香さんを俺は冷めた目で見つめる。

萃香と彼が考えている異変には相対があつた。

彼は異変を、壮大な悪事と考えている。

あの世で風…もとい、靈魂にのって流れてきた噂によれば、異常気象、永遠の夜、地底がどうのetc…。

一方萃香のほうでは、そんな大それた事は微塵も考えちゃいなかった。

「そんな大それた事じゃあないよ。私とお前さんで一暴れしてやればいいのさ」

「一暴れねえ、また妖怪の山にでも行くのか？」

「ああ、それも良いねえ。天狗が山の頂点に立つてから、調子づいてるみたいだからさ。」

「そんな事したら、二度と妖怪の山に踏み入れなくなりそうだな」

仲間意識が強く、組織力のある天狗の事だ。

山を荒らしでもすれば、組織の力に押し潰されるだろう。

「大体異変なんて起こさないでも、宴会ぐらい自分で開けばいいじゃないか」

「馬鹿だねえ。異変を起こせば、幻想郷の能力者がお前さんを狙う。そうすりゃあ幻想郷の能力者達と顔見知りになれるじゃないか？」

幻想郷の有名所を見て回ろうかと萃香さんに話した結果がコレである。

「これなら態々此方から出向く必要もない。向こうから尻尾振ってホイホイやってくるわけさ。」

異変つてのはその口実。…まあ、私が宴会を開きたいってのもあるけどね」

「異変ねえ…、そんな技量はねーけどな。」

「なあに、本当に少しだけ暴れてやりゃあ良いのさ。後は私が情報操作してやるよ。」

・・・そうだねえ、紅魔館なんて丁度良いね。最近になって平和ボケした吸血鬼にゃ良い刺激だよ」

「紅魔館って言えば、あの紅魔館だな。」

場所は知らないが、小町さんに教わったことはある。
幼女の吸血鬼が住んでいる、とだけ。

——萃香は考えていた。

九頭龍を紅魔館で一暴れさせる。

その間に幻想郷では割と名の知られている、ある人物を彼の下へ呼び寄せる。

その現場を、ある人物に収めさせれば成功だ。

幻想郷中に彼の名を知らしめる事のできる、とある新聞記者を――

「まあ、暴れる必要はないよ。暴れるのが手っ取り早いって事でね。勿論、そのほうが効力も広まると思うけどさ」

と言っても、紅魔館の連中は皆能力持ちだからね。と呟く萃香さん。その能力という単語に、ふと思ったことがあったので萃香さんに訊ねる。

「萃香さんも能力持ちなんだろう？どんな能力なんだ？」

初めて出会った時、彼女は霧化していた。

鬼が霧状になる話など微塵も聞いたことが無いので、恐らくは能力だろう。と予想している。

「密と疎を操る程度の能力、だよ。九頭も能力があるのかい？」

密と疎を操る程度の能力――知恵を尊ぶわけではない俺には、名前だけでは理解できなかった。

「俺の能力は――分からない。」

「分からないって…、それじゃあ能力といえる業は持つてるのか？」

「業と言ってもなあ、正直自分でも使いどころが分からなくてね。死神になってから目覚めた能力みたいでね。…試してみるか？」

「おお、やってみろ！」

俺自身でも使いどころを見極めていない能力を、改めて萃香さんで試してみる。

萃香さんの頬に手を伸ばし、優しく撫でる。

始めはキョトンとしていた萃香さんだが、徐々に警戒を解き始める。

「・・・で、どんな能力なんだ？」

暫く撫で続ける俺を尻目に、萃香さんが冷めた目で質問してくる。

撫でる行為に特別な意味はない。

俺の能力の発動条件の一つである行為、”触れる”が偶々頬であっただけだ。

頬を撫でる手を萃香さんから離す。

俺の能力の一つ、発動条件の一つを満たしたので、実際に能力を発動させる。

「それじゃあ、歯食い縛れよオ！」

次に起こる出来事を想像し、僅かに顔がにやける。

そんな変人的な考えを起こしている俺の変化ぶりに、萃香さんが呆気に取られ表情を一変させた。

檜で出来たテーブルの上に、手の甲を思い切りぶつけた。
骨と木がぶつかる、高めの音が辺りに木霊し――

「――ッたア!？」

萃香さんが左手の甲を涙目で押さえる。

俺が檜作りの机にぶつけた個所と、同じ部位だ。

俺の能力は、程度の能力で表すのならば恐らく、感覚を操る程度の能力、ってところだろう。

「つくうう…な、何で…?」

骨に来る痛みに耐えながらも、その不可思議を解き明かそうとする萃香さん。

現時点で発動したのは、痛覚を萃香さんと共有させたのだ。
つまり俺が痛みを感じれば、同様に萃香さんも感じるという事だ。

ただ全てが完璧なわけじゃない。

感覚を共有できるのは、直接肌に触れた左手部分のみだ。

右手を挟もうが、切り刻もうが萃香さんに痛覚は届かない。

この痛覚の発動条件の一つとして、相手の肌に直接触れるという事。
因みに”視覚”を操るのは簡単だ。

相手と視線を合わせるだけでそれを共有する事ができる。だが、共有したところでどうした、という話になるが。

そしてもう一つの発動条件――

ちなみに一括りに”感覚”と言っても、多様な感覚が存在する。味覚、触覚、嗅覚、視覚、聴覚。有名どころはこの程度だろう。他にも、先程のように痛覚。そして平衡感覚など、碎いて見れば膨大な種類の”感覚”が存在する。

しかし、俺は知識人ではない。

痛覚など戦闘を有利に運べる感覚以外には大して視点を合わせていない。

この痛覚も、発動条件としては相手に触れ、その部位のみという極めて有効範囲の狭いものだ。

”触れる程度”では、本当に触れた部分のみ。

だが、もう一つの発動条件がある。

これは極めて条件が難しいものと言える。

それは相手の”体液”を摂取する事だ。

唾液や血液、愛し合う際に漏れる体液でも構わないであろう。

それらを相手から摂取する事ができれば、痛覚は勿論の事、その他様々な感覚を操れるはずだ、と自負している。

戦闘中に相手から唾液は勿論の事、淫猥な汁を得る事などできるわけがない。

なので殺し合いの際に、自分の能力を発動する機会がないに等しいのだ。

ただ、血液ならば――

「鬼を無視するなんて良い肝っ玉してるよね、本当」

「落ち着け、素数を数えて冷静になれよ」

読者諸兄に説明している俺に痺れを切らしたのか、萃香さんが掴みかかってきた。

鬼の凄まじい怪力に、内心驚きつつも、素数を数える事を提案して

みたがあえなく無視されてしまった。

「ふうん・・・やっぱり感覚を共有してるんだね」

俺の手をニギニギしながらも、真相を説明していく萃香さん。

「凄い能力じゃあないか。こんな事されちゃあ天狗どころか、鬼も迂闊に手が出せないねえ」

「凄いと言われてもな。知つての通り、触れた部位しか操れんぜ。この状態で心臓を貫いても、俺が死ぬだけだ」

「なんだ、随分ケチな範囲だねえ」

「全くだ。全身を操れば、まさに無敵だったんだけど・・・」

「それでも十分凄いと思うよ。敵と抱き合えば良いじゃんか」

「相手が素っ裸ならまだしも、服の上から触れたんじゃあ意味がないんだぜ」

凄い能力に欠点は付いて回ってくるもの。

本当に使い勝手が悪いと思っっているこの能力。戦闘中に有利な発動できる相手と言えば、

素っ裸で殺し合い中に抱きついてても攻撃して来ない相手にのみ、有効だろう。

「まっ、能力なんざ使えなくても問題ねえな。使えた事に越した事はねーが。」

喋りながら、面白半分で自身の左腕を抓ってみた。

「・・・おい、何してるんだ？」

痛みに表情を歪みながらも訊ねてくる萃香さん。

「コレねえ、痛覚を共有してるってわけじゃあないんだよ。」

触覚、つまり俺が左手に知覚した事は全て共有してるってわけで」

喋りながら左手を優しく撫で、擦る。

自分では大してくすぐったさを覚えないが、萃香さんには効果があるようだ。

表情を崩しながらも、行為を止めるよう命令してきた。

少し癢に障ったので、自身の左手を右手でぶん殴ってみる。

すると、まるで壊れた玩具かのように萃香さんが痛みに悶絶した。次に待っていたのが――

「いい加減にしな！」

萃香さんの右拳であつた。

綺麗に俺に命中し、気絶はしなかったが、起き上がるのも気だるく感じた。

なのでこのまま暫く横になるとしよう。

――因みに、触れた程度では効力も、時間も乏しい。

だが、しかし。

敵の”血液”を体内に取り込めば、新たに上書きするまで永久にそれは続くだろう。

絶対的な死への布石、確実なる絶望を相手に与える事も可能な能力。数を殺す事で恐らく、”死の感覚が快感”に変わるだろう事を、彼は知らない。

「・・・ふう」

現在俺は、迷いの竹林と呼ばれる所にいる。

結局、紅魔館に攻め込む計画は断念。

幻想郷の地理にも乏しいという事で、俺は虱潰しに有名どころを抑えに赴いている。

時期尚早だったか、と萃香さんは宴会が行われない事で憤慨を顕にしていた。

代わりだ、と言わんばかりに晩酌を要求されたので、俺は了解した。

そんなくだりで、俺は迷いの竹林に迷い込んでいた。

「何所を如何みても同じ風景だな」

あの後、萃香さんは暇つぶしにと神社に行くと言っていた。

同行するのも良かったが、機嫌を損ねていたので同伴するに至らなかった。

「いつその事全部ぶった切るか…」

大絶賛迷い中の俺は、イライラがマッハになりかけていた。
何所を見回しても同じような風景、微妙な傾斜もオマケして方向感
覚が狂っていた。

そして天然の霧が充満しているので、遠くがぼやけて見える。

当ても無く彷徨っている俺は、道中深い穴が空いているのに気が付
いた。

同じような風景を見飽きた俺は、その大穴を覗いて見よう、と近づ
いてみる。

「ちよつとそこの人！」

穴を覗き込むなり、甲高い女性と思われる声が響いてきた。
発言を推測するなり、どうやら俺の事を呼んでいるようだ。

黙って穴に落ちたと思われる少女を眺めていると、催促の声が聞こ
えてきた。

「見ての通り、罫に嵌っちゃったのよ。助けてもらえないかしら？」

「飛べないのか？」

「飛べるんだけどね…、ご丁寧に飛行できない呪いまで仕掛けてあ
ったのよ」

穴に真下に、つまり彼女の足元に魔方陣のような仕掛けが施されて
いた。

呪い…、”のろい”ではなく”まじない”。呪術の劣化版といったところだろうか、詳しくは知らない。

俺は目の前で助けを求めている、ウサギの耳を生やしている少女を救出する事にした。

「ほらよ、よく斬れっから気をつけろよ」

大鎌を穴に放り込む。

柄の部分に、鎖鎌のようにも扱えるよう頑丈な紐を括り付けてある。車で言えば、オプションパーツ的な扱いだろう。

「ちょ、ちよつと…」

穴に放り込んだ大鎌は、重力に従い素直に落下していった。

当然、刀身が三つもあるので、それらが真下に位置するのは当然である。

切っ先が少女に向かって落ちてゆくが、紙一重で避けたようだ。

「危ないじゃない！もう少しで真つ二つだったわよ…」

「悪いね、考えてなかった。…まあ細かい事は良いじゃねーか、早く捕まっとけよ」

「はあ…、でも助かったわ。ありがとう。」

穴に落とした鎌に捕まったのを確認し、それを引き上げる。

大鎌と供に現れたのは、ウサギの耳を生やした少女。

どこぞの学び舎のブラウスを着用している辺り、根は真面目な奴なのかとも思える。

「悪戯兎の罨に嵌っちゃってね…。私はレイセン、普通に呼んでくれて構わないわ」

「そうかい。俺は…えーと、九頭だ、九頭龍。好きに呼んでくれて構わないよ」

お互い名乗りをあげると、レイセンは俺の名前を幾度か呟いていたが、気に止めないことにする。

「何でレイセンはこんな罨にかかっていたんだ？」

「何で、ねえ…。」

俺が質問を投げかけると、悩む素振りを見せるレイセン。少しの沈黙が場を襲うが、それは目の前で悩んでいたレイセンが崩した。

「竹林に迷い込んだ怪しい奴を嵌める為に罨が仕掛けてあるのよ。それに私自身が嵌っちゃったみたい」

俺に説明すると、小さく俺には聞こえないように”てゐの奴…”と呟いたのを俺は聞き逃さない。

「ま、何にしても大事に至らなくて良かったな。」

「ええ、そうね・・・」

鈴仙・優曇華院・イナバは人見知りである。

人間を避けている節があり、自ら用件がある時でもない限り、他人と接する事はない。

その為彼女は、周りからは変わり者の妖怪とされていた。

目の前の異性：九頭龍とも、落とし穴に嵌っていなければこうして話す機会もなかっただろう。

だが、あくまで現時点ではキツカケを作ったに過ぎなかった。

今の今まで、異性との交流に乏しかった彼女は、目の前に現れた異性に対し、どのような表情を作れば良いか知らなかった。

「じゃ、俺は行くわ」

大鎌を肩に背負い、面倒臭そうに踵を返す。

鈴仙は考えていた。

彼女が師匠と慕っている人物の言葉。

自ら苦難を乗り越えなければ、苦手は克服できないと。

当時は何となく聞き流していた言葉が、今になって胸の奥に響いてくる。

永遠亭という小さな箱庭の中に収まったままでは、それこそ永遠に自身の苦手は克服できぬだろう。

目の前で踵を返す、異性に彼女は興味を持っていた。

人里での作業的な会話ではなく、キツカケあつての自然な会話。奇跡とも取れるその出会いに、鈴仙は此処で彼を逃したら、永遠に私の時は止まってしまうのではないか。そう一種の恐怖ともとれる感情を抱いていた。

「ちよつ…と、待つて」

気付いたら自ら声をかけていた。

枯れかかった、臆病な呼びかけにも彼は答えてくれた。

此方に振り返り、無言で鈴仙の言葉を待つ彼に、鈴仙は意を決して言葉を紡いだ。

「これから人里に行くんだけど・・・一緒に、行く…？」

後々考えれば、何とも可笑しな展開であつた。

迷いの竹林に入り込む事は、目的は一つ。永遠亭であろう。

彼が永遠亭に向かうのを妨げ、態々反対方向に位置する人里に行かないか、と提案している。

普通ならば、人里に用はない、一人で行け。となるだろう。

だが、彼…九頭龍は永遠亭に用こそあつたものの、完全に竹林に迷い込んでいたのだ。

最悪竹林から抜け出せず、死ぬまで永遠——という可能性もあつた。そんな中、”人里”と竹林を抜け出すキーワードを得た彼は、喜々として鈴仙に振り返っていたのだ。

此処を縄張りにしてる兎妖怪なら、竹林を抜け出す事など容易なん

だろう。

俺は人里に行かないか、と誘われ、用は特になかったが彼女こと、レイセンに同伴する事にした。

「ああ、良いぞ。」

彼の肯定の一言に、鈴仙は素直にあっけないな、と胸中で感想を述べた。

気が付いたら彼と一緒に行動する事を提案し、その返事が待ってる間は頭の中が熱く、思考回路がおかしくなっていた。

そして肯定の返事が返ってきた途端、思考回路の回線が元に戻った。返事を待つ間は永遠にも感じたその時間は、二つ返事で了が返ってきた途端に、刹那に感じられるものに変わっていた。

初めて抱く、自分では良くわからない感情に彼女は素直に動揺していた。

表情を表に出さない鈴仙は、当然このような胸中であつた事は彼には届かないし、届かせない。

問題は了解をとった後であつた。

後の事を考えていなかった鈴仙は、困惑していた。

彼と二人で行動するに当たり、何とも沈黙が続いていた。

「レイセンは竹林に住んでいるのか？」

「ええ。永遠亭って言えば貴方も知ってるでしょ？」

このように単調な会話だけで、会話を切り出すのは彼からだった。人里までの道のりは決して短いとは言えない。

素直に、異性である彼に興味を抱いていた。

勿論、異性である事のみではない。

彼から感じる異質な雰囲気、人間とは思えない程に靈力を宿しているのが感じられた。

だが、会話の輪を繋げられず、作業的な応対のみが続いてしまう。

「・・・なあ」

またしても彼が話しかけてくる。

悪戯に沈黙が続き、一人で気まづくなっていた鈴仙。

話しかけてきてくれたのが嬉しく、つい彼のほうへ顔を向けてしまう。

彼のほうも此方を見つめていたので、目が合いそうになるのを避ける。

目ではなく、彼の鼻っ面のほうに目を向ける。

だが、その行為だけでも顔に熱を宿してしまう自分が不甲斐なく、そして情けなくて顔を俯かせてしまう。

「・・・ああ？まーいいや、人里の用事ってのが終わったら、永遠亭に案内してくれねーか」

此方が顔を俯かせた事に機嫌を損ねてしまったのか？

鈴仙は迂闊な自分の行為に、一人で後悔していた。

「永遠亭に？…まあ、いいけど。貴方が思っているほど、案外何も
ないところよ」

素っ気無い回答に、俺は返事を返さずに新たな質問を持って返す。

「永遠亭には医者がいるんだろ？っー事はレイセンも医療技術を持
ってるのかい？」

「師匠程ではないけどね…、まあ少しくらいなら。」

レイセンが師匠と謳う人物に興味を持ったが、今は気に止めない。
それにしても会話が続かないな。

俺から話かけねーと永遠の無言が訪れそうだ。

これは人里まで精神をすり減らしそうだぜ…。

レイセンとの邂逅

レイセンと共に人里に向かった。

道中特に妖怪に襲われる事も無く、人里までは問題なく辿り着いた。レイセンの醸し出す雰囲気、妖怪を遠ざけているのかもしれない。彼女からは、言葉には出来ない奇妙なオーラを感じる。

「着いたわよ。此処が人里。」

「人里…か。思っていたよりもずっと栄えているな」

「・・・？思っていたよりもって、貴方は人里の者じゃないの？」

「まーな。魔法の森の近くに住んでるんだよ。人里に来るのは初めてだ。」

「へえ…そうなんだ。」

こんな感じで、人里に入ってから割りと会話が続くようになっていた。

迷いの竹林から人里も、意外と距離があった。

これはレイセンの用事とやらが終わる頃には、夜が訪れるだろう。

他愛の無い会話を繰り返しながら、人里内を歩き続ける。

如何やらレイセンは、人里に届け物をしに来たようだ。

事実、迷いの無い足取りが届け先に向け距離を縮めている。

「ふう…ここね」

レイセンの目の前には、里の住民が住んでいるであろう小さな家であつた。

周りの家々と比べると、比較的豪華な外見をしている。

レイセンは扉の前に立ち、コンコン、と来客を知らせる。暫く待つと、慌しい足音と供に家の住人が姿を現した。

「おお、レイセンちゃん。いつもすまないねえ」

「いえ、此方こそ」

扉を開けたのは老人であつた。

比較的気さくなのか、砕けた態度でレイセンと対話していた。

対するレイセンは素つ氣無い、少なくとも今の今まで会話していた俺からすれば十分にそう思えた。

レイセンが箱の中身・・・どうやら医薬品のようだ。

それらを老人に手渡すと、早々に立ち去ろうとする。

「レイセンちゃん、お茶でもどうだい？いつものお礼にお団子も用意してあるよ」

「すみません、急ぎの用事があるので…」

引き止めようとする老人に、レイセンは有無を言わず断りを入れた。

鞆をたたみ、早々にこの場を立ち去るレイセンを、俺は追うように着いて行つた。

「急ぎの用事なんてあったのかよ。何でもっと急がねーんだ？」

「ん・・・別に急ぎの用事なんて無いわよ。ただ、ちょっと煩わしかっただけよ」

どうやらレイセンは、急ぎの用事と嘘ついて老人の好意を無碍にしたそうだ。

本人がそれで構わないのならそれで良いが、第三者的立ち位置の俺からすれば味の悪いものだ。

「もう人里に用はないから戻るわ。人間の多いところは苦手なのよ・・・」

俺の返答を待たずに、レイセンは人里を出る為に歩き出す。

永遠亭に行ってみたい俺は、黙ってレイセンに着いて行く事にした。

行きと帰り道は違う。

来た時とは別の風景に、新鮮さを感じつつも人里の繁華街ともいえる場所を歩く。

心なしか、レイセンが早歩きしているようにも見える。

「ん・・・これは」

人里の繁華街を歩きつつも、賑わいを見せる一つの店を俺は見逃さなかった。

その店は所謂甘味処。

主にターゲット層は、若い女性のように大いに賑わいを見せていた。小腹を空かし、甘い物とは縁遠い生活を続けていた俺には大層興味が湧いてくる。

しかし、前方には目の前に障害は存在しない、とばかりに進んでゆくレイセン。

何とか歩調を合わせている俺だが、食べ物誘惑には勝てなかった。レイセンから軌道を外し、円弧を描きながら甘味処へと向かった。

——嗚呼、やはり人里は肌に合わない。

私は素直にそう感じた。

一秒でも早く人里を抜け出したかった。

彼には悪いが、早歩きで里の繁華街を歩きぬけよう。

ちゃんと着いていけているだろうか。

・・・いや、考えるまでもないな。

彼は永遠亭に向かうのが目的だ。

その為に、態々迷いの竹林などに足を踏み込んだのだから。

成り行きで私と供に人里にいるが、それでも彼は、私を見捨てるはずはない。

だって私に同伴すれば、永遠亭に辿り着くキーを得る事ができるのだから。

何気なく、呼吸をするのと同じような自然さで後ろを振り向いた。

そしてそこには居るべき人がいなかった。

「おっさん、5本とお茶頼むわ。渋めでな」

賑わいを見せている店に入り、隅っこのほうの席を陣取り注文を済

ませた。

活気のある店には活気のある店長。

中年の熱気のある声が、俺の注文に答えた。

暫く待つと、若い女性が注文の品を届けてくる。

この店イチオシと名高い三色団子に、湯気が出ているお茶。

さすがは甘味処と言ったところか、様々な品が置いてあった。

やはり初めての店は冷静に外れのなさそうな物を選ぶに限る。

配膳されたお茶を一口、その渋さに顔を顰めつつも三色団子を齧る。
餅の柔らかい食感が口内を征服し、同時に甘みが口いっぱいに広がった。

やはり三色団子に外れはないな、と一人勝ち誇った笑みを浮べていると、目の前の席がガタツ、と揺れ動いた。

「…何してるの？コレ、一本貰うわよ」

てつきり先に帰ったと思っていたレイセンが俺の目の前に座っていた。

そして三色団子を乱暴に掴み取り、頬張った。

「永遠亭に行きたいんじゃないの？」

「興味はあるぜ。だが眼前の誘惑に耐えられるほど俺はデキぢゃいねーな」

「何なのよ、それ…」

俺の言葉に呆れながらも、二本目の三色団子に手を出した。

レイセンの驚異の食欲に俺は度肝を抜かれるばかりであった。

美味しそうに団子を頬張るレイセンを眺めていると、何となく穏やかな気分になる。

「その団子美味しいか？」

「ええ、何本でも食べられそうな程。」

言いながらも三本目の三色団子を握っているのに、俺は気付かない。そんな事よりも聞きたい事があるからだ。

「何であの時の爺さんの誘いを断ったんだ？あの爺さんならもっと美味しい団子用意してくれてたかもしれないぜ？」

「確かにね。でも、何となく乗り気じゃなかったのよ。…人との付き合いつて苦手なのよねえ」

「俺とはこうして団子食えてるじゃねーか。何が違うんってんだ」

「うーん・・・分からないわよ、そんなの。」

何となく聞いた質問に明確な答えは返ってこなかった。

ただ俺は、他人にはあんな素っ気無い態度を取るのに、出会って間もない俺と距離が近いのを不審に思ったのだ。

人見知りで臆病者な雰囲気を感じたが、そんな彼女でも俺に対し、こんな態度を取れる。

——まあ良いか。険呑な雰囲気は感じられないし、悪意もないだろ

う。好意を抱かれるのならばそれはそれで結構だ。

「さて、団子も食べた事だし早く行くわよ」

「団子がない・・・だと？」

俺が胸中を語っていると、皿に用意された三食団子が全てなくなっていた。

俺は手元に最後の人玉となった串を一本、皿には団子の刺さっていない串が四本。

誰がどう見たってレイセンが食べたと判断できるだろう。

「おめー、全部食ったな？」

目の前のレイセンから悪意は感じられなかった。

「私も暇じゃあないのよ。腹ごしらえが済んだのなら、早く永遠亭に行きましょう」

「腹ごしらえってな・・・一本しか食ってない俺が満腹だと思ってるのか？」

そうレイセンにクレームを叩きつけながらも、手元に置いてあった渋茶を啜ろうと口に運ぶ。

しかし、口に熱い茶は注がれなかった。

「因みにお茶も頂いておいたわ。もう飲まないのかと思ってね」

俺が読者諸兄に胸中を語っている間に、全てを終えていたレイセン。これは巧妙に仕組まれた罠なのだろうか。

俺が思考を巡らせていると、レイセンは更に自分勝手な事を言い始めた。

「此処は安い上にお腹も満たしてくれる良い店ね。また一緒に行こう?」

「ぜってー行かねーよ・・・」

安いも糞も、全額俺が負担しているので当然だ。

「ほら、行くわよ」

「へーへー」

レイセンの異常なまでにご機嫌さに、少々驚いている。

如何してこうまでご機嫌になったのか、恐らくは彼女の思うところがあるのだろう。

俺は相手の感情を読むことなどできぬので、それは分からない。そう、永遠に。

甘味処にて小腹を満たした、俺ではなくレイセン。

俺の三色団子を食い荒らした挙句に、渋茶までも飲み干してしまった。

本人曰く安いとのたまうが、俺の懐は痛まるばかりであつた。

先程よりも人里を抜ける足が落ち着いたのか、俺と歩調が合う。

並び合う事で、互いに声の届く声なのでレイセンが話しかけてきた。

「九頭の波長って不思議ね」

いきなりの発言、そして主語がないのでレイセンが何を言いたいのかわからない。

こういった場合は、黙秘を貫けば自然と相手が次の言葉を出してくるだろう事は、長年の経験で分かる。

「普段は暢気なのに、事象が動き出すと急激に狂気に近づく…」

「何の話をしてるんだ」

暢気だとか狂気だとか、よくわからない単語に俺は顔を顰める。

「私には波長が分かるのよ。貴方の波長は比較的暢気…けど、急激に狂気に近づいたりもする。」

「暢気だか狂気だか知らねーが、それがどうしたってんだ？」

「いや…ただちょっと珍しくて。そういう人の多くは精神が未成熟、或いは多重人格の人ね。」

「なら俺は後者だな。そこらの人間よりは悟ってる自信はあるぜ」

「自信気にそう言う人の多くは、精神が未熟なパターンが多いのよね」

他愛のない話しをしながら里を歩き続ける。

波長云々の話しは、恐らくレイセンの能力だろう。

少なくとも俺は、普通の兎妖怪が波長を操れる話など聞いた事が無い。

そんなこんなで、人里を抜け出て迷いの竹林へと向かう。

人里を抜けた事で落ち着いたのか、レイセンがややご機嫌のようだ。そんなに人里を抜けた事が嬉しいのだろうか。頬も若干、紅に染まっているのがわかる。

さて、そろそろ迷いの竹林の入り口であろうか。という頃合に、刺客は襲ってきた。

「どこ行くんだい、九頭？」

「げっ……」

背後から不意に引き止める声が聞こえてきた。

声質を聞き、記憶の糸を手繰り寄せてみたところ、声の主は萃香さ

んだ。

俺の”げっ”という言葉を不快に思ったのか、眉間に皺を寄せていた。

そして隣にいたレイセンから露骨な舌打ちが聞こえてきた。

「鬼・・・伊吹萃香か」

舌打ちをしたレイセンがそう呟いた。

「今夜は私に付き合うつて約束だろう？今から何所に行こうってんだい」

「あー、そういえばそんな約束もしてたな。」

萃香さんとの約束をすっかり忘れていた。

だがしかし、これから永遠亭に直通一本で行けるというのに…

此処で萃香さんの約束を無視すれば、大層面倒な事になりかねない。

俺が思考を巡らせていると、機嫌を損ねたレイセンが口を開いた。

「何所つて、彼はこれから私と一緒に永遠亭に行くの。」

「ん、お前は…永遠亭の兎従者か。私の友人を誑かして何をしようってんだい？」

それこそ、正常な生物が永遠亭に態々ねえ」

「正だろつが異だろつが関係ないわ。彼が行きたいって言うから連

れていくんだけど?」

「なんだい、そんな事言ったのかお前?」

辺りはもう夜と言っても差し支えない時間帯だ。

今から永遠亭に行こうものならば、確実に萃香さんとの約束は破られる。

俺は取って付けた、付け焼刃のような言い訳を濁してみる事にした。

「んー、永遠亭ねえ。興味はあったが、すっかり遅くなっちまったし…、それに小腹も空いてるしな」

先の甘味処の件を匂わせる言い訳に、レイセンがうつ、と詰まらせた。

それを見てしめた、と思ったのか、萃香さんが続けて言葉の暴力を浴びせかける。

「コイツは望んでないみたいだねえ、なら異論はないだろう」

「くっ…でも私がいなければ永遠亭には辿り着けない。好機は逃すものではなく、掴むものだと思うけど」

「その必死具合…何か企んでるんじゃないか?」

「ふっ、飲兵衛の鬼にそう言われるとはね。竹林の妖怪も馬鹿にされたものね」

何故か舌戦に変わってる二人の言い合い。

正直俺としては、二人を天秤にかけて考えるに萃香さんに加担する。読者諸兄もそう思うだろう？ 態々鬼を敵に回すこともない。

「ふん、発情期を失くした下品な鬼妖怪が。九頭に何か仕込もうとしてるんじゃないだろうね？」

「なんだお前、そんな事考えてたのか？」

萃香さんの物言いに、俺が冗談交じりにレイセンに問いかけてみた。

「そ、そんなわけないでしょーが！」

萃香さんの挑発に、顔を真っ赤にして怒りを顕にするレイセン。

「なら問題ないね。さ、行くぞ九頭」

「おうよ。悪いな、レイセン。これも団子の報いだと思って諦めてくれ」

萃香さんに腕をつかまれ、連行されてゆく。

鬼の力に抗う気力も起きないので、俺はなすがままに引っ張られる。レイセンに意識を向けてみると、ぐざぎざと歯噛みをしていた。哀れなり。

この後、萃香さんと明け方近くまで付き合っていたのはまた別の話だ。

こんな事になるのならば、永遠亭に行ったほうがよっぽど実りがあった――。

そう思ったのも、また余談である。

九龍の豹変 殺戮衝動

未だに俺の家に入り浸っている萃香さん。

昨晚はお楽しみでしたね、と問いかけると、うん。と返ってくる事だろう。

それ程までに入り浸っていた。

しかし、我が家以外にも博霊神社にも入り浸っている模様だ。

俺が家を空けているときや、どこか放浪してるときは博霊神社に赴いていると萃香さんは言っていた。

我が家は俺という玩具で暇つぶしをする時か、寝る時ぐらいに利用する程度だ。

いや、程度と言っても毎日のように顔をあわせているのだが。

「美人は三日で飽きる、少女は一日で飽きた。」

流石に”可愛い”に分類される萃香さんでも、少女じゃ興味湧かない。

良い人だとは思うが、毎日顔を合わせてりゃあ飽きもするだろう。

例えば、お前の妹可愛いね？と言われるとする。

だが、血が通っている上に毎日顔を合わせてる妹に性欲は湧かないだろう。

それに似たようなもの…だ、うん。

「…良い具合だな、うん」

俺は手作りの巻物を片手にそう呟く。

霊力等を上手く利用し、巻物に荷物を封印する術を施したのだ。

コレならば、毎日のように大鎌を持ち歩く必要もない。
必要な時だけに巻物から大鎌を口寄せすれば良い。
要は、口寄せという時空間忍術を開発したのだ。

「さつてと、今日も地域開拓と行きますか」

巻物を懐に入れ、黒の外套を羽織る。

真っ黒な、飾りつけなど何もない黒の外套。

洒落っ気のない俺には、コレでも十分に満足できる一品だ。

家を出て、萃香さんが家をぶっ壊さずに中に入れるように鍵はかけない。

「今日は普段と反対側を見て回るか」

普段は魔法の森や、妖怪の山付近を散策している。

だが、今回はそれと逆方向：迷いの竹林方面に向かっている。

運良くレイセンと出会えば、永遠亭に案内してもらえらるだろう。

しかし一期一会の出会いとはこの事、連絡手段のない俺には奇跡を待つしかない。

そんな悠長な事も言ってられないので、俺は適当に野を歩き回る。

歩きながらも、鴉が空を飛んでいるな、とか。

野兔が走り回っているな、とか。

そういった自然の発見しか無いのだが、それでも心を落ち着かせるには十分な薬剤だ。

勿論、兎や鴉などの人を襲わない動物ばかりじゃあない。

中には俺に襲い掛かってくる妖怪や、ちょっかいを出してくる妖精などもいる。

「おいおい… またかよ」

妖怪何かは力任せに捻じ伏せれば、呼吸を止めるのだが。

妖精は死の概念が存在しないのか、殺した、と思っても時間を置いて再び悪戯しに来る事もある。

そして目の前には、先程懲らしめてやった妖精が仲間を引き連れてやってきた。

「コイツだよー、さっき私が言ってたの！」

「この人凄く強そうだよ…」

「みんなで囲ってやっつけちゃえ！」

妖精が俺を囲んで各々の言葉を投げかけてくる。

彼女ら妖精は、霊力による遠距離攻撃を主にしているようだ。汚物に寄って来る蠅のように鬱陶しいこと極まりない。

目には目を、歯には歯を。

そう言わんばかりに、妖精たちが俺に弾幕攻撃を仕掛けてきた。先程二人組みの要請の片割れをぶっ殺したのが原因か。

「えーい！ちーちゃんの仇ーっ！」

妖精たちが口々に、。。。ちゃん。等の渾名を口にする。

恐らくは各妖精たちの呼び名だろう。

先程俺がぶっ殺したのは、ちーちゃんと呼ばれているようだ。
俺を目掛けて飛来してくる霊力弾を弾き返す。

「何なんだよオメーら！家に帰ってミルクでも飲んで寝てやがれ！」

「キヤー！」

「うそでしょー！？」

弾幕を飛ばしてきた妖精を狙い、俺の大鎌が振るわれた。

三つある刀身のうちの中段が、妖精の胴体があつた空間を過ぎつた。
大鎌は、そこには何もなかったかのように綺麗に一回転し、俺が柄を強く握り固定すると、それに従った。

目の前の現状に、その他の妖精が口々に驚愕の叫び声を上げていた。

ドサツ、と肉片を思わせる物体が地に落ちた。

一瞬不快に思つたが、それもすぐに気にならなくなった。

「しつこい奴らだぜ…。オラ、さっさとどつかいけよ！」

俺の一言に、蜘蛛の子を散らすように妖精たちが逃げ出した。

「くっそーおぼえてろよー！チルノちゃんにいいつけてやるんだからー！」

「おい、ここにくたばってる奴も持って帰れ！」

ワァーッと逃げ出して行く妖精たちに、しっかりと後処理をさせる。道端に妖精の死体（？）が落ちてるとか気分が悪いにもほどがあるだろ・・・。

こんな感じで、道中は退屈を感じなかった。

異変が起きると妖精たちが活発になると聞くが、日常的に十分彼女らは活発だろう。

そして仲間想いの面もあるのか、一匹殺す度に復讐しにやってくるのも面白かった。

今度は何時頃やってくるのだろうか・・・。

「ゆるさないんだから!」

「あんたはここでおわりよー!」

暫く歩いた俺に、再び妖精が報復しにきた。

周りは向日葵が生茂っており、風景も大変好ましいものだ。

しかし、運悪くそこは妖精達の体液に埋め尽くされてしまうのだろうか。

妖精たちが無数に飛び交い、俺に向け弾幕を展開してきた。

「ちーちゃんめーちゃんの仇イーツ!」

「弹幕ごっこは嫌い…だけどッ！」

「みんなして弹幕ごっこって…どうして手を取り合えないのー！」

「当たってよ！当たって当たって、当たってってばア！う、うわあ
あー！」

口々に言いたい放題の妖精。

彼女らは何を目的に俺を襲ってきてるのか分からない。
分からないが…ここは俺も応戦するしかない！

「お前らが撃ち続ける限り、憎しみの連鎖は終わらないイ！！」

「キヤー！」

妖精たちもそうだが、九頭龍もノリノリであった。

妖精たちは主に弹幕による攻撃、九頭龍は大鎌による物理攻撃がメインだ。

九頭龍の振るった大鎌が、妖精の腕を斬りおとした。

しかし如何せん、妖精の数が多すぎて一匹瀕死にしたところで話にならない。

「腕の一本や二本、惜しまないわよ！」

そしてこの生命力に加え、謎のど根性である。

一体何が彼女らを、そして九頭龍をノリノリにさせているのか――。

「満身創痍、ね…おもしろい！」

「私達を落とせば戦いをやめるっての？…ちがうくせに！」

「みんなでつくりあげた幻想郷でしょー！」

「痛い…けど、攻撃したあんたも痛いでしょ！」

「どうして妖精同士で争わなきゃいけない！どうして憎しみ合わないきゃいけない！」

大量の妖精が同時に物を言うので、収集がつかない。
そして何を言っているのか訳が分からない。

「うるせーぞオメーら！第一オレは妖精じゃねえ！」

いい加減我に帰った九頭龍が、再び攻勢に転じる。

大鎌を袈裟懸けに、リズム良く刻んでゆく。

大鎌が妖精のいた空間を過ぎるごとに、鮮血が飛び交う。

中には掠り傷で済むものから、一撃で呼吸ができなくなる者もいる。

「痛いよあ…お父さん…お母さん…」

「私は…私はあいつさえ救えれば…だけど、それも…もう……う、
うわあああ！」

「ありがと…、これで私も親友のところへ、行…け……」

「おばえてなさい！わたしを倒しても、第二、第三の妖精が…、きつ、きやああー！」

流石に何十匹も殺傷すれば、他の妖精たちも怖気ついて逃げた。

何やら逞しい発言する者もいる上に、悲しい事をいう奴もいた。ただ彼女らはまた復活するので、オレは特に気に止めない。

「ヤレヤレ…流石に疲れたな」

大量の妖精を倒し、疲労感を憶えた。

始めにみた向日葵の風景は、案の定染められていた。それどころか、向日葵の頸を何本も刎ねてしまったのか、そこはまるで畑泥棒にでもあったかのような姿になっていた。

「ああー、少し休むか……あ？」

腰を下ろし、一時の休息を取ろうとした九頭龍が、背後から妖怪の気配を感じ取り振り向く。

「うふふ…ねえ。此処で何かあったか教えてもらえるかしら」

「・・・ああ？」

背後から殺気を感じ、振り向くとそこには日傘を差した女性の姿。赤い瞳に、緑色の髪。独特な雰囲気飲み込まれそうな錯覚に陥る。

「私の向日葵畑がね、如何やら野鼠に食い荒らされてしまったみたいだね。」

「ああ…、そういえば妖精が此処で暴れてったぞ」

「その線も考えたのだけれど。でもどう見ても妖精がなせる荒らし方じゃあないのよねえ。」

こんなに綺麗な斬り筋、よっぽど切れ味の良い刃物なのね、きっと。

「

オレの所持している大鎌に目をむけ、そう呟く緑髪の女性。緑髪の女性と呼ぶのも何なので、名前を訊ねて見る。

「あんた、名前は何て言うんだ？」

「此れから死に行く者に名乗ってもしょうがないと思うけど、冥土の土産に教えてあげるわ。」

私は風見幽香。此処の太陽の畑の管理人、とでも思ってもらえば良いわ。」

「俺は九頭龍、死神だ。」

「へえ、死神…虐め甲斐がありそうだわ」

日傘を閉じ、俺に向けてくる。

同時に異常なまでの殺気が漏れ出してくるのが感じた。

「お前、少しイカれてやがんな。妖精どもが逃げ出したのも、お前が原因か」

「前に少し虐めただけよ。それは私の日常、日課なもの。」

「ずっと前に聞いた事がある。長く生き続けることは罪だってな。幻想郷には人間であろうと妖怪であろうと、幽霊であろうと妖精であろうと構うことなく

攻撃してくる厄介な妖怪がいるともな。」

「・・・」

「それも大した理由もなく、自身の慰めの為にな。・・・閻魔さんに聞いた話だがよ」

「さつきから黙って聞いてればふざけた事言っのね。自分は虐められないとも思っているのかしら？」

「お前さんには此処で白黒つける必要があるのかもしれないなあ。俺の仕事じゃあねえんだが、任されちまったんじゃあ仕方ないね」

「面白い事言うじゃない。誰が上で誰が下なのか、貴方にも教えてあげるわ！」

風見幽香が傘の先端から弾幕を放ってくる。

妖精が放つような優しいものではなく、直撃すれば無事では済まな

いレベルのものだ。

「貴方も刃物を扱うのね。それも鎌なんて、死神は鎌じゃあなければダメなのかしら？」

「ああ、否が応でも就任時に鎌を与えられるぞ」

大鎌を思い切りぶん投げ、幽香を切り裂こうとする。しかし、それは難なく避けられてしまった。

「鎌に紐…鎖鎌のようなものね！」

幽香の背後を過ぎった大鎌を、括り付けてある紐を引っ張る事で自身に戻す。

対する幽香も大鎌が戻ってくることを予知していた為に、あっさりと避けられる。

「危ない…、本当に殺しにかかってくるとはね！」

「ちイ、外したか。少しでも良い…相手の血が手に入れば勝てるんだがよオ！」

幽香は考えていた。

目の前の男をどう虐めるか、どのように料理してやるか。

大鎌を持ち、自らを死神と名乗る男。

対峙した時の雰囲気では然程驚異は感じられなかった。
だが、戦闘を続けるうちに男の様子が変わっていくのが分かる。
目が血走り、口調も乱暴になってゆく。

この九頭龍という男、かなりの戦闘狂ね。

大きな鎌を無茶苦茶に振り回すが、強ち適当というわけでもないようだ。

私が避けた地点に振るう、とても素直な太刀筋。
変なフェイントが無い分、しっかりと対処しなければ忽ちに両断されてしまうだろう。

「弾幕だけじゃあ膠着状態になるわね……。それならコレはどうかしら？」

私は変わり果てた姿になった太陽の焔に咲く向日葵を操る。

向日葵の黄色の花びらを妖力で鋭利化、高速回転させて九頭龍という死神に向けて嚇ける。

「チエーンソーみてーなもんかよ！」

荒ぶっているのか、乱暴に言葉を放つとそれらを鎌で弾く。

私は飛び交う向日葵と共に、九頭龍を殺すため行動する。

「一手違えば真つ二つ。さて、どう対処するのかしら――」

「邪魔だコラァ！」

向日葵を援護するかのように飛び掛った私に怒声。
手の平を突き出し、良くわからない言葉を呟くと、彼の手の平から
突風が吹いた。

「——クツ…」

いくら鋭利化し、高速回転しているといえど、向日葵は向日葵。
突風が吹けばそれに従い、風下にいる私に向けて襲い掛かってくる。
自身が撒いたタネが自身を襲う。何とも滑稽な話だ。

「けど、幾ら突風と言えども風は風。殺傷力はないわね」

「阿呆がッ!！」

「——ッ!？」

突風が止んだと思い、攻勢に転じようとしたところで背後に違和感。
咄嗟に身体を横に反らして避けようとしたが、肩を少し掠ってしま
う。

「ふん、小賢しい…」

「きたア!きたきたキタアッ!！」

肩を少し怪我し、血を流した。

だが、それよりも相手の豹変振りに私は、本の少しだが恐怖した。狂ったように、言葉を連呼し、物凄く興奮しているのが見て取れる。一体何があったのか。ただ私に手傷を負わせた程度なのに――

「見てて下さいよオ映姫様ア！俺殺るから、マジ本気！内蔵とか引きずり出してやりますからアア！」

ペロリ、と刃に付着した風見幽香の血液を舐め取る。

一方の幽香は、おぞましい者でも見るかのように此方を見据えていた。

俺は今興奮している。

発売を待っていた大人気のテレビゲームが、長い時を経て入手し、まさにタイトル画面に至っているかのような気分だ。

相手の血液を摂取する事で、能力がどう変貌するか楽しみでしうがなかった。

「私をイカれてるとか何だとか…イカれてるのは貴方のほうじゃない。」

「っるせー！テメーは遅かれ早かれ、俺に呪われる運命なんだよ」

何なのよ、この男は。

死神は死に触れると気が触れてしまう癖でもあるのかしら？

…何にしても目障りだ、と思った私は、目の前の男に向けてレーザー状の弾幕を発射する。

「もう死になさい。・・・マスター・スパーク」

私のこの攻撃と、非常に酷似した技を使う者がいる。

そいつがマスター・スパークと名乗っているので、私も同じように名乗る時もある。

名前があるのと無いのでは、色々違うらしい。

日傘の先端から、超極太レーザーがイカれた死神野郎を包む――

――恐らく死神は私の弾幕で重症を負っただろう。

マスター・スパークを放った私には、それが身に染みて分かる。

「・・・痛えだろ、痛えか？なア、そう思うだろオオ！？」

「ちッ、コイツの能力か何かね…。流石に良い能力を持つてるわね。・・・」

強気な発言の割には呆気なかった、何て思っていたがそれは違った。私と同じくボロボロであったが、奴は死神。恐らく頸を刎ねでもしなければ死なないだろう。

「テメーはもうお終いだ！むちゃくちゃ痛てーから覚悟しとけよ！」

九頭龍と名乗った死神が、気が触れた発言をしたかと思った刹那、足に激痛が走る。

奴が自分の足に、鎌の刃を突き刺していた。

「アッ、グウ……ッ」

「ゲハハハア！人の痛みを知らねー無心論者がア！痛いだろ？気持ち良いだろオオ！？」

「能力を、発動して…見境の無くなる特異タイプか…」

どうやら私は、目の前の死神と痛覚を共有している状態のようだ。事実、目の前で足を貫いた死神。その激痛が私にも感じるからだ。幸いなのが、貫いた事で共有しているのが痛みのみだ。私の足には風穴は空いていなかった。

「さアどうすんだ？何か抵抗してみるよコラ！……それとも、もう終わりにするかア？」

鎌を自らの心臓付近にちらつかせ、私を脅しかける。

…ここまで為す術がないのも珍しいわね。そして滑稽にされるのも。

「急所を貫いた時の感触が気になる……きつと気持ち良いんだろーなア…」

もしもコレが術ならば、何かしらのルールやリスクが伴うはずだ。だが、それも何も浮かんでこない。

能力だとすれば、きっと条件があるはずだ。
だが、発動してしまった現時点ではもう遅いだろう。
この能力の欠点があるとすれば――

「さア、くたばれコラアッ!!」

「――ッ!!」

真っ直ぐに自分を殺しにかかる死神。

私は今できる可能性を実行する他なかった。

…それは、自らの腕に致命傷となる一撃を与えること。

「――ぐおッ!?!…。てめえ、考えやがったな…。そうか、能力には弱点もあるもんだよな…」

私は奴が鎌を右手に持っているのを確認し、同じく自身の右腕に一撃を与えてみた。

すると、感覚を共有している為に、同じ激痛が死神にも伝わっているようだ。

「ふう…。やはりね。この能力には穴があるみたいね…」

「てめえ、ふざけやがって…。少し寝てやがれッ!!」

死神が自らの腹を貫いた。

口から多量の血液を噴出する。それも互いに。

物理的に不死身である彼のほうが、実質有利な状況であつた。
そして風見幽香は、自身を削ることではか相手にダメージを与えられない、最悪な状況だ。

「へっへへ… テメーには映姫様の裁きが降るぜ」

力量では完全に上回っていたと自負していたのに、と悔しがる幽香しかし、その不気味な能力の為に一瞬にして窮地に追い遣られてしまった。

「くっ… 私も、… いや、この私が… 死神如きに…？」

先程の発言から、目の前の死神はまだ自身の能力を完全に理解していないようだ。

理解していないからこそ、此处で負かされてしまったのが悔しくてしょうがない。

涙目になりながらも、大地と接吻するしか術が残されていない幽香を見下ろす九頭龍。

「… お前みたいな良い女を殺すのも勿体無いけどよ。… いや、そうだな」

下卑た笑みで大地と接吻している幽香に近づく九頭龍。

この時点で幽香は完全にお終いだろっ、と諦めの表情をしたのを彼は知らない。

九頭龍に体勢を返され、仰向けにさせられ、顔を支えられる。

此処で犯されるのならば、いつその事舌を嚙んで自害してやろうか。と思っていた幽香。

その口元に、ある物があてがわれる。

嫌悪感が第一に現れ、顔を背けようとしたが頸が動かない。

「コレでお前は俺に抗えない。何時でも狩れる状態だ。」

小瓶に幽香の血液を保管し、懐にしまう。

妙な事をされずに静かに安堵する幽香。

「殺すには惜しい…、お前には自分の罪を償ってもらうぜ。死んで楽にさせちまう処だったぜ」

「罪を、償う…ですって？」

「ああ、そうだ。お前は俺に抗えない。お前の血を用いて契約をする。…ああ、あの家が良いな」

彼が目を向けた家は、風見幽香の住む場所だ。

彼はそこに移動する。勿論、重症を負っている幽香は放置して、だ。

ああ、ここで終わりなのかもしれないな。と幽香は思っていた。

いくら長寿の大妖怪と謳われた彼女でも、僅かな期間では傷は癒えない。

完治するには最低でも24時間以上の時間が必要だろう。

彼がこの場を去り、幽香の家に入ってから数十分後。

幽香は自らの体が浮遊、と思ったら超重力がかかったかのような錯覚に陥った。

重症も負っておる事もあり、痛みに顔をしかめ目を空けると…そこは自室であつた。

「はっは、やっぱり生き物も口寄せできたな。」

「何で…此処は、私の家？」

「お前の血を利用し、此処に時空間移動させた。…要は、俺とお前とで血の契約を結んだのだ。」

「血の契約…ねえ。私を殺さないのかしら。…生かしておけば、また貴方の命を狙うわよ？」

「術を試してみたかつたしな。何よりも良い女だ、殺すには惜しかった」

九頭龍の言葉に、彼女は顔を少し赤らめ

「下品な男…ね。私を生かしておいた事、いつか後悔するわよ…」

そう呟いて、彼女の意識が無くなった。

眠ってしまったのか、呼吸はしているので死んではないようだ。

——やはり、敵の血を摂る事で能力は更に変貌を遂げた。共有する範囲が全体になったのは間違いないだろう。だが、逆に相手からの攻撃も共有してしまうようだ。

事実、先程幽香が腕を貫いたことで、此方へもダメージが及んできた。

不死身同士の戦いでは不毛の上に、複数人相手だと厳しい能力かもしれない。

…ま、今回は良い収穫ばかりだ。

着々と交友関係を広められているな、と実感できた日であった。

九龍の豹変 殺戮衝動（後書き）

どうみても飛段です。

本当にありがとうございました。

口寄せ

風見幽香と、ある契約を結んだ。

契約と表現してしまえば、大層な儀式と思われがちだが、言ってしまえば召還術だ。

——口寄せの術

血で契約した生き物を好きな時、好きな場所に呼び出す時空間忍術の一種。

契約者でなくとも、契約者の血液と術式さえあれば召還もできるが。”式”と言えば、そこまで束縛したものではないだろう。

俺は戦闘での傷の療養をしている幽香宅を訪れた。

見た目はそう酷い怪我を負っているわけじゃあない。

只、俺の能力による攻撃で、内部から破壊されてしまっている。

外傷は恐らく、彼女自身で貰った腕のみだろう。

「お呼びじゃないわよ、死神さん」

「そんな事言える様かよ。身の回りの世話してやるってんだから、大人しくしとけよ」

「何故態々そんな事を？」

「これから血汗を流して働いてもらおうって矢先に、てめーで動くこともできないんだろ。」

俺が態々看てやるってんだから、ありがたく思えよ風見幽香。」

俺の言葉に舌打ちをし、露骨に嫌悪感を顯にする。
そんな時は一にも二にも、まずは料理を奢ってやろう。
幽香宅のキッチンと呼ぶに相応しい場に移動する。

「妙に小綺麗だな。暴力女の家とは思えないねえ」

「喧しいわよ。というか、貴方何する気？」

俺がキッチンに移動した事に気付いたのか、妙な真似はしてくるな。と言わんばかりに語気を強めた。

怪我で動けぬ女性、そして看病に勤しむ漢。

その漢がキッチンに移動したとあらば、行つことは一つだろう？

「何って、飯を作ってやるんだよ。勝手に使うぞ」

「別に良いわよ、貴方料理下手っぽいし。」

「よし、料理は任せろー」

バリバリと食材を筆ると、幽香からやめて！と叫び声が聞こえてきた。

止めると言われて止めるほど中途半端じゃあないので、このまま続行する事にする。

俺がキッチンに立つと少しの間、俺に嫌味つたらしい言葉が投げかけられる。

そんな事は気にせずに、淡々と漢の手料理を作る。読者諸兄もカツプラーメンばかり食べてちゃあダメだぞ。

幽香宅に置いてある、あり合わせの食材で適当に料理を作る。
少しして、と言っても四半刻弱かったが、漢の料理が完成した。

「ほらよ、食べ。どうせ動けなくて何も食ってねーんだろ？」

出来立ての料理を差し出すと、幽香がそつぽを向いた。

「必要無いって言ったでしょ。死神の料理なんて食べたら、それこそ死んじゃいそうだし。」

「んなこたあねえ。味見もしたし、食中毒ってオチは看破してあるぞ」

「どうだか。口の悪い人って大抵味付けも下手糞なのよね」

どうしても食べたくない様子の幽香。

無理強いも良くないか、と思い料理を近くのテーブルに置いておく。

「・・・ま、食いたくなきゃ好きにすると良さ」

「・・・」

俺の行為に幽香がつまらなそうな表情を浮べる。

遊ばれていたにしろ、これ以上此処にいても相手の上げ足取り合戦だろう。

「またな、次に来る時までにくたばってんなよ」

「ふん、もう来るな」

カタン、と幽香宅の扉が閉まる音が響き渡る。

室内に残ったのは、療養中の風見幽香のみ。

彼女がテーブルに目を向ける。

そこには先程、彼が作り置いた手料理が置いてあった。

料理から上がる湯気が、出来立てである何よりの証拠だろう。

幽香は、その手料理を一瞥、そしてそれが目に入らないように寝返りを打つ。

鼻を小さく鳴らし、何とも面白くない。と一人苛立ちを覚える幽香であった。

——一体、どれ程時間が経ったのだろうか。

外が暗闇の事から、少なくとも二刻は経過しているだろう。

つい目が覚めてしまい、何とも不快だ。

何が不快なのか。…それは真夜中に目覚めてしまった事実ではなく、普段何も置いてない、小奇麗にしているテーブルに、冷めた手料理が置いてある現実が。

それが眼に飛び込んでしまう現実には、僅かながら苛立ちを覚えた。そして人の成りをしている定めか、腹の虫が鳴いてしまう情けない自分を叱咤したい。

ふと、テーブルに視線が移る。

初めて見た時は、予想よりも整った料理が運ばれてきたな、と思った。

あの時はつい、彼の手料理を拒む言動をとってしまった。

手料理を運ばれてきた時、自分では良く分からなかった感情。素直に嬉しい、といった感情なのかもしれない。

そしてもう一つは、敵に情けをかけられたかのような、或いは施しを受けたかのような屈辱感。

それらが交わり、つい突き放してしまうような言葉を投げかけてしまった。

「・・・」

気がついたら妖力を使い、空中に浮かんで起き上がる自分がいた。

四肢を動かせぬ、せめてもの移動法だ。

——食べてやつても、良いかもしれない。

もしもこの場に彼がいたら、いらぬ。今すぐに下げる。といった発言をしていたのかもしれない。

気付いたら、彼の作った手料理を口に運んでいた。

見た目よりも軽く、療養中の私でも残さずに処理できる程度の分量だった。

料理を口に運んでまず真っ先に思った。——冷めている

あの場で拒まずに、素直に食べていたのならきつと温かったのだろう。

真夜中という雰囲気もあり、冷たい料理は私の心を果てしない程までに凍えさせた。

料理は冷めているだけで、味は思っていたよりもずっと美味しかった。

一流の料理人が作る程ではないにしろ、ド素人が手掛けたとも思えない。

丁度良い味付けが、私の味覚を満たしてゆく――。

「はぁ・・・」

料理を食べ終わり、まず溜息をついた。

結局、完食してしまった。

心の底から沸々と湧いてくる、後悔の念。

もしも明日、或いは近いうちに彼が訪問して来たとする。

恐らく……いや、確実に彼はこの事実をネタに、私をからかってくる事だろう。

もう一つ、深い溜息をつく。

ベッドに潜り込み、毛布を被る。

すると、どうしようもない幸福感が沸々と湧き上がってきた。

人の成りをしていり以上、満腹、という状態はこんなにも幸福な事なのだろうか。

そしてまた彼が来るのか、と思うと、鼓動が一つ大きく跳ねると同時に、今までに感じた事のない感情に堕ちる。

どうして、何故。と考えているうちに、眠気が襲ってくる。

難しい事、自分では理解に苦しむ事に思考を巡らせると、こんなにも睡魔の呪いは早いのか――

「・・・ふう」

家に着き、俺は溜息をついた。

肉体的に疲れたわけではなく、精神的に疲れた。

最近になり、何かと気を遣う出来事が増えた気がする。

鬼の幼女しかり、暴力女しかり。

映姫様と対話する時も、同様に気を遣っていた気がするな。

「結局、風見の野郎食わなかったな」

俺が作った手料理に目も向けずに、床に就いた。

食欲が無かったか、或いは単に気に入らなかったか。
考えるまでもなく後者だろう。

「ま、良いや。寝る」

解決に至らぬ事に思考を使うと、すぐに疲れる。

こういう時は一度睡眠をとり、脳をスッキリさせたほうが良いだろう。

そう思い、寝室に入ろうとすると悪魔の声が響き渡る。

「おーっす、また来たぞー！」

萃香さんだ。

こんな夜遅くに来るという事は、恐らくはまた睡眠をとりにきたのだろう。

萃香さん曰く、室内が暖かい上に雰囲気が好きだ、と我が家は好評。どうせ黙って寝るだろう。その為に態々寝室を二箇所も用意したのだ。

そう思って隠れるように布団に潜り込むと、今度は大声。

「おーい、腹減ったぞー！でてこんかーい！！」

案の定、萃香さんは酔っ払っていた。

最近解かった事なのだが、彼女は酔っ払うとたまに巨大化する。きつと能力だろう、迷惑極まりない。

今回も酔っ払っているの、恐らくは家が壊れぬ程度に巨大化しているはずだ。

「こら、寝るなー！一緒に食うぞ！また飲むぞー！」

「うるせーぞ、俺はもう寝るから。起こすなよ。いいか、絶対だぞ？」

いそいそと布団に潜り込む。

すぐに瞳を閉じ、睡魔に身を任せることにした。

しかし、そんな俺を労わる事など彼女の頭には全く、と言ってほどなかった。

んしょ、と小さな声と共に布団に入り込んでくる。

「ああもう臭いな、酒臭いぞ」

「そんなの酒を呑んでたんだから当然だろお？んー…思ったよりも良い体してるねえ…」

「こら、抱き着くんじゃあない」

俺の身体を弄りながらもそう呟く萃香さん。

鬼の手、それも小さな手の平が俺の胸を撫でる。

身体を撫でる動きが止まる気配を見せないの、俺は負けじと対抗する事にした。

「…ふう、お遊びはここまでだ」

「うん？」

俺の背後で小さく丸まっていた萃香さん。

正面に向かい合うように寝返りを打ち、萃香さんを抱擁した。

抱擁、と表現すれば優しく艶やかなイメージを与えるだろう。

抱擁…否、チープ・トリックを思わせるかのような抱擁を俺はしてみせた。

「うぷっ…ぐ、ぐるじいぞ…」

萃香さんが苦情を呟く。

鬼の力に叶うはずもなく、そのうちに切り返されるだろう。

と思っていたが、いつまで経ってもそれは返ってこなかった。

暫くすると、萃香さんの呻き声が止み、耳に飛び込んでくるのは寝息。

「…ああ？くそう、勝手に寝やがって…」

規則正しい呼吸音は、萃香さんが快眠を貪っている事を証明していた。

吐き出される吐息からは、禍々しいほどまでの酒気を帯びた臭い。溜息を一つ吐き、戸棚から粘着性のある物体を取り出す。

酒の臭いがキツく、此方の睡眠を妨げてしまう程である。
萃香さんの口元を粘着性のある、所謂ガムテープのような物で閉じた。

一瞬呼吸が止まったかのように思えたが、如何やら鼻で呼吸していたようなので特に支障はなかったのか。

それにしても口を空けながら鼻で呼吸とは。器用な真似をやってくれる。

こうして快適な朝日を拝めるな、と信じてこの日を終える事に意識を集中させた。

突然、頭部から異常なまでの激痛を感じて目覚める。
まるで殴られたかのような、鋭い痛み、そしてそこからは熱を感じた。

意識しないでも涙目になっているだろう、俺の表情。

そしてぼやける瞳を覚醒させ、見上げてみるとそこには――

「起きろ、九頭」

「ちっ、何なんだよ一体……」

舌打ちをしつつ呟く。

俺の快眠を妨げる無作法物は誰ぞや。

そう思いながら見上げると、どうやらご立腹の様子の子香さん。
カリスマ、と表現するには一味足りない風格。

しかし、流石に鬼と呼ばれる者が怒るとその威圧感も半端じゃない。

「コレ、お前がつけたんだろ？何か苦しいなと思っていたら、私にこんな真似するとは良い度胸してるじゃあないか。」

「だってよオ、お前の口臭、スゲー臭かったんだぜ？」

「お前も同じような臭いにしてやろうか？」

伊吹瓢を俺に向かって投げる。

それを受け取り、中身をのぞいてみた。

「うげ、よくこんなん呑めるな。」

「私程の酒好きになれば、こんなのは水同然さ」

伊吹瓢は酒虫という少量の水を多量の酒に変える生物の体液が塗布されている。

それによつて酒が無限に沸き出るようになっていたのだ。

「…おっと、そういえば俺にはやる事があつたんだ」

「うん？暇人のお前が何をするってんだい」

喜怒哀樂の激しい萃香さん。

俺の言葉を訝しげに、そしてサラリと嫌味の如く言葉を返してきた。

「あー、ちよつとな。なに、これだけ広い家に従者は必要だろう。と思つてな」

「・・・従、者？」

彼女は”従者”という言葉に、吸血鬼の犬の名前を思い浮かべた事は九頭龍は知る由もなかった。

「確かに広いがねえ。特に威厳を有してるわけでもなし。従者なんざ必要ないだろう？」

「従者つてのは半分、残りは遊び心だわ。」

現在の交友者リストを作るならば、

萃香さん

レイセン

風見幽香

その他多くの妖精勢の皆様

だろう。

少ないがどいつも癖の強い輩ばかりだ。

一人くらい交友を深めても問題ないだろ？

深めると言つても、まずは自身の術の実験台に近いが。

今術式を結び、召還しようと思えば彼女を召還する事ができるだろう。

しかし、現在療養中の彼女を無理矢理呼び寄せるのも面白くなかつ

た。

完治するまでは我慢、そして看病を続けるだろう。

「じゃあな、俺は行くぞ。大人しく酒でも呑んでろよ」

「言われなくとも。…で、何所行くの？」

「教えねえよ。ほら、さっさと神社にでも行つてこい」

早々に家を出る。

こんな辺鄙な土地に態々盗みを働く輩もいないので、留守番など任せない。

萃香さんも家を荒らすような真似はしない。食い散らかす真似はしてくれるが。

そうして今日も幽香宅を訪れるのだった。

——今日も来た。

鼓動が一つ高鳴ったのを無視し、彼と目が合わぬ方向へと寝返りを打った。

こんな朝早くから何しに来たのか、疑問に思った。

そして私のほうこそ、何故こんな朝早くに目が覚めてるのかも疑問に思った。

「おつす、…流石に寝てやがるか」

彼は呟きつつも、私の家を散策しているのか、歩き回っていた。彼は私が思うに、非常に気まぐれな人物なのだと思う。

戦闘の時は、あれ程残忍で殺戮的な生物は見た事が無いと思った。そしてその後はご覧の通り、自らの後始末のつもりなのだろうか、度々訪れては私の容態を気にしているようだ。

そんなに気にするのなら、始めからこのような事しなければ良かったのに。

突如として香ばしい臭いが漂ってきた。

恐らくは彼がまた調理を始めたのだろうか。

そういえば、昨晚のお皿はもう片したのだろうか。

今思ったら、何もからかう事をされなかったな。

いや、よくよく考えれば寝たふりしている私に言葉をかけるとなれば、

寝たふりに気がついていてるか、よほどの変人のどちらだろう。

「——もう寝たふりは終いだ。さつさと食っとけよ」

言葉と供に、昨晚と同じように料理をテーブルに置いた。

既に気付かれていたのか、或いは始めから——

「ふっ…また余計な事を。」

「昨日の飯は美味かったか？」

「——ッ、知らないわよ。鼠が食い散らかしていったの。」

「にしては綺麗に召し上がられたもんだが…ま、いいか。」

どうやら全て見抜かれていたようだ。

始めから見抜かれているのにこのような言葉、きっと私は相当に間抜けに映っている事だろう。

そして朝食を作り終えた彼は、早々に帰り支度を始めていた。

「じゃあな、また昼辺りに来るぞ」

「・・・」

彼の別れの挨拶に、私は無言で答えた。

何故彼は此処まで私に着いて回るのだろうか。

恐らく、今日はこの理由を考えている間にまた眠りについてしまうのだろう。

何となく、今度こそは、といった気持ちでテーブルに置かれた手料理を口にした。

「——暖かい」

作りたての朝食は、矢張り心の温まる手料理であつた——

こんな感じの日々が続いた。

始めの数日は退屈こそしなかった。

だがそれも一月を越えた頃に、退屈だ。と感じ始めた。

萃香さんは相変わらず我が家に侵入しては、気ままな日常を送っているようだ。

レイセンとは初めて会った頃から全然会っていない。

そういえば、この前に人里で会ったような気もするが。

そして問題の風見幽香。

今日も今日とて、幽香宅を訪れる。

そして俺が抱いていた感情を、幽香に向け吐露する。

「お前の怪我、絶対治ってるだろ・・・」

「あら、何のことかしら」

俺が注いだ紅茶を、ベッドの上で啜る幽香。

俺の疑念を否定されるが、その表情からは嘘の味がするぜッ!!

優雅に此方を見据え微笑んでいる様を見ると、どうやら怪我のほうは完治していると思っても良さそうだ。

「お前ほどの妖怪ともなれば、普通は数日で完全回復すると思ってたんだが」

素直に思っている事を伝える。

すると幽香はピクン、と一瞬震えたように見えた。

そして軽く咳き込んでから、”それは偏見だ”と俺にのたまう。

幽香は俺を再度見直すと、ある質問をふっかけた。

「――で！私にここまで世話をしたとあらば、当然貴方にも企みがあるんでしょ？」

「ああ、勿論な。何だと思う？」

「皆目検討もつかないわ。でも、どうせ貴方の事だから、体目当てって訳でもなさそうね」

もしも体目当てだったのならば、自分を侮辱した事と気持ちを踏み躪った思いを怒りの炎の変え、殺してやろうかと思っていた。
対する九頭龍は、面白そうに状況を楽しむかのような表情を受かべ答えた。

「ん――、半分正解。お前が意識を失ってる間に、俺がある契約を施した。」

「…何よそれ、夜這いでもしたってわけ？」

「訳分からん事言っな。…ま、実験ついだ。ちょっと試してみるから待ってるよ。」

「あ、ちょっと！」

九頭龍はベッドで優雅に紅茶を嗜んでいた幽香を尻目に、早々に幽香宅を後にした。

幽香は早々に話を切り上げた九頭龍に対し、面白くなさそうに溜息を吐いた。

一体何をされるのか、
” 実験 ”
といった響きが幽香の心を、ほんの
少し不安色に染めた。

口寄せ（後書き）

ジャシン様〓映姫様…？
はは、そんなばかな…

幽香、人格崩壊の巻

「ふう、こんなもんだろ」

早々に幽香宅を後にし、自宅へと戻った。

萃香さんは家内にいるみたいだが、家の外にいる俺には関係のない事だ。

地面に徐に円陣を描いた。

それを中心に、罰印を意識して印を連ねた。

俺が描いたのは、口寄せの術の前提のようなもの。

これが成功すれば、後は巻物など適当なものに同じような式を描けば、いつでも口寄せを使用できる。

現に、俺の大鎌はこの方法で持ち歩いているからだ。

術式の上に立ち、その中心部にある液体をかける。

言わずとも知れた、風見幽香の血液。

血液とは、動物等の体液であり、全身の細胞に栄養分や酸素を運搬したり、

二酸化炭素や老廃物を運び出す役割を持っているもの。

その機能を見るに、臓器の一種と喻えても偽り無い。

俺のほうから一方的に結んだ契約。

それを用いて今まさに、風見幽香を召還してみせる。

地面に零した血液が、その水分を土に吸収される様を合図にし、

「口寄せの術！」

両の手を印を連ねた円陣の中に添える。
俺の言葉から少し間を置いて、何もない空間から突如として白煙が現れた。

「…とりあえずは成功っぽいな」

白煙の中で咳き込む、自分の知った声。

「——ッ何なのよ、もう！」

「よお、ご機嫌の悪そうな事で。」

「九頭龍・・・、実験とはよく言ったものね。私に何を仕込んだのかしら？」

ワナワナと震えながら、俺にそう問いかけてくる幽香。

どうやら大分ご機嫌斜めのご様子だ。

俺は風見幽香に、事の成り行きを説明する。

成り行きといえば語弊が生じるだろう。

簡単に、術の概要や仕組み等を幽香に伝えた。

「随分とふざけた真似をしてくれるじゃない。血の契約だなんて、私を手籠めにでもしたつもり？」

「そんな事、考えもしてなかった。従者程度に考えていたが、そんな器じゃあ無さそうだしな。」

無理矢理も好きだが、お前相手にそんな事すれば血を見る事になる

だろう。」

そもそも実験のつもりだから、もう良いよ。と言葉を吹っかけた九頭龍。

言葉通り、地面に描いた陣図を足で消してゆく。

そんな様をまじまじと見つめていた幽香は、目の前の木造建築物に意識を傾けた。

「立派な家ね。此処に住んでる輩は、恐らくとんでもない意地の悪い死神なのだと思うわ。」

「・・・何訳の分からない事を——って、勝手に入るな！」

「良いじゃない、別に減るものではないでしょ？」

定番の反論を述べ、ずかずかと家に侵入する幽香。

先程まで不機嫌だったのにこの変わり様、力のある妖怪は皆気まぐれなのだろうか？

…って、そういえば中には萃香さんがいたな。…ま、いいか。俺は外にいてよう。

暫くすると、案の定何やら言い争ってる二人。当然だ。

言われもしない留守番をしていた萃香さんが、無神経に家に侵入してきた妖怪を見たらどう思うだろうか。

考えるまでも無く、武力衝突は覚悟しなければならいだろう。ゆったりと我が家の玄関口を眺めていると、物凄い勢いで小柄な鬼

が飛び出してきた。

「——って、九頭！何で風見幽香がこんな所に来てるんだい！そもそも、どうしてお前と風見幽香が顔見知り！」

「小さな百鬼夜行、伊吹萃香…何で彼の家に？」

「オーライ、落ち着けよ二人とも。そうだ、素数を数えるんだ。素数は自分と”1”でしか割れない数字。

お前ら二人もこの間抜けで孤独な数字を無心に数えろよ、2…3…5…——」

酒気を帯びつつも、風見幽香に悠然と立ち向かう萃香さん。

そして何故か殺気を醸し出している幽香。

そんな中、俺は場を和ませようと全力を尽くしたが、結果は思うようにはいかなかった。

「”九頭”なんて呼んじゃって、鬼と死神なんて良いコンビになりそうねえ」

「…？何言ってるんだい、この妖怪は。」

「風見イ、俺と萃香さんはそんなじゃねーよ。」

「へえ、そうなの。どうでも良いわよ、そんな事！」

幽香が動揺している。

傍から見ている俺でも、恐らく萃香さんもそう思っている事だろう

か。

「その通りだ、風見。オメーら二人が暴れられると、俺の家が消し炭になっちまうだろーが。」

「それは私も困るぞ、九頭。」

「——九頭。そう、私もそう呼ぶわ!」

突然訳の分からない事をのたまう風見幽香。

あまりにも話の序列から離れすぎだろう、と思いつつもその理由を聞いてみた。

「どういった心境の変化だ？自ら従者にでも成り下がるか、風見。」

「そんな訳ないじゃない。私の事も幽香、って呼んでいいわよ、クス。」

「イントネーションが違う気がするが…ま、いいや。」

「あんだ、馬鹿にされてるよ・・・。」

萃香さんの的確なツッコミを叩き込む。

そんな事など露知らず、俺は幽香に聞いてみた。

「本当に何のつもりなんだ。普段の風見幽香と違うし、気味悪いな。」

「幽香で良いって言ってるじゃない。…そうね、ほとんど暇つぶしね。それと――」

幽香が妙に言葉をためる。

変なため方であつたので、此方としては次の言葉が待ち遠しく感じられた。

そして幽香は、艶やかな、それでいても相手に畏怖や恐怖といった感情を与える表情で答える。

「――貴方は、私の手で殺してやろうって思ってたね。」

言葉を詰まらせ、ためた後に言い放った言がこれだ。

その言葉に、俺は呆気にとられた。

少し前にこの言葉を向けられたら、恐らくは身構えていた事だろう。だが今は違った。

遊び心も含まれているのだろう、と何故か自分で感じる事ができる。

「風見幽香。あんたが九頭に手を出そうってんなら、コイツの友として見過ごす訳にはいかないねえ」

萃香さんが怒気を含め、それでいて殺気もしっかりと込めてそう言つた。

「…いや、良いんだ萃香さんよ。こういったタマのつえー女、俺は好きだぜ」

「――なッ…」

「・・・やっぱり苦手だ」

俺の高ぶった感情が、幽香の露骨な反応に氷点下まで下げられた。

「…ふん、狙ってやったのよ。変に付き纏われても困るし。」

「俺の心を読むんじゃあねえ。それに俺はストーカーじゃねーし、手に入れたと思ったものには全力を尽くすぜ?」

「俺は付き纏います」って言ってるようなもんじゃない。」

「だからよ、どう読み取ったらそんな考えに至るんだ?」

幽香と九頭龍の、夫婦漫才と呼べてしまうかもしれない会話に萃香が溜息をついた。

そして彼女は心の奥底で小さく呟いた。 ” 良いコンビなのは、一体どっちのほうだ ” と。

あの日を境に、暇を持て余せば我が家にそれを潰しに来る幽香がいた。

特に危害を加えに来るでもなく、予想よりもずっと大人しかった。俺自身も毎日放浪している訳でもない、一週間単位で考えるならば、2、3回は家で休をとっている時もある。

それに、この木造建築物は他の場所に移設もできる。

良い土地があれば新たに、術を行使して召還を試みるつもりだ。

風見幽香が来客する。

特に何をするでもなく、俺や萃香さんと駄弁っている。

萃香さんとは時たま衝突する時もあるが、破壊行為まで発展する事はなかった。

我が家のインテリアにケチをつけつつも、2階の日の当たりの良い部屋に目を付け

” 良い部屋ね、ちょっと飾らせてもらうわよ ” 等と、拒否権の発生しない発言を放つ。

その日以来、その部屋は風見幽香の私室、そして我が家を別荘のように扱いだした。

幾つか部屋が余っているので、俺は別段構わなかった。少し横暴だとは思ったが。

そんな事がありつつも、今日も今日とてしがない日々が続いている。仕事？ ああ、そんなのもあったような、なかったような。

特に監視されているという訳でもないので、行き当たりで仕事をこなそうかと思っている。

「…で、何所に行くの？」

家の玄関口にて履物を整えていた俺に、不意に声がかけられた。声の主は風見幽香その人であった。

「何所つて、いつもの散策だよ」

「そうは言っけど貴方、いつも何所を散策しているというの？」

「ん・・・今日は魔法の森にも行こうかと思つてよ」

魔法の森には何度か行つた事がある。

特に発見はないが、あそこには珍しい茸が生えているのだ。

そして魔法の森に溢れる瘴気が、何とも俺を心地よい気分させてくれる。

「何で魔法の森なのよ？あそこには何も無いわよ」

「んなこたーない。見た事のない茸が俺を待っているんだ。じゃ、適当に過ごしてくれ」

俺は早々に玄関から外に出る。

扉から手を離す一瞬に、”——みたいな事を言うのね”と幽香が呟いていた。

冒頭は人物名のようにあつたが、うまく聞き取る事はできなかった。今日も今日とて、俺の散策の日々が始まるのである。

七色の人形遣い

――魔法の森

魔法の森とは、幻想郷の”魔”が集まった森である。

この森は常に禍々しい妖気で溢れており、更には化け物茸の胞子も舞っており、

普通の人間では森の瘴気に長時間耐える事ができない。

その為に、人間だけでなく妖怪もあまり寄り付く事が無い。

だが、化け物茸の胞子がもたらす幻覚は、人間の魔力を高める作用があり、魔法使いを志す者が好んで住み着くと言われている。

現在、俺は魔法の森の中にいる。

森の瘴気を全身に感じ、何とも言えぬ安心感が身を包み込む。

森と呼ばれるに相応しい程に木々が生茂っており、一步踏み違えれば一瞬で迷い込んでしまうだろう。

獣道と呼ばれる道を歩いて進むと、周りの大木の足元に如何わしい茸が生えているのが目に付く。

「お、食えば体が大きくなりそうなキノコだな……」

とりあえず箸り、家に持ち帰ることにした。

こういった山菜物も、俺にとっては貴重な食料である。

更に魔法の森を歩き続けると、他にも色々なキノコが手に入った。

斑模様の怪しいキノコ、チェックの柄のオシャレなキノコ。

食べれば幻覚を見させてくれそうなキノコに、食べれば自分の分身が増えそうなキノコも。

それらを全て家に持ち帰ろうと、腰元のバッグに保管する。

布製の簡単な物だが、例の暴力女がいないから譲るといって、強制イベントのお墨付き。

「大漁ってトコだな。…さて、帰——あ？」

パンパンに膨らんだバッグ。青色のツナギを身に付けたガタイの良い男性もご満悦だろう。

それを手の平で叩いていると、眼前に人間の住処のような建物が飛び込んできた。

「あの建物は…こんなトコに住む物好きがいるとはねえ」

気付いていたら目的の場所へと足が動いていた。

ほんの興味本位、少し見たら帰ろうと思っていた。

俺の足は、魔法の森に静かに佇む洋風の家へと向け動き出していった。

アリス・マーガトロイドは孤独であった。

様々な属性の魔法を扱える、万能型の魔法使い。

七色の人形遣いの名を冠する。

彼女は”魔法”に執着し、その研究を続けているようだ。

元人間の為、魔法使いになってから日が浅い。

普通の魔法使いならば、本来は食事や睡眠は必要ない。

だが、アリス・マーガトロイドは人間の風習である食事を、まさに行っていた。

「・・・」

一人黙々と食を進める彼女こそ、七色の人形遣い、アリス・マーガトロイド。

銀色の食器を器用に扱い、食を進める。

髪の毛が金色で肌の色は白い。一見すると人形のようにすら見えてしまう。

そんな彼女が銀の食器を優しく、そして音を立てぬよう静かにテーブルに置いた。

上品なその光景は、まるで貴族の娘を連想させてしまうだろう。

ふう、と静かに溜息をつくアリスが一言呟いた。

「…シャンハイ」

アリスのその言葉に、テーブルの向かい側席にいた小さな少女の人形が動き出した。

シャンハイ、と短く言葉を切ると、ふわりと宙を浮かぶ。

そしてそのままアリス邸の玄関口へと忙々と向かった。

——俺は見慣れぬ洋館へと赴いた。

魔法の森には似合わぬその館が、近づくに連れて徐々にその陰湿な雰囲気をもたらす。

一目見て入り口だと解かるその場所へと、無意識の内に近づいていた。

興味本位に近づいてみただけだった。

だが俺が洋館に近づくのに合わせて、館の扉が不自然に動いたのに気付いた。

一瞬殺気のようなものを感じ取り、敵か、と思ってしまった。

しかし、冷静になってみると扉からは人の気配を感じなかった。

いや、人の気配というよりは生物の気配だろう。

何かの仕掛けか、と思いつつも俺は扉の目の前に立っていた。

「ん…。なんだ、コイツ」

俺の目の前には小さな少女。

洋館の扉は俺が開けるまでもなく、目の前の小さな少女が開けていた。

腰元すらない少女の身の丈は、人間と名乗るには異形すぎた。

「シャンハイ」

俺が少女の眼前に立ち尽くしていると、扉を押さえながら手で促す中に入れ、という合図だろう。

俺はそれを察し、促されるままに中に入った。

案の定、館の中に入るとそれに合わせるように少女も扉を閉めた。

少女は役目を果たしたと言わんばかりに、空中に浮かんだ。

そして、まるで糸に手繰り寄せられているかのように館の奥へと消えていった。

「いらつしゃい、死神さん？」

「…ああ？なんだデメーは。」

傍から見れば喧嘩口調のように思えてしまっただろう。しかし、語調的には大変穏やかなものである。

「そいつ、人形か。よくデキたもんだな」

「そう思うでしょ？さ、シャンハイ。挨拶なさい」

「シャンハイ」

「・・・本当に人形かよ。自演だと思つと心が痛むぞ」

相手を小ばかにしたような態度の金髪の女に、俺が本心と供にそう返した。

すると目の前の女は、ぐっ、と歯噛み、適当に言葉を濁した。

「それよりも、俺に何か用か？自ら扉を開けるとはな。」

「そうねえ、少し興味が湧いていた所に、丁度良く転がってきたつてところかしら。」

そう言いながら机の上に置かれた書類を、俺に見せ付けてきた。古ぼけた、リサイクル紙のようなうすっぺらなものであった。見てみる、と言わんばかりにチラつかせてきたので、俺はそれを受

け取り目を通す。

「ん、何々…、ぶんぶん新聞？なんだコレ。」

「着目点が違うわね。見るなら一面を見なさいよ。」

「風見幽香、死神と思わしき人物に敗北。ルール無用の殺し合いの果てに。…で、なんだよ、コレは。」

丸めて家の隅にでも投げ捨ててやろうか、と思ったがやめた。

変わりに皺一つ付けずに、目の前の女に着き返す。

俺がぶんぶん新聞という謎の新聞を手渡すと、改めたように口を開いた。

「まだ名乗ってなかったわね。私の名はアリス・マーガトロイド。この新聞を見せたのはねえ、この記事に書いてある死神って男…もう言わなくても解かるわよね？」

「因みに、ぶんぶんじゃなくて文々。」と最後に付け足したアリスという女。

「俺は九頭龍だ。よろしくな、マーガトロイド。…で、俺はその死神だが、何か問題でもあるのか。」

「ええ、よろしく。マーガトロイド、じゃなくてアリスで良いわよ。…特に問題という問題はないわね。ただ、私自身が興味を抱いただけ。」

「そうかい。死にたかったら何時でも言いな。あの世まで道案内をしてやるよ、アリスちゃん。」

「ご親切にどうも。悪いけれど遠慮しておくわ。…それと、ちゃんを付けるな、ちゃんを。」

俺が道化ると、アリスもノってくれた。

どうやらノリが良いだが、如何せん。クールな性格なので嫌味っぽく聞こえてしまう。

偶然来客したのにも関わらず、数時間談笑を交わした俺達。どうしてこうなった、とは不思議と思わなかった。

それはまるで、一昔前の劇場みたいなアダルトな雰囲気であったから。

俺が微妙な笑みを浮かべていると、アリスが口を開いた。

「凄いでしょ、この子達」

喜々とした表情で俺に語りかけてくるアリス。

それは不器用な、それでいて聡明な少女が、初めて気軽に口を開ける存在を得たかのように。

片方の指をクイ、と少し動かすと部屋の奥から人形が浮かんでくる。一体だけではなかった。そこには先程扉を開けた少女の人形もいた。

「左から上海、蓬萊、仏蘭西にオルレアンよ。」

「シャンハイ」

口が達者なアリスと違い、人形達は己の名前しか口にしなかった。シャンハイ、オルレアンと。

ふわり、と浮かび上がったかと思うと、今度はペコリ、と此方に向けてお辞儀をした。

「良くできてるな、そいつら。何か役割でも持つてるのか？」

こんなに種類があるのだ。個々に役割的なものがあっても不思議じゃないだろう。

「うーん…弾幕ごっこや戦闘かしらね。偶に人形劇何かやる時もあるわね。後は……自爆ね」

危険な単語が飛び出してきたが、あえて触れない事にする。

どうせ、自爆何か使いどころがないだろうし。

美麗に作りこまれた人形を自爆させる程、アリスをか弱く見る事ができなかった。

「戦闘ねえ、こんなに数がいるんだから家事でもさせれば良いだろ」

「コレでも建前は一人暮らしなのよ。家事程度、私一人で十分よ。…偶に手伝わせる時もあるけどね」

建前も糞も、人形を家に置いてるからと言って一人暮らしでなくなる筈が無い。

もしもそれが適用されるのならば、目の前のアリス・マーガトロイドは十人暮らしを悠に超えるだろう。

色々な話をし、気が付けば窓の外に日の光は見えなかった。

余程長い間此処にいたのだろうか、本当に気が付いたらこんな時間であつた。

気付くと腹の虫も大いに泣き叫んでおり、そろそろ帰ることに決めた。

「じゃ、そろそろ行くわ。」

「……つと、帰るのかしら？」

「腹も空いた頃だしな。さっさと済ませちまう事にするよ」

俺がバッグの中のキノコを誇張しながらそう伝える。

するとアリスは立ち上がり、任せろ、と言わんばかりの表情で言葉を放つ。

「何それ、もしかしてこの森で採ったの？……ちよつと見せてみなさいな」

バッグから乱暴にキノコを掴み取る。

この地域に住んでいるのなら、生えているキノコにも詳しいのだろう。

俺はそれに従い、バッグをテーブルに置いて鑑定してもらう事にした。

アリスは適当に手に取ったキノコに目を通す。
鼻で何やら反応を示しているが、どうにも表情は曇っていた。

「――駄目ね、食べられないわよコレは。」

手に持っていたキノコを魔法で消し炭にしてみせた。

アリスが先程まで手に持っていたのは、赤と白の食べれば大きくなれそうなキノコであった。

一番楽しみにしていた上に、美味しそうだっただけに残念だ。

次々に手にとってキノコを鑑定してゆくアリス。

「これは幻覚茸ね、毒抜きをすれば食べられない事もないわね」

斑模様のキノコを手に取り、そう一言。

俺の中では一番食べられないだろう、と思っていたキノコだ。

「これは駄目。食べたらどうなるか検討もつかわないわね……」

緑色の食べると何かが増えそうなキノコ。

手に取った瞬間に魔法で消し炭に変えられてしまった。

このやり取りが続き、全て鑑定を終える頃にはテーブルには少ししか残らなかった。

半分以上が食べられないものであり、残ったのは4、5本である。

何やら食べられない物は、魔法の実験や素材などに使われるものであるそうだ。

シンプルな外見な程、危険なキノコが多いそうだ。

「お腹が空いてるんでしょ？ 此处で食べていけば良いじゃない。ご馳走するわよ」

「お、おう…：そうか、悪いな」

俺が答えるその前に席を立ち上がり、テーブルに広げられたキノコを人形に回収させてゆく。

その手際の良さに、俺は思わず口を濁した。

アリスがキッチンと思わしき場所へと赴くと、リビングは静寂に包まれた。

恒例の一人で暇つぶしか、と思っていたが目の前にはアリスの人形がいた。

「シャンハイ」

「しかしまあ、よくできたもんだ」

目の前で此方を見据え、大人しくしている上海人形に向けて一言。興味本位で俺は上海人形にちょっかいを出してみた。

「シャンハイ！」

近所の野良犬を可愛がるかのように、頸元をつまみ上げる。
すると上海人形は抗議の声をあげる。

と言っても、己の名を口にする事しかなかったが。

——と、先程まではそう思っていた。

「バカジャーネー」

頸元をつまみ上げ、凝視していた俺にその一言。

「ちっ…コイツぁ生意気だな」

「シャンハイ！」

嫌悪感を顕にした俺は、つまみ上げていた上海人形を包めたティッシュを捨てるかのように投げた。

緩やかな円を描きつつも、綺麗に飛んでいった上海人形。
主人がいないと性格が変わる、所謂ぶりっ子人形なのか。

「おら、ご主人様の手伝いでもしてこいよ」

「シャンハイ」

投げ捨てられた上海人形は、逃げるように俺の前から去っていった。
すると今度は新たに、別の人形がやってきた。

「ホラーイ」

「オルレアーン」

目の前でふわふわと浮かんでいる人形達を一瞥し、俺はある事を思い出した。

そういえばこの人形ども、自立型なのか。

それともアリスが今も操っているのか？

前者ならば素直に凄いと思う。

後者ならばある意味凄いと思いつつも、料理中にも関わらず俺にちよっかいを出してくる程俺に興味があるのだろうか。

何にせよ、目の前でソワソワしている人形が目障りなのに変わりはない。

「邪魔だぜテメーら…っ」と

浮遊しているオルレアン人形にデコピンを浴びせてみる。

オルレアン人形は盾でそれを防いだが、どうやら盾の素材は本物の鉄のようだ。

布などで作られているのかと思ったが、何とも作りこまれていたようだ、この人形どもは。

人形で暇を潰しているうちに、家の主が料理を持って戻ってきた。

「もう仲良しなのね？冷めないうちに、さっさと食べなさいよ」

そう言いながらテーブルに配膳してゆく。

アリスだけではなく、先程ぶっ飛ばされた上海人形もキッチンと手伝っていた。

アリスの手料理は、先程のキノコを基調としたものだ。

洒落た洋風の料理に通じていない俺には、目の前の茸料理がどういった物なのかは分からない。

チーズのような物も使用しているのか、香ばしい匂いと供に見た目も飾られている。

「ああ、遠慮しないで頂くぞ」

目の前にナイフとフォークが用意されていたが…どう見てもナイフを必要としない料理だ。

黙々と食を進めるが、調理主が食事をしていないのが気になった。

「なんだよ、自分は食わねえのか？」

「食べるわよ。食べるけど、・・・その前に味を聞いておこうと思っ
つて」

「不味かねーよ。普通に食べるし、美味い」

素直にそう答えると、アリスがぎこちなく食器を手に取り、同じく食事を始めた。

料理の感想としては、グラタンのような感じだ。

幻想郷にパスタ料理があったのか、先程の茸をふんだんに使用したトルテッリーニのような料理。

量は少なく種類が大目の、腹を満たす事よりも味覚を満足させる為

の食事であった。

「で、美味しかった？」

食を終えると、アリスが唐突に質問してきた。

「美味かったぞ。少し量が足らねーけど、ご愛嬌ってところか。」

「ふうん・・・で、どこら辺が美味しかったの？」

「どこら辺ってお前な…。そうだなあ」

アリスの質問にくどさを感じつつも、最良の答えを探す。

アリスは此方を凝視しており、答えを聞くまでは引くつもりはないようだ。

「斑模様が食べ難かったが、思ったよりも美味かった。見た目も洒落てたからな。」

量が多いと品が無くなっちまうんだろうよ、こっぴった食いもんは。」

「そ、そう。ありがとね」

俺の答えに満足したのか、下を向きつつもそう答えたアリスであった。

晩飯も御馳走になった事だし、流石に長居は無用と考えた俺は早々

に帰り支度をする。

それに気が付いたアリスがまたしても立ち上がった。

「また何か用か？」

漆黒に飾られた外套の皺を伸ばしつつ、そう質問する。

するとアリスは何か口籠ったが、俺には聞こえなかった。

” 何でもない ” とだけ聞こえたのは確かであったので、俺はアリス邸を後にする。

「またな、アリス。キノコを採りに来た時にまた寄るとするよ」

「え、ええ。今日はありがとね。また会いましょう、死神さん」

別れの台詞でも道化るアリスに、何だか心が和んだ。

外は既に暗闇、此処から家路に着くのは難しいだろう。

ま、急ぎの用事があるわけでもなし。飛んで辺りを探せば何時しか見つかるであろう。

こうして俺の交友リストに、新たな人物が加わったのであった。

伊吹崩壊

——射命丸文は新聞記者である。

彼女は妖怪の山に住む鴉天狗であり、ブン屋を営んでいる。

千年ほど前から幻想郷に住んでおり、その実力は幻想郷でも”最高クラス”と称されている。

生真面目で融通がきかない性格。

幻想郷に住む天狗の例に漏れず、強い者の前では礼儀正しく、弱いとみなした者には強気に出る。

だが彼女の場合、取材相手に対しては常に礼儀正しく出るそうだ。

頭脳明晰、非好戦的。思考能力は非常に高く、人間の何倍ものスピードで考えを巡らせる。

そんな彼女が現在、俺の目の前にいる。

経緯を辿るとなれば、ほんの少しだけ時間を戻す事になる。

アリス・マーガトロイドとの邂逅から数日後の話だ。

何時ものように、何時も通りの日課をこなしていた時の事。

広大な幻想郷の草原を歩いていた俺の目の前に、空気を裂くかのような速度で飛来してきた人物がいた。

それが目の前にいる鴉天狗、射命丸文であった。

彼女は俺の目の前に現れるや否や、面接試験前日に回答文を暗記していた受験生のように

一言一句間違いのない自己紹介を始めた。

本当に唐突な出会いであった為に、俺はその紹介文をあまり聞いていなかった。

「――で、”九頭龍”さん。貴重なお時間を頂いても宜しいですか？」

「おう、何でも聞いてみる」

”死神なんてネタの宝庫じゃあないですか！”と意気揚々の射命丸文。

俺の名前を誇張し、改めて確認するかのように訊ねてきた。

俺はそれに了解をし、射命丸文の質問に真っ向から立ち向かう。

「それでは…コホン、幻想郷に来てからどれぐらいの月日が経ちましたか？」

「一年も居ねーな。まだ数ヶ月ってトコじゃねーかな」

手帳のような物に、俺の答えをサラサラと書いてゆく射命丸文。掴みはオッケー、とばかりに次の質問へと移行してゆく。

「では次に。九頭龍さんは、本当に死神何ですか？」

「ああ。死にたくなったら何時でも言いに来な」

「丁重にお断りしますね」

渴いた苦笑を浮べつつも否定する射命丸文。

何の根拠もないんだが、本人がそう口にすりゃあ彼女としては何で

も良いのかね。

「風見幽香とはドコまで進展しましたか？」

「ドコまでも糞もねーな。俺のほうが強えんだから、あいつは俺の僕ってトコだな。」

「ふむふむ……」

今までよりも筆の速度が早くなっていた。

「それでは次は…幻想郷に来た目的は何ですか？」

先程までの間抜けな質問とは違い、少し現実味のある質問がきた。

「目的ねえ。幻想郷には仕事で来たんだが…。ま、それとは別に気ままに暮らして行こうかと思ってるね」

「ズバリ、そのお仕事とは！」

「ん…一応閻魔様代理、なのかねえ。悪人をぶっ殺す仕事だと俺は思ってるね」

白黒をつける、など俺には意味が理解できなかった。

詰まるところ、悪い人がいたら殺して三途の川へ送り、直接映姫様の下へ送り込んでやればいいんだろう。

熱心に筆を走らせる射命丸文に向かって一言。

「お前も三途の川送りにしてやるつか？」

俺の冗談交じりの質問に、射命丸文が顔を顰めて受け答える。

「はは、またまたご冗談を」

苦笑しつつも愛想笑い。

そろそろ散策を始めよう、と射命丸文に別れを告げる。
すると、もう少し待ってください、と諫められた。

「最後に一つ！九頭龍さんは何故、多くの女性と関係をもたれるのですか！？」

筆先を俺に向け、そう強気に訊ねてきた。

「別に関係を持ってるわけじゃねえよ。偶々出会った奴らが女だった、っただけだ。」

それによオ、幻想郷の能力者は皆女ばっかじゃねーかよ」

「ほほう、能力ですか。因みに九頭龍さんは何をお持ちで？」

俺の口ぶりから、俺自身にも能力が備わっている事を察したのか。

「テメーの身体に直接教えてやっても良いぜ。無茶苦茶気持ち良い

から覚悟しろよ?」

「おお、こわいこわい…。そんな貴方に耳寄りな情報がありますが?」

射命丸文が手帳で口元隠しながらも、そう呟く。

「幻想郷の湖の付近にある、紅魔館という館に行くといいです。あそこなら貴方にも丁度良いふれあいがあると思われそうですよ?」

不敵な笑みを浮べつつも、俺にそう告げる。

紅魔館：名前だけは聞いた事がある。

「紅魔館には幻想郷でも珍しい、吸血鬼が住んでいますからね」

「吸血鬼かぁー、一度拝んでみてーもんだぜ。…でもよ、何も知らねー俺が館に訪れても、

門前払いをくらうのが関の山なんじゃあねえのか?」

「そこら辺のサポートはこの射命丸文にお任せアレ!私が一っ手をうつときますよ!」

射命丸文が興奮したようにそう言い放った。

何故そこまで俺に構うのか、それとも幻想郷の天狗とやらはお節介好きなのか。

…まあ、考えられるのは新聞のネタになる出来事だろうがな。態々一枚噛むのも、そういった魂胆があるからだろう。

「——そうかい、んじゃあ頼むよ。」

「ハイっ！幻想郷のブン屋にお任せ下さい！」

俺は歩きつつ後ろ手を振りながら射命丸文と別れた。

振り向くまでも無く、射命丸文はすぐに飛び去っていったようだ。
紅魔館か、一度行ってみる価値はありそうだな。

こりゃあ一波乱起こりそうだな。

>SIDE・伊吹萃香<

伊吹萃香は混迷していた。

普段は彼の家に寝泊りするのが当たり前になっていた。

そんな日がずっと続けば良いな、と心のどこかで思っていたのかも
しれない。

そんな時に、彼の家に幻想郷でも凶悪レベルの妖怪、風見幽香がや
ってきた。

そいつは彼の家を、まるで自分の家かのように扱いだしたのだ。

当時、私は怒りを顕にしたが、肝心の家の主が特に気に止めなかつ
たのでその場は収まった。

その時からだ。萃香の心の奥底で、何とも言い難い感情が渦を巻き
だしたのは。

彼が家に戻る音が聞こえてくる。

それに呼応するかのように、萃香は言葉を口にした。

「おかえりい、九頭」

「おう」

寡黙な亭主を想像させるような返事が返ってきた。

毎日聞くような声色だが、その声を聞くだけでどこか心が安堵する
かのような感情が湧き出す。

初めて彼と出会ったときは、何とも口にし難い雰囲気を感じられた。
口調も何だか安定しておらず、良い奴なのか、悪い奴なのかの区別
も付け難かった。

今では成り行き、といっても萃香の一方的な行動にて寝食を共にし
ている。

毎日のように顔を合わせれば、彼の性格、人格も分かってくるもの
であった。

普段の彼は比較的寡黙だ。

彼から言葉を口にする事はそう多くない。

だが、此方から言葉をかければ口を聞いてくれる。

無論彼が何か思うところがあれば、あちらから話しかけてくる事も
あった。

今日も同じような流れで一日が終わりを迎えようとしている。

同じ空間に存在するというのに、まるで自分など存在しないかのよ
うな振る舞い。

そんな彼を見ているうちに、何とも言えぬ感情が湧き出る。

「ねえねえ」

萃香がソファールと呼ばれる椅子に寝そべりながらも、彼に話しかけた。

対する彼は、顔を相手に向けずに口だけで対応する。

「何だ」

萃香に興味すら示さない。

萃香自身の一方的な思い過ぎかもしれないが、それでも彼女中では解消先の見つからない感情が湧き続ける。

何でも良い。

”彼と何かがしたい”。

そんな思考が沸いて出てくる。

酒盛りでも良い、くだらない遊びでも良い。他愛の無い話でも構わない。

「晩酌でも、やらないか？」

酒好きの萃香は、サラリ、と何の蟠りも存在しないかのようにそう言っただけだ。

彼女の中ではある確信があった。

時間带的にも、彼が家に丁度帰ってきて直ぐの事だ。

萃香の中では、彼が絶対に了解を得てくると、根拠の無い自信があった。

「・・・」

世話しく手を動かし、何か作業をしていた彼。
萃香の質問が彼の耳を通過した途端に、世話しく動いていた手が止まり、沈黙が始まる。

その瞬間に萃香の鼓動が一つ高く跳ね、嫌な予感に気持ちの悪い汗が全身から噴出した。

「・・・悪いな、もう食べてきたから。」

「…そっか」

彼が若干、申し訳なさそうにそう答えた。

萃香の心の中は酷く混乱していた。

最後に晩酌を供にしたのは、ほんの数日前だ。

たった数日空いただけ、晩酌を断られたという事実には萃香の胸にモヤモヤした感情が宿った。

”何所で食べてきたの？”と、萃香は彼に質問しようとしたが、止めた。

無用な詮索は彼も好ましく思わないだろう、と彼女は自身を諫めていたのだ。

ただし、その代償として萃香は彼とある約束を取り付けようとした。

「じゃあさ、明日だ。明日一緒に――」

萃香が元気良く、それでいて何の戸惑いも見せずに彼にそう言い放った。

否、言い放とうとした瞬間に、言い終える前に彼が答えを返してき

た。

「悪いね、明日も他所に行くから無理だ」

萃香は思わず歯噛みをした。

唇を噛み締め、もう少し顎に力を入れてしまえば、唇が千切れてしまふんではないかと思うほどに。

何故——何故？

萃香は一人自問自答した。

何かが悪かったのか、どうして急に付き合いが悪くなったのか？

考えてるうちに答えに近いものが出てきた。

——風見、幽香か。

今思えば、あの女が彼の前に姿を現してから、萃香の中で何かが狂い始めた。

あの日を境に、彼は家を離れる事が多くなった。

特に最近では、何所か他の場所で食事を取っているようだ。

風見幽香が彼と対話しているのを見て、彼女は人知れず優越感に浸っていた。

彼は風見幽香には強く当たる。

傍から見て彼に嫌われてるんだろうな、と思った。

その反面、私自身に対しては比較的優しく接してくれていた。

だが、彼が家を後にし、あの女の家に行っているんだろうな、と思うだけで酷く殺意が湧いてきた。

自分ではそれを、只の嫌悪感に似た何か、殺意めかすものではないと思っていた。

「んじゃ、今日はもう寝るわ」

萃香が一人で思考を巡らせていると、彼が立ち上がり、早々に寝室へと移動してしまった。

萃香は小さく何かを呟くだけで、彼を引き止めるには至らなかった。そうして彼女の中で、ある感情が彼女の思考を支配した。

——全部あの女が悪いんだ。彼を籠絡でもしたのか、許せない。

度々家を後にし、恐らくあの女の家にも行っているのか？

許せない・・・彼に纏わり付く奴らが全て許せない。

殺してやる…全員、殺してやる。

…いや、冷静になれ。相手は大妖怪だ。迂闊に動けば逆に始末されてしまう。

低級妖怪ならば、私の力でバラバラに引き裂けるだろうに。どうすれば…どうすれば良い？

——そうだ、その手があった。

逆に彼を籠絡してしまえば…、籠絡までは行かずに、私の物であるという証を刻み込めば良いんだ。

そうだ、そうしよう。今すぐやろう。彼はもう寝た頃だろうか？

死神だろうが何だろうが、鬼の力に抗える者は存在しない。

四肢を押さえつけてやれば良いんだ、抵抗しても絶対に逃れられない。

彼は——九頭龍は私”だけ”の物だ。

そう、一瞬思い込むだけで萃香の心は安らかになった。

喜々とした、恍惚とした表情で幻想を抱く萃香。

そうだ、それが良いんだ。今すぐやろう、待っててね。と呟きながら彼女の足は寝室へと向かう。

ガラリ、と木製の引き戸が小さな鬼の手により開かれた。
萃香が寝室の目標物に目を付けると、ニヤリと艶やかな笑みを浮かべた。

「許せない…でも、お前が私の物になれば全て解決するんだ。」

ゆっくりと、しかし確実に。

着々と彼の眠る布団に近づいてゆく。

少しすると、あっという間に彼の眼前に。

静かに、しかし確実に。ゆっくりと彼の上に跨った。

「大丈夫、大丈夫だよ。痛いのは一瞬だ。すぐに、すぐに」私だけの物にしてあげる。」

狂ったような、艶やかな笑みを浮かべつつ独り言を呟く。

彼の四肢を自らの四肢で拘束する。

鬼の力で捻じ伏せてしまわぬよう最善の注意を払いつつも、彼の腕を掴む。

身を清めるのを忘れたな、と一人ゴチだが、今更どうしようとも思わない。

——さあ、覚悟は…するまでもないよね。

散々私に苦しみを味合わせてくれたんだ、覚悟を決める暇なんて与えない。

見慣れぬ彼の上着に実際手を触れた。

どうやれば彼の着物の封印が解けるのだろうか、自分の衣服と違う

ので解からない。

彼女が試行錯誤してる合間に、彼の量の腕が一瞬、ほんの一瞬だけ動いた。

「え——きゃっ!？」

小さな悲鳴を上げる萃香。

異変が起きたのはそれだけではない。

彼に馬乗りになっていたはずなのに、何故か返されていた。つまり、逆に馬乗りの状態にされていた。

状況が理解できなかった。

何が起こったのか、どうしてこうなったのか。

抗おうにも抗えなかった。

…否、抗おうという気が起きなかった。

恐らく驚愕の表情に染まっている私を真上から見据える、愛しの顔。この状態が永遠に続けば良いのに…と、自分でも理解に苦しむ事が脳裏に浮かぶと、愛しの人物の口が開かれた。

「——むちゃくちゃ痛てーから覚悟しろ」

初めて向けられた狂気の視線に、私は狂喜したのか。

此处からの私の記憶が無くなってしまった——

湖に潜む蒼い彗星

――文々。新聞

妖怪の山に住む鴉天狗、射命丸文が書いている新聞である。

発行は多くて5回ほど、それよりも号外のほうが部数が多いそうだ。天狗の新聞は個人で取材から起稿を行う為、記事の内容が特定のジャンルに偏ってしまう。

射命丸文の書く新聞は、主に幻想郷の能力者達が起こす事件などを記事としている。

だが、普段は平和な幻想郷で大きな事件など怒るはずもなく。内容も平和な事件ばかりだ。

文々。新聞は、購読していない人たちにも配られる事がある。

定期的に発行している物は配られることは少ないが、号外などの記事は射命丸文の知り合いにも配られているそうだ。

そして現在も、そういった経緯で文々。新聞が配布されている。

「こんにちはー！文々。新聞の配達参りましたっ！」

射命丸文が元気良く空中から降り立った。

どうやら自ら書いた新聞の配達を行っているようだ。

「…ぐう」

紅色の髪に、緑色のベレー帽を被った女性は寝言で答えた。

射命丸文の大きな声でも目覚めなかったのか。石造りの壁を背凭れに眠ったままだ。

「美鈴さん！文々。新聞です！」

「……ッ！！ 敵襲！？」

射命丸文が大きな声で、中国風の女性の耳元で怒鳴った。すると中国風の女性は目を覚まし、一瞬で飛び退いて辺りを窺った。そして目の前の新聞記者を視界に入れるや否や、慌てふためく。

「こ、これは射命丸さん！寝てませんよ？私は決して眠って何かいませんでしたよ！」

「はあ…それはどうでも良いのですが。コレ、文々。新聞の号外です！」

「あ、どうも…」

射命丸文が美鈴と呼ぶ女性に新聞紙を手渡した。美鈴は若干萎縮しつつも、それを受け取った。

「では、私はこれにて！レミリアさんにもちゃんと渡してくださいねー！」

しゅわっち！、と興奮気味の射命丸文が飛び立っていった。中国風の妖怪である美鈴は、それを呆然と見届けるしか術がなかっ

た。

「号外、ですか。まずはお嬢様にお見せしたほうが良いんだろうなあ」

トボトボと門から紅魔館に入る美鈴。

彼女こそ紅魔館の門番妖怪、紅美鈴その人であった。

「お嬢様、射命丸文からお届け物です。」

銀髪のメイド服を身に付けた女性がそう口にする。

彼女の名前は、十六夜・咲夜。

先程美鈴から受け取った文々。新聞を門番に代わり、メイド長である彼女が代わりに主へと送る。

「射命丸から？…見せてみなさいな」

「どうやら彼女の発行している新聞の号外のようなのですが…」

咲夜の助言に”へえ”とつまらなそうに呟いた、お嬢様と呼ばれた少女。

彼女の名前は、レミリア・スカーレット。

この紅魔館の主人である吸血鬼だ。

「ふむ…、くだらない記事ばかりだと思ってたけれど。案外面白い事書いてあるのね」

新聞にはこう書いてある。

題名と思える、太い真っ黒な文字で堂々と書かれている。

——幻想郷に降り立ちし魂の管理者、次なる目標は紅魔館か？

幻想郷には暇潰しに訪れた模様。

彼が仕事と証する事柄については、詳しくは触れる事ができなかった。

本人曰く悪を狩り、正義を守る、だそうだ。

能力についても詳しい事は不明だが、口ぶりから当人ご自慢の能力を持っているようにも見える。

そんな死神こと、九頭龍は次の目標を”紅魔館”だと口にした。

フラワーマスター、風見幽香を下し、小さな百鬼夜行、伊吹萃香を従え、彼は紅魔館に嵐を呼ぶ——

パタリ、とレミリアが新聞をたたんだ。

洒落たテーブルに文々。新聞を置くと、クツクツと笑い出した。

「クク…相変わらずの情報ね。ねえ咲夜、貴方はこの記事をどう思う？」

溢れ出るカリスマを抑えつつも、自らの従者である十六夜咲夜に訊ねる。

対する咲夜は、困ったような表情を浮べて答えた。

「その、私はまだ記事に目を通しておりませんので…」

「うつ…。そ、そうね。咲夜も読んでみなさいな」

一瞬館の当主から何かが崩れ去ったが、咲夜はそれに気にせず”拝見します”とレミリアから新聞を受け取った。

少しして新聞を読み終わった咲夜が再度レミリアの質問に答える。

「そうですね、興味深い話ではありますが…何とも信じ難いですね」

「ほう、どうしてそう思ったの？」

レミリアの問いかけに咲夜が新聞の記事を指差して答える。

「ココの”次の目標を紅魔館だと口にした”という部分があるじゃないですか。

何で我々の住処をこの死神は知ってるんでしょうかね。」

「風の噂で知ったんじゃない？」

「そうかもしれないですね。でも何故、死神が態々紅魔館を狙うのかが理解できないですね。

射命丸文の書く新聞には捏造が多いと聞きますし、俄かには信じ難いです。」

「そーねえ。別に気に止める事もないわよね。…でも、もしもコレ

が本当だったら面白そうよね？」

レミリアが新聞紙を丸めて捨てる。

咲夜はその質問を疑問に思い、何故ですか？と返した。

「私もこの死神に興味があつた事だし、あちらから訊ねてくるのなら好都合だと思わない？」

「はあ、そうですね。しかし、美鈴が食い止めるかもしれませんよ？」

「あの娘に止められる程度なら、その程度だつて事よ。
…でもそうね、一応あの娘も下げておきますか」

「そうしたら門番には誰が…」

「適当に妖精メイドでも着けておけば良いわよ。魔理沙だろうと何だろうと、美鈴じゃどうせ抑えられないし。」

妖精メイドも美鈴も大差ないわよ、と咲夜に言いのける。
咲夜は主の遊びに溜息をつきつつも、早々に行動に出た。
一瞬にしてその場から消えたのをレミリアは見届けた。

「ふふ…貴女がいれば私の出番はないかもね」

時を止めてでも死神の侵入を拒むだろうしね、とレミリアは一人呟いた。

「美鈴、話があるのだけれど」

「あ、咲夜さん！」

運良く起きていた美鈴は、咲夜のナイフを喰らわずに済んだ。その事を静かに一人安堵する美鈴。話とは何だろうか、と美鈴は咲夜の言葉を待つ。

「門番の事だけど、…貴女には暫く外れてもらいたいの」

その言葉を聞いた瞬間、美鈴に電撃が走った。

何故？どうして？

何か仕事をミスってしまったのか。

「そ、そんな！？私の代わりが、紅魔館を守る奴がいるっていうんですか！」

美鈴が躍起になって咲夜に問いかける。

普段は弱気な美鈴だが、今回は咲夜に対しても強気だ。対する咲夜は冷静に、それでいてクールに答えた。

「貴女の代わりは——妖精メイドよ」

「な、なん…ですって…？」

美鈴が立ち尽くしたまま気絶した。

自分の代わりがまさか、妖精メイドとは夢にも思っていなかったのだろう。

咲夜は立ったまま気絶した美鈴に溜息を吐き、その辺にいた妖精メイドに後始末を命じた。

紅魔館に一波乱起こりそうな予感であったとさ。

「ぐぬぬ・・・！」

「どうしたの、チルノちゃん？」

湖の近くで何やら妖精たちが会話していた。

水色の髪色をした、お転婆氷精こと、チルノ。

それに声をかけているのは、緑色の髪色をした妖精こと……大妖精。チルノは”大ちゃん”と愛称をつけて呼んでいるそうなので、天の声である私もそう呼ぶことにする。

「どーしたもこーしたもないわよ！」

「きゃっ！……って、新聞？」

チルノが大ちゃんに新聞紙を叩きつける。

驚いた大ちゃんは、一瞬叫んだがそれも刹那。

チルノが投げつけた新聞を広げて記事に目を通す。

「ふんふん・・・って、この人がどうかしたの？」

「この死神って奴があたいの友達を泣かせたのよ！」

「友達って…ああ、太陽の畑近くに住んでるあの娘たちね」

「そうよ！あたいが居れば、あんな死神やろー！返り討ちにしてやっ
たってのに…」

悔しいっいたらありやしないわ！と地団太を踏むチルノ。

何をそんなに悔しがっているのか、大ちゃんには理解ができなかつた。

チルノは妖精の中でも飛びぬけて強いので、他の地域の妖精にも顔が利く。

しかし大ちゃんはそうではないので、他の地域の妖精がどうなろうと知ったこっちゃ無い。

…と言ってしまえば非道な性格に見えてしまっが、単に大ちゃんがその妖精たちを知らないからだ。

「とにかく！紅魔館にこいつが来るってのなら、さいきょーのあた
いが天罰をくれてやるのよ！」

「そ、そうなんだ」

大ちゃんが乾いた笑みを浮かべながらそう言った。
チルノの無茶な計らいがまた始まるうとしていたのだ。

「おい霊夢、何だか面白そうな記事が書いてあるぞ」

「何よ…って。ああ、そんなのもう読んだわよ」

白黒魔法使いこと、霧雨魔理沙が博霊の巫女にそう伝える。
対する博霊の巫女こと、博霊霊夢。

面倒臭そうに魔理沙に対してそう答えた。

「何だよ、そのつまらなそうな反応は。霊夢は興味ないのか？」

「興味も糞も、そんなの文が捏造した記事に決まってるじゃない。
…それに、もしそれが事実だとしても、あの吸血鬼が黙ってるとは思えないわ。」

「だから面白いんだろ？弾幕ごっこが私を呼んでるぜ！」

魔理沙の発言に霊夢が溜息をついた。

目の前の白黒魔法使い、霧雨魔理沙もある種の戦闘狂なのかもしれ

ない。

射命丸の発行した文々。新聞が、各地で例の死神の存在を知らしめている事を、本人は知らない――

幻術の程、知られざる能力（前書き）

あ、ちなみにタイトルに深い意味はないです。

幻術の程、知られざる能力

——いつもとは違う朝を迎えた。

何が違うのか、と聞かれれば具体的には答えられない。だがしかし、自分の中では確実に違う朝であった。

昨夜の出来事。

あの時から、今までの自分が変わったような気がした。

萃香さん…否、萃香が俺の四肢を無理な力で押さえつけてきた。両足は然程痛みは残っていないが、掴まれた両の腕は今でも痛みが残り、青痣が残っている。

あの時の萃香の異常なまでの視線を感じた俺は、恐怖を通り越した何かを感じた。

それから、その日から俺の中で何かが変わった気がする。

「——おはよう、九頭！」

俺の上で萃香が挨拶をする。

どうやら今し方目覚めたばかりのようだ。

「ん、ああ。おはよ」

昨夜の事、萃香は俺を襲ってきた。

何か反感を買うような真似をしてしまったのか、四肢を千切れんばかりに潰しにかかれた。

いくら不死の身体を持つ俺でも、四肢を引き裂かれてしまえばどうしようもない。

意識は保てるだろうが、その後如何する事もできなくなるだろう。胴体を切断されても生きてるだろうが、栄養を摂らねば何れ朽ちる身体と俺は思っている。

萃香が狂気の視線で此方を睨みつけていた。

少なくとも、意識がぼやけていた俺にはそう見えた。

鬼の力に掴まれてしまえば、流石の俺でも如何する事もできなかった。

痛覚を操ろうにも、萃香の体液は得ていないので不可能だ。

ぼやけた思考回路では為す術が思いつかず、只萃香を見据える事しかできなかった。

しかし、危機的状況に陥ったその時に、俺の中で何かが起こった。

眼球が飛び出してしまうのではないか、というほどに目を見開いた。痛みによるものか、憎悪によるものか、混乱していた俺には判らなかった。

ただ判ったのは、俺の上で四肢を押さえつけていた萃香が意識を無くした事だった。

視覚を操ったのか、或いは幻覚を見せたのか。

どちらも俺には判らない。今まで”痛覚”ばかり操っていたから。

視覚や味覚、聴覚や触覚を操れるだろう、というのはあくまで推測で、実際にできるかどうかは不明。

そして何が発動条件なのかすら俺には判らない。

能力なのかは判らなかったが、俺が萃香を睨みつけると、彼女は忽ちに意識を無くした。

そのお蔭もあってか、俺は”命は助かったな”といった感情に浸った。

そして今朝、彼女は何事もなかったかのように目を覚ました。

昨夜の感情が残っているのならば、きっと悪意に染まった殺意の衝

動に包まれているはずだ。

それが彼女からは感じられなく、むしろ機嫌が良いという事は、昨夜の記憶はないのか。

そう思っていた俺の疑惑は、萃香の一言で更に困惑する事になった。

「九頭は、思ったよりも激しいんだね」

満面の笑みでそう俺に言い放ったのだ。

確かに俺は激しく抵抗を試みたが、鬼の力の前では圧倒されるばかりだ。

それを俺に伝えるという事は、やはり昨夜の事は覚えているのか？
だったら何故俺を殺しにかからないのか？

まさか都合よく、俺に対する殺意の衝動だけ忘れてるわけはあるまい。

「ん…ああ、そうか。そうなのかもな」

下手に尋問して萃香を刺激するのは良くない、そう思った俺はこの場は何も聞かずに肯定した。

萃香は俺の答えに笑みで返し、可愛らしく笑っただけだ。

今後、迂闊に行動するのは危ういかもしれないな。

今日も散策、というわけじゃあない。

今日は今日でやる事があるのだ。

前に射命丸文という天狗から聞いた、紅魔館という館に行ってみる事にする。

どうやら湖の方面に紅魔館はあるそうだ。

家には居辛い、別段予定もあるわけではないので、紅魔館を訪れてみることにした。

「——どこ行くの？」

一々断りを入れて毎日出かけていたわけじゃあない。
むしろ黙って出かける事が多かった。

今日もいつもと同じように、黙って出かけようとしたら萃香さんから声がかかってきた。

声色が普段の色とは違い、高低もどちらかといえば”低”。

「ああ、”ちよつとな”…」

俺が言葉を濁しつつも、適当にそう答えると、萃香は嫌悪感を顕にした。

そして無理矢理こじつけるかのように、約束を取り付けた。

「今日こそは絶対に晩酌ね、絶対だよ？」

「はいよ、今日は知り合いのところに行くわけじゃねーからよ」

俺がそう答えると、萃香は更に声色を変えて言い放った。

「嘘は嫌いだよ?…いつてらっしゃい」

普段はそんな事は言わないのに、今日に限って”いつてらっしゃい”等とのたまう。

彼女に何か思うところがあるのだろうか、俺は喜びよりもまず謎、そして恐怖を感じた。

良くわからないが、言葉にはできない恐怖が彼女から感じられた。今日こそは絶対に戻ろう、と心に誓った――。

自宅を後にし、魔法の森へ向かう。

此処を抜けた先に湖及び、紅魔館が存在するようだ。

――紅魔館

紅魔館は全体的に紅い色調をしていて、館の前の道も一面の紅になっている。

時計台も設置されており、夜中の十二時になると鐘がなる。

その紅魔館の地下には、大図書館が存在する。

大図書館は、ある魔法使いが書斎として使用している。風通しが悪く、日の当たりも悪い。その為、かび臭い。大量の魔導書や、その魔法使い直筆の本も置いてある。そんな所に、九頭龍は向かおうとしているのだ。

「ん、雑魚敵か」

森を進むに連れて、低級の妖怪などが襲い掛かってくる。言語どころか、理性を持つてるかすら怪しい妖怪だった。

邪魔なので、胴体を引き裂き、頸を切断したりして処分してゆく。

そんな道中、当然の如く妖精と呼ばれる敵も襲い掛かってくる。

「あーっ！コイツは！？」

何匹かの妖精が俺の目の前に姿を現し、指差ししてくる。

その行為自体に嫌悪感を抱きつつも、妖精の最期の言葉を聞く事にした。

「・・・だれだっけ？」

「こいつあれだよ！他所の地域に住んでる妖精をいじめたやつ！」

俺を指差すや否や、俺の事を覚えていなかった。

周りの妖精がそれにツツコミを入れつつ、捕捉する。

只でさえ道のりが長いというのに、こんなところで時間を食っている場合ではない。

そう思った俺は、巻物から大鎌を口寄せ、そしてそれを妖精に向けて投げつける。

「へっへーん！そんなノロマな攻撃あたらないよーだ！」

大鎌をぶん投げ、柄に取り付けた紐で手放さないようにする。狙いの妖精に向けて寸分の狂いもなく飛んでいったが、間一髪避けられた。

「鈍間なのはどっちだ？尤も、テメーはもう歩くことはできねーだろうがな」

俺の大鎌はただ投げるだけではない。

霊力を込めたそれは、自在に操ることができる。

直線に飛び、戻る時に霊力を込めて妖精の胴体がある空間を通るように操る。

ノロマだ、と俺を嘲笑った妖精の下半身が、胴体と別れを告げた。その衝撃で妖精は地上に落ちたが、口が煩いのは変わらなかった。

「いたたた…、よくもやっただわねー！」

「うわぁ、まだ足動いてるよ・・・？」

周りにいた妖精たちは比較的常識人なのか、地上に落ちた妖精を放って逃げ出した。

「私達じゃあ無理だよ、チルノちゃん呼ぼうよ！」

「それがいいわね、いこー！」

美しい円弧を描きながら旋回し、森の奥へと消えた。
執拗に追撃する気はなかったので、その場は放っておいた。
地に落ちた妖精が何やら喚いていたが、放置して先に進む。

湖に近づくに連れて寒気が増してゆく。

今は特に暑い季節というわけでもないのに、特に気にはしない。
俺と出くわした妖精たちが一目散に逃げ出しているのがわかる。
先程一匹だけ狩ったのが、効果があったようだ。

無心で湖を目的地に足を進める。

いや、本当の目的地は紅魔館なのだが、湖は目印に過ぎない。

「いたー！！！」

「…あ？」

無心で歩いていると、目の前に水色の髪の毛の妖精が姿を現した。
目の前に妖精が現れると同時に、周りの気温が下がった。

「よくもあたいの友達を苛めたわね！」

「なんだコイツ…。いつもは群れてる妖精どもが、今回は一人って

のも珍しいな。」

「あたいはチルノよ。友達を苛めた罪は重いよ！」

チルノと名乗った妖精は、問答無用と言わんばかりに攻撃を仕掛けてきた。

氷柱をマシンガンのように飛ばしてくる様を見るに、どうやら氷を操る事ができる能力持ちか。

「つとと、危ねーな。テメーも俺の邪魔をする気か？」

「邪魔するだけじゃ目的じゃないんだから！」

俺の質問に自信満々に答えるチルノ。

そして自分の、俺を倒しにかかる理由を答えた。

「風見幽香を倒して新聞の一面に載った死神を倒したあたいがサイキョーって事を知らしめてやるのよ！」

「なんだそれ？意味がわからねーぞ」

チルノの最強の定義が若干ズレていた。

つまるところ、最後に倒した奴が最強って事だろう。

「ふん、サイキョーにしか判らないのよ。今なら、誰にも負ける気がしないわ！」

チルノが言葉を言い終えてから、何やら懷から取り出す。
それを掲げ、言葉を紡ぐ。

「氷符『アイシクルマシンガン』」

チルノの両の手の平から再度、氷柱が発射される。
先程の非ではない、尋常じゃない量の氷柱が発射される。

「ちよつと！当たりなさいよ！」

綺麗に、真つ直ぐに発射される氷柱マシンガンを避ける。
瞬身の術：簡単に言えば高速移動でそれらを避ける。

チルノの攻撃が止むのを確認し、懷から鉄刃を投擲する。
簡易的に作った、当たれば皮膚が切れる程度の物だ。

「今度のは避けられないよ！——凍符『パーフェクトフリーズ』」

今度は両の腕を掲げ、それを支えにチルノの真上に氷の塊が形成される。

一定以上大きくなった途端、それは破裂し、辺りに氷の飛礫が飛来する。

「避けるまでもねエ！」

大鎌を振るい、飛礫を弾き飛ばす。

冷気やなどの物理的に干渉できないものならばいざ知らず、氷柱や飛礫ならば物理的に相殺してしまえば問題ない。

飛来する氷の飛礫を砕いていると、チルノが追撃してくる。

「この状態なら避けられないわよね！」

”アイシクルシュート”と呟き、先程の氷柱よりも幾分大きめの氷柱を飛ばしてくる。

マシンガンほどではない、3本弱俺に向けて飛来する。

「——なら避けねエよ」

胴体に氷柱が突き刺さる不快感に包まれる。

痛みが全身を駆け巡るが、不死の特性か、それも一瞬だ。

氷柱が胴体に突き刺さるのを気に止めず、チルノに向け突貫する。

「ゲッ——ぬぐもッ!？」

空中から氷柱を飛ばしてくるチルノを叩き落す。

完全に油断していたのか、ツメが甘いなと思いつつもチルノに追撃。地面に激突してぶっ倒れたチルノに向け、大鎌を振るう。

倒れ伏したままのチルノの頸を狩るのは容易だ——そう思い、狙いをつける。

そのままチルノの頸を狙い、落下しつつも攻撃を仕掛けた。

チルノに鎌が衝突、はしない。

どうやら直前で氷によって防がれてしまったようだ。

分厚い氷が俺とチルノの間に形成され、攻撃が届かない状態だ。

「ふ、ふふん！中々やるわね。今日のところは見逃してやるわよ！」

腕を組み、鼻を高々としながらそう言い放つチルノ。

今ので実力の差が判ったのか、でもまだまだ戦いは始まったばかりなのだが。

しかし、俺の中ではまだまだ道中。

ここはチルノを見逃すことにした。

「不死だなんて聞いてないわよ、これじゃあサイキョーもかたなしってやつね！」

何やら呟きながらチルノが飛び去って言った。

妖精という奴ら、どうもこいつも騒がしい奴らだ。

どうやらチルノが冷氣の原因だったようで、みるみるうちに気温が上昇していった。

それと同じくして、眼前に紅色の風景が眼に飛び込んでくる。

どうやらチルノと交戦した地域と、紅魔館は存外に近い場所であったようだ。

それならば、もう少しだけ戦闘を楽しんでも良かったのかもしれない。

そう思いつつ、俺は紅魔館がこの先にあるだろう、と思いつつ紅い風景に身を飛び込ませた。

何も知らない死神が紅魔館に遊びにきたようです。

眼前に広がるのは、全てが紅で象られた洋風の館、紅魔館。

此処に近づくに連れ、周りの風景にも紅色が多く取り込まれていた。そして目的地に着くと、道中よりも更に紅い紅い幻想的な館が一つ。

「別に戦いに来たってわけじゃあねーからな。警戒する事もねえか」

門番にはメイド服を着た妖精たちが待ち構えていた。

よくよく考えてみれば、紅魔館に戦いに来たわけではなく、あくまで見学だ。

向こうから仕掛けてくるならいざ知らず、此方から攻撃する事もないだろう。

門番らしき妖精どもの声が届く位置まで足を運んだ。

すると十人十色、個々で体格や髪の色、髪型や肌の色まで違つ色々な種類の妖精が口を開いた。

一匹だけではなく、それはもう全員が同時に、だ。

「やーい！お前んちお化け屋敷ー！」

「へんてこりんな髪の毛ー！」

「ズレた服飾センスー！」

「女つたらしのしなびたキノコやろー！」

両の手を口に当て、大きな声で俺に向け罵声を浴びせてきた。
俺の家の事柄から、服装の事まで、さしては訳のわからない罵声まで聞こえてくる。
短気ではないが、気が長いというわけでもない俺は、妖精の挑発に乗る。

「テメーコラ！妖精どもがあー！」

「きたー！」

「逃げろー！」

「襲われるぞー！」

俺が怒気含めて怒鳴ると、妖精たちが面白そうに逃げ出してゆく。
まるで近所の子供達を相手にする、頑固な雷親父のように妖精を追いかける。

妖精達の逃げる場所というの勿論、紅魔館の奥だ。

ご丁寧に扉には施錠は施されておらず、俺も易々と中に入ることができた。

「パツ：咲夜様ー、誘い込んで：ギャー！」

自分の上司である十六夜咲夜に報告を上げた妖精にナイフの賛辞が飛んできた。

報告する妖精が気絶してしまったので、代わりの妖精が報告を始める。

「咲夜さま、よていどーりです！」

「そう、じゃあ始めるわよ。美鈴、パチュリー様に合図をお願いね」

「了解です！」

門番をしていた妖精たちは役目を果たしたとばかりに、何処かへ飛んでいった。

咲夜は部屋の中央に堂々と立ち尽くす。

美鈴は、「パチュリー様」という人物に手を振って合図を送る。

「——と、もう始まるのね。：全く、レミィの遊びに付き合われる破目になるとはね」

本を開き、目的のページを探すように紙を一枚一枚捲る。

彼女の名前はパチュリー・ノーレッジ。魔法使いだ。

今度の紅魔館でのお遊びに付き合わされる被害者の一人。

「それにしても、お嬢様は何を考えてるんですかねー」

美鈴が咲夜に訊ねる。

対する咲夜も、美鈴を満足させるような答えを持ち合わせてはいなかった。

「さあね。今回も私には判らないわよ。」

「興味があるなら歓迎すれば良いのに、何で態々襲う真似何か……」

「文句ばかり言わないで、私達は言われたとおりに行動すれば良いのよ。」

「はい」

何ともやる気を削がれるような返事が返ってきたが、咲夜は気に止めない。

先程と変わらずに依然、部屋の中央に立ちつくす。

美鈴は部屋の入り口に入ってすぐ横の隅に身を隠した。

誰がどう見ても、陽動による待ち伏せ、そこからの強襲を狙っているのが一目瞭然だ。

その為に美鈴は、興味の湧いた人物を態々殺すような真似をするのが理解できないでいた。

咲夜もそれは変わらず、ただ主の命に従っただけとのたまう。

「畜生…迷ったぞ」

紅魔館に突貫し、妖精を追いかけていたはずが何時の間にか迷っていた。

妖精は地理を理解しているのか、アツという間に四散、見失った。廊下の作りも全て紅で作られており、一種の不気味さも窺える。誰かが空間を操作しているじゃないか？と言うほどに内部は複雑で、そして広がった。

「ん…、あそこだけ灯りがあるな」

広い広い廊下の先に、明かりの灯った部屋が見えた。

行き先もわからないので、とりあえずそこに向かうことにした。

そこは明かりの灯った、紅く広い部屋だった。

そして入り口に入るや否や殺気、そして銀の刃による歓迎を受けた。

飛来する銀色のナイフに気が付き、手に持っていた大鎌で弾き飛ばす。

キィーン、と金属同士がぶつかる音が部屋中に木霊し、ナイフは重力に逆らい地に落ちた。

刃が三つ設けられている鎌なので、一振りですべてのナイフを落とす事ができた。

「…！？」

銀のナイフが飛んできた先を見ると、そこには銀髪のメイド服を着た女性がいた。

俺が視線を向けたのにも構わず、再度に渡り2本のナイフを投げ飛ばしてきた。

先程と同じように刃を使い弾き飛ばし、当たり損なったのは柄を使つて叩き落す。

此方も反撃をしなければ、相手の思うままだろう。

そう思い俺は大鎌をぶん投げた。

「——ッ！」

相手からすれば、まるで見当違いの場所に投げた。

だが投げた後に霊力を込め、相手の位置を確実に襲うよう仕向ける。油断していたであろうメイド服の女性：十六夜咲夜は間髪一髪それを避けた。

大鎌には鎖鎌のように紐が括り付けられているので、それを引っ張ることによつてまた手元に戻すことができる。

だが、それを行おうとしたところで敵側に動きがあった。

「！」

真横からベレー帽を被った、紅い髪の女性が奇襲してきた。

気配を隠していたのだろうか、彼には突然現れたように見えただろう。

紅い髪の女性：美鈴は死神に向かい得意の体術で攻める。

暗殺者のように振舞う彼女らは、一言も口にしない。

小手調べだ、と言わんばかりに掌底を放つ。

対する死神も、片手で大鎌の紐を握りつつも逆手でそれを受け止めてみせた。

ガシッ、と力強く握られた美鈴は、予想外の握力に顔を顰める。

死神の両の腕が塞がったのを合図かのように、美鈴とは反対側のほうから声が響く。

声色の低い、だけど少女の声という事はすぐに判る。

「オータムエッジ！」

紅く装飾の施された部屋に入ってから、初めての声。

それが魔術の名を連ねていることは、死神にはわからない。

声の主が指を鳴らすと、両の腕を塞がれた死神の胴体に向かって鉄の刃を殺到する。

四方八方から胴体をズタズタに貫かれた死神。

確実に心の臓も貫いていることだろう、部屋の中央でナイフを放った咲夜は勝利を確信した。

「流石に多対一は無粋だったかしらね、もう終わりか」

咲夜のその一言引き金に、パチュリーと美鈴の二人も若干緊張を解いた。

美鈴は相も変わらず、殺してしまう事はなかっただろうに。と心の中で呟いていた。

だが、それも一瞬の事。

心の臓を貫かれた死神が言葉を口にした。

「ハア…痛って……。何なんだ、テメーら？」

心臓を貫かれて思わず脱力した。

それによって先程掌底を放ってきた女性の手を離してしまう。

紅い髪の女性は卓越した身体能力を有しているのか、綺麗なステップで俺から距離を取った。

「なっ…急所を貫いたのに、何故…」

「この人、もしかして”不死身”って奴じゃないですかね、咲夜さん…」

咲夜さん、と呼ばれた女性が、恐らくそうね。と返した。

「気をつけなさい美鈴、中々の手練みだから」

先程咲夜と呼ばれた女性が銀色のナイフを構えた。

美鈴と呼ばれた女性は、それに習うように拳を構える。

良く見ると、まだ隅っこのほうに誰かいるな。

此方をまじまじと見据える、厭らしい視線。

そして俺を襲おうと構える二人に、言葉をかけ始めた。

「レミイが目を付けるだけあるわね。流石に良い能力を持つてるわ」

「パチユリー様、お気をつけ下さい」

どうやら敵とよべる敵は3人か、パチユリーと呼ばれた女性に、咲夜と呼ばれた女性、そして美鈴と呼ばれた女性。皆女だ。

魔法タイプ、近距離タイプ、遠距離タイプなのか、三者三様だ。

「まさか不死の身体を持つてるとはね、お嬢様も目を付けるわけだわ」

「ご覧の通り不死身だよクソヤローどもが。…で、テメーら何者だ？」

いきなりの殺戮行為に、俺は怒りを露骨に顔にする。

ただ紅魔館に遊びに来たってだけなのに、どうしてこんな目に遭う必要がある？

どう考えても考えても考えても、見る見るうちに頭に血が上ってゆく。

もうどうでも良いから、全部ぶっ殺しちまおうか――

「私の名は、十六夜・咲夜。…私達はお嬢様の命によって、貴方の相手を仰せ仕ったの。」

悪いけれど、少し相手をしてもらえるかしら？」

「私は紅美鈴。本望じゃあないですが、お嬢様の命なので…」

「同じくパチュリーよ。パチュリー・ノーレッジ。よろしくね」

一様に名乗りを上げる3人。

そんなのはどうでも良いから、俺としては今すぐに殺し合いを始めた。

まずは攻撃、の前に身体を貫いている鉄の刃を抜かなければならぬ。

「イテテテ…ああ痛ってえ。グサグサと刺しやがって。…痛テーな
テメーら」

先端が刃になっているので、抜く時に痛みが生じる。

いくら不死身といえど、痛みは残る。

なのでなるべく痛みが続かぬように、サッと鉄の刃を抜き取る。

俺の行為を傍目に、何やら奇妙な物を見る目で見据える3人。

非常に気に食わない視線が俺を襲っている。

「人の痛みを知らねークソヤローどもには、神の裁きが下るぜ…」

神の裁きが下る。

目の前の死神がそんな事を言つてのけた。
心臓を貫いたのにまだ生きているのを見ると、不気味以外の何も感じない。

更には身体に突き刺さっている鉄の刃も抜き取る。

私はメイド長として、お嬢様の従者として目の前の死神と戦闘を試みる事にした。

「美鈴、下がってなさい」

「ですが、咲夜さん一人では…」

「一人じゃないわよ。美鈴とパチュリー様は、私の援護を頼みます」
小手調べは先程試したが、再度銀色のナイフを死神に向けて投擲する。

銀色のナイフは、寸分の狂いもなく死神に向け殺到する。

「甘え、鎌を使うまでもねーぜ！」

懷から短刀のような物を取り出し、銀のナイフを叩き落す。

同時に大鎌を物凄い勢いでぶん投げてくる。

相手をよく観察してみると、大鎌を投げたと同時に跳躍し、バク転などをして小刻みに移動している。

「ふっ…流石に援護があると楽ね…」

どうやらパチュリー様や、美鈴が弾幕の援護を行っているようだ。その為に相手は定点で攻撃を続けることができない。常に移動してなければ、こちら側の遠距離攻撃に潰されてしまうからだろう。

「——ッ!!」

思考を巡らせてるうちに、死神が短刀を投擲してきた。

ナイフと呼ぶには大きすぎるそれは、私の銀のナイフで弾くと、刃が折れて相殺になってしまった。

このナイフはもうダメだ、と思った私は懷から新品未使用の銀のナイフ新たに取り出す。

「咲夜、横から！」

「……ッ!!」

真横から先程死神が投げた大鎌が襲ってきた。

私の銀のナイフでは抑えるのが精一杯、しかもこの鎌は刃が三つも付いてる。

一番短い刃を押さえ、頭と胴体が別れを告げる事は防いだ。しかし、中段の長い刃が、私の頬骨に触れる。

鼻と面一に位置する骨に突き刺さった刃は、凡そ1cm以上は突き刺さっただろうか。

料理で指を切った時とは比べ物にならない量の血液が出てくるが、気に止めない。

死神が大鎌を思い切り引くと、それに釣られて刃も私から離れる。その際に、更に私の頬を引き裂いた。そして微妙に、いや、大胆にニヤリ、と笑みを浮べた死神。何か企んでいるのか、私は警戒した。

「手を抜いて倒せる相手じゃあないわね」

「如何やらそうですね、パチュリー様。」

私がパチュリー様と他愛のない言葉を交わす。

その言葉に特に意味はなかったが、私は自身の能力を開放する事にした。

その際に目の前の死神に視線をあてると、鎌の刃に付着した私の血液を舐めていた。

「気色の悪い…、貴方は私の世界に抗えるかしら？」

自分の血液を不味そうに舐めとる死神に、嫌悪感を顕にする。

私の挑発を含めた言葉にも、目の前の死神は悠然と構えを崩さない。これ以上会話を続けようとも思わない、すぐに決着を着けてやろう。

「出ますねえ、咲夜さんの能力」

「そうね。魔法で時間を操ればね…。私も自分の世界を築けるのに」

美鈴は考えていた。

他愛のないパチュリーとの対話が終わる頃には、決着は着いてるの
だろうと。

時間を止める事のできる咲夜さんが本気を出せば、それこそ相手は
死ぬ事を意識できない。

きっと私自身も、決着が終わる瞬間を意識する事はできないのだろ
う——そう思っていた。

「幻世『ザ・ワールド』」

スperlカードを宣言する。

私がそれを宣言する瞬間も、死神は不敵な笑みを浮べていたのが気
になった。

しかし、如何に策を施そうとも、時間を止めてしまえば全て看破で
きる。

周りの空間の時間が止まり、静寂が私を襲う。

今この瞬間、呼吸をして四肢を動かす事のできるのは私だけ。
一種の寂しさを覚えてしまっただろうが、もうとうの昔に慣れた。

懐からナイフを取り出す。

永遠に時を止める事はできない為に、早々に行動を開始する。

「確実に仕留めなくちゃね」

独り言を呟き、ナイフを投擲する。

敵に向かって放たれたそれは、当たる寸前で能力により静止する。

一つ、二つ、三つと投げられたそれは、相手の動きを止める為に敵の四肢に向けられた。

不敵な笑みを浮べた死神が、時間が動き始めた時にどんな表情するのか、見物だ。

「ダメ押しは無いわよ。私が直接裁きを下して…」

ナイフを器用に掌で回転させ、死神を切り裂こうと握る。

もしも運良く、或いは死神の能力が何かで投擲したナイフが弾かれようとも、

時間を止める最中に直接ダメージを与えれば、確実にダメージを蓄積させられるだろう。

そう思い、私は思い切りナイフを死神に突き刺した。

「残念、能力を拝む前に決着が着きそうね。・・・じゃ、さような

ら——ッ！！？」

「テメ、何時の間に…っと。何だお前、墓穴掘ってるみてーじゃねえか？」

美鈴とパチュリーは意識するまでもなく、咲夜が決着を着けたであろうと思っていた。

だがそれは大いに覆される結果となった。

強敵である死神の足元で、咲夜が膝をついている。

何やら腹部を押さえているようで、予想するに能力を看破されてしまったのか？

兎に角、何かしらの死神の能力で咲夜の完璧とも呼ばれる能力を覆したのだ。

「ククク、ちゃんと自分の墓穴は用意してきたかア？…何だよ、もうくたばっちまったのか？」

「…ぐッ」

明らかに様子がおかしかった。

何の外傷も無い咲夜が地に伏せるはずはない。

美鈴は逸早く、咲夜を救出しようと動く。

「待つて、何か変よ」

「変つて、何がです？早くしないと咲夜さんが！」

「落ち着きなさい。もう少しだけ様子を見てみましょう」

パチュリーの一言で美鈴が落ち着きを取り戻した。

改めて死神のほうに意識を集中させる。

「ドコが痛てえんだ、あ？んなコト聞くまでも無かったな。テメーが一番知ってるだろーからよ」

「・・・能力、か。厄介ね・・・」

「良い顔だ、スゲー良い顔だ。死の淵に迷う、絶望に染まった顔色・・・」

死神が咲夜を見下ろし、君の悪い言葉を紡ぐ。
そして一瞬の間の後に、気が狂ったように叫びだした。

「……………つてえだろオオ！？ゲハハハアア！！急所はこんなもんじゃねーぞオオ！？」

他人が死ぬ時の痛みが俺の中に染み込んでくる…、痛みを通り越して快感に変わるウ！」

突然狂ったように笑い出した死神。

明らかに人知を外れた、イカれた言動だ。

それを目の当たりにし、死神に対し人知れず気味の悪い恐怖を覚えた二人。

「咲夜さんが押さえてる個所…死神に刺さってるナイフと近い場所ですね・・・」

「そう、そのようね。…どうやらあの死神と咲夜の間が繋がって

いる状態なのかも。

つまり、奴の身体に起きるダメージも、咲夜とリンクしてしまうようね。」

パチュリーが己の推測を美鈴に説明する。

納得したように美鈴が頷いたが、パチュリーが最後に説明を補足する。

「ただし、奴は――」

「…不死身、ですね」

理解した、と美鈴が再度に渡り頷く。

こうしたやり取りが二人の間で行われている間も、死神は咲夜に攻撃を仕掛けようと動いている。

「ハッハアアー！！次はドコの痛みを味わいたい？んーーーー！！？」

溢れる興奮を寸分も抑えようとしなない。

本能のままに動くその様は、最早野獣と比喻しても良いだろう。

「それとも、もう終わりにするか？なア！？」

死神がステッキ状の、鋭利な棒を己の急所に突き立てた。

あれは、拙い。そう思ったパチュリーと美鈴は、直ぐに動く。

隣に並ぶパチユリーよりも前に出る。

そして自分の足に妖力を込め、思い切り地面を足で叩く。

「黄震脚ッ！」

美鈴が地面を足で叩き割った。

それが亀裂となり、死神の男の足場を崩した。

「ッ！・・・踏み込みが甘えな。尤も、俺に傷を加えたらどうなるかも判ってるんだろ？」

「ちいつ・・・」

結果としては、ほんの少しだけ時間を稼ぐ事しかできなかった。再び死神は、自らの急所を貫こうと行動を開始した。

「さア！俺と供に最高の痛みを味わおうぜエエッ！！」

「咲夜さんっ！」

今まさに、死神が己の急所に鋭利な刃物を突き立てる。そのままベクトルに従い、刃先が死神の心臓を貫――

「――間に合ったわね」

刃先が心臓を貫く事はなかった。

死神が己の心臓に刃先を突き付け、まさに貫こうとするその瞬間、紅魔館の主が現れた。

遠くから紅い鎖を投げつけ、死神の腕を縛り上げた。

紅い妖力の纏った鎖は、死神の腕を確かに縛っていたが、死神のほうもそれを解こうと抗う。

「ちっ…、また訳判んねえヤローが現れやがったな。こんなもん…ッ！！」

「お嬢様、こいつは…」

「判ってるわよ」

死神の腕を鎖で拘束しつつも、自らの部下に相槌を送った。先程まで何処か気配を殺して観戦していたのだろうか。

「一度状況をリセットしましょッ！」

鎖をしならせ、死神と距離を無理矢理に取る。その際にも、しっかりと腕の拘束は外さない。

「うおっと…四対一かよ、冗談キツイぜ！」

「少しお痛が過ぎたようね、今度は私が相手になるわよ」

「テメー、吸血鬼って奴だな。血の臭いがプンプンするぜ…」

吸血鬼のオーラを醸し出しているのか、死神は目の前の少女をすぐに吸血鬼と悟った。

対する吸血鬼：レミリア・スカーレットは、自分の部下や友人に、私ってそんなに臭う？と体臭を気にした素振りをみせた。

「ちッ…負担が大きいな。しょうがねえ、一度能力を解除するか」

「へえ、余裕ね。解かないほうが私達にプレッシャーを与えられたのではなくて？」

レミリアが死神にそう言うが、実際のところ能力を解いてもらったのならばありがたいと思っていた。

そして死神は負担が大きい、と言っていたが、その表情からは焦りや焦燥は見受けられない。

ニヤリ、と小さく笑みを顕にした死神が武器を手放す。

ガシャン、と鉄が重力に逆らい、地に落ちた音が室内に響き渡った。

「…何のつもり？」

片腕を拘束している以上、もう片方の腕に握っている鎌を離す事は即ち、無手を意味する。

「もっと面白いもんを見せてやるよ。・・・っと」

死神が懷から巻物のような物を取り出した。

手馴れた様子でそれを開くと、死神は片腕を世話しなく動かし始めた。

何か仕掛けがある、そう思ったレミリアが咄嗟に構えた。

「美鈴、今のうちに咲夜を！」

「了解ですっ！」

相手が術技の発動を行っている間に、地に横たわる咲夜を安全なところまで救出させておく。

敵がどのような術を行使してこようと、万全な態勢で応戦するために。

「——口寄せの術」

地に広げた巻物に手を思い切り叩き伏せる。

特殊な力は何も込めていないようで、只渴いた音が辺りに響くのみ。しかし、それと同時に巻物から白煙が湧き起こる。

「——痛…、貴方ねえ。もうこの術は使わないんじゃないの？」

白煙の中から現れたのは、死神が召還したであろう妖怪の女がいた。緑色の髪、暴力を象徴するかのように日傘をかざしている。

「っせえな！分が悪くなったから呼んだだけだよ。…吸血鬼相手は流石にしんどいぜ」

死神のその一言に日傘を持つ、風見幽香が辺りを凝視する。

「ふうん。レミリア・スカーレットにパチュリー・ノーレッジね。
…後はいつもの門番ね」

品定めをするかのように、一人一人確認する幽香。
最後の一言に、若干一名が精神的打撃を受けたのは誰も知らない。

「で、私の相手はどこのだいつ？」

「ん、そうだな…やはり此处は吸血鬼を抑えてもらいてえところだな。俺は残りのゴミどもを掃除するぜ」

レミリアを指差し、そう言い放つ死神。

「気を抜いちゃあダメよ。油断してると死ぬわよ？」

「それを俺に言うかよ…、殺せるもんなら殺してほしいぜ。…ま、無理だろうがな」

レミリアを見据え、幽香がグツと身を構えた。

「前から貴方とは本気で殺り合ってたのよねえ」

「四季のフワーマスター、風見幽香ね。相手に不足はないわ。」
館がつかしら…、と最後に呟いたレミリアが幽香と距離を取る。
紅魔館の主と風見幽香が今まさに、激突しようとしていた。

断頭、死体の行方

「おーおー、激しいねえ」

風見幽香とレミリア・スカーレットが死闘を繰り広げている。それを傍観する死神こと、九頭龍。

「さてと、俺のほうもさっさと片付けちまうか…あ？」

何かを探すかのように辺りを見回す死神。

「さっきのくたばり損ないは何所行きやがったんだ？…ま、二人だろうが三人だろうが関係ねーか」

死神の一言に、美鈴が若干拳を握り強く握り締める。それを隣にいるパチュリーが静かに諫めた。

「大した自信ね。私達を相手にもう勝つ気でいるのかしら？」

パチュリーがおどけた様子で死神にそう言い放つ。

そして隣に居る美鈴とアイコンタクトを取る。

それに気付いた美鈴が、パチュリーに向かって静かに頷いた。

そのようなやり取りがあつた事など露知らず、死神が美鈴達に攻撃を仕掛ける。

「行くぜコラアッ!!」

「美鈴!」

死神が大鎌を振り回し、華麗な跳躍を披露しつつ襲い掛かる。
パチュリーは即座に美鈴の名を呼び、”何か”を美鈴に向け投げる。

「はいっ!」

その”何か”を受け取り、美鈴がパチュリーより先へ突出する。
接近戦の心得は魔法使いであるパチュリーには無。

だが、美鈴ならば接近戦を得意とするので、自らの主の客分である魔法使いを守ろうと行動する。

「地龍波ッ!!」

大地を思い切り拳で殴る美鈴。

地中に気を撃ち込み、大地を裂くような射撃を放つ。

「地を這う射撃か…んなもん飛んじまえば——ッ!」

死神が跳躍し、即座に魔法使いであるパチュリーに視線を向ける。
すると如何であろうか、死神の目には魔法使いが魔術を詠唱している光景が映りこんだであろう。

素直に飛んでしまえば、魔法使いの魔術の餌食になってしまうだろう。

「ちっ…コイツは只の陽動かつ！」

推測どおりならば、このまま行動しないのは拙い。

そう考えた死神が大鎌をパチュリー目掛けて投げつける。

「っ！…やっぱり狙ってきたわね」

大鎌が飛来してくるのを確認したパチュリーが思わず笑みを零す。
そして直ぐに詠唱を中断し、魔法障壁により防御の体勢に入る。

死神がパチュリーの行動に理解が追いつかず、思考を巡らす。
その間に美鈴が次なる攻撃を仕掛けているのも知らずに。

「——降華蹴っ！」

空中に浮かんだ死神を標的に、美鈴が技を繰り出す。
華麗な円弧から繰り出される降華蹴。
それは見事に死神の背中を捉えた。

美鈴の蹴りが死神の背中に減り込む鈍い音。
それと共に死神が空中から重力に従い落下する。

「くそッ…陽動はあの魔法使いのほうだったか」

背中に走る鈍い痛みに顔を顰めながらそう呟く。

パチュリーと美鈴は、してやったり、といった表情だ。
そして攻撃の流れを止めまい、と美鈴が間髪入れずに追撃を開始する。

美鈴が追撃を始める。

それは死神が空中から迎撃され、地上に落下した時の事である。
自信に気合を込めるように、低い声で雄叫びを上げる。

「ハアアアツ！烈虹拳ツ！！」

地に膝をついている死神に高速で突きを連打する。
腕を伸ばせば、確実に拳が当たる距離まで接近しての攻撃だった。
だが、それに逸早く気付いた死神は立ち上がり、即座にステップで避けた。

「——ふう、危ねえ…もう少し冷静にならないとな…」

大鎌を後ろ手に構え、呼吸を整える。
そして大きく深呼吸をした後に、死神が大鎌を振り翳して美鈴を標的に動き出す。

「小賢しい魔法使いは後回しだ。まずはテメーから裁きを下してやるぜ！」

助走を付け、美鈴に向かって駆け出す。

美鈴も迎撃しようと構えるが、予想よりもずっと動きが俊敏な死神に追いつけなかった。

「——ッ！？」

鎌の刃先が鼻を掠める。

大鎌が高速で振り回されたことによる、空気が裂ける音だけが聞こえてくる。

間一髪、体を後ろに反らす事によりそれを避けた。

「くっ…このオ！」

右手、左手、さしては足をも使い死神に対抗する。

武術に卓越した美鈴の四肢は、当たれば致命傷にはならずとも、大きなダメージにはなるだろう。

しかし、それは一発も命中しない。

たとえ命中したとしても、それは死神の持つ大鎌か、漆黒の外套のみ。

「（動きが乱雑過ぎて読めない…ッ）」

パチュリーの援護攻撃が功を奏していた、とも思えた。

だが、死神はそれをも予測して攻撃を避ける為に、逆に美鈴が死神の動きを読めないでいた。

死神は単にパチュリーの援護攻撃を避けるだけでなく、それを応用してのフェイント、さしては同士討ちまで狙って動いていたのだ。

「テメーらのような徒党を組んで戦う野郎どもは、如何に効率良く命を狩り取るか計算して動く…見え見え何だよオッ!!」

瞬間、爆発したかのような加速をつけ、美鈴に飛び掛る。自慢の三つ刃の大鎌を変幻自在に操り、美鈴と相對する。

美鈴の格闘攻撃を正面から受け止め、一瞬の隙を衝いて再び大鎌が空気をぶった切る。

——避けられるか

避けきれぬ根拠も自信も持ち合わせていなかった美鈴は、体を反らす。

体を反らすだけでなく、心の奥底から滲み出た恐怖から目を瞑り、顔を真横に反らした。

そして・・・

「——条件は整った。テメーはもう終わりだ」

大鎌が頬を掠め、思わず背中から思い切り倒れこんだ美鈴。

死神の背後から魔法で援護攻撃をしていたパチュリーの手も止まっ

た。

そして鎌の刃に付着した血液を舐め取る。

外見などに特に変化は起きないが、如何見ても死神が興奮しているのが目にとつて判る。

咲夜を術にかけた時とは違い、美鈴に術が成功したと理解したや否や、即座に自分の太腿を貫く。

「ぐッ……」

死神が太腿を突き刺すと、美鈴が激痛に顔を歪める。
貫いたところと同じ個所を押さえ、地に横たわる。

「ゲハハハア！！威勢の割には大した事ねーじゃねえかよオイ！」

能力で貫いた太腿から流血しながらも、更に死神は己の掌を貫く。
皮膚を千切り、肉を切り裂きながらも骨の間を巧く通過する。

鮮血が飛び散るが、自身の痛覚は既に狂ってしまったのか、痛みを感じさせない表情を浮べている。

倒れこむ美鈴には目もくれず、その地点から少し離れたところにいるパチュリーに視線を向ける。

「オイ、オイ！オイ！お仲間さんがくたばりかけてるつてのに、随分余裕ぶっこいてんなア？テメーも時機に——」

呪術を成功させ、興奮気味の死神がパチュリーを挑発する。

死神の言葉を最後まで聞かずに、パチュリーは既に魔法を発動させていた。

死神が言葉を紡いでる間に、パチュリーの生成した鉄の刃が死神を貫いていた。

皮膚を抉り、肉を切り裂く不快な音が幾度もなく鳴り響く。

両足に、胴体に、そして背中からも無数の鉄の刃が死神の身体を貫き、地面に深く刺さった。

パチュリーの予想だになかった攻撃に、死神が思わず表情を崩す。

「……あア？てめえ、まだ俺の能力を理解してねーってか？」

パチュリーを侮蔑するような表情を浮かべ、そう言い放つ。
対するパチュリーも同じような表情を浮べて反論する。

「理解していないのは貴方のほうよ。…美鈴は門番の仕事を失っても、芸役者で食べていけそうね？」

言葉尻に笑みを含めて呟くと、地に倒れ伏していた美鈴が起き上がった。

怪我を物ともしない、というよりも始めから怪我など負っていないか
ったかのように綺麗に立ち上がる。

「えへへ…、喜んでいいのか複雑なお言葉ですね…」

美鈴が照れ笑いを浮かべ、パチュリーにそう言い放つ。

言葉からも、能力によりダメージを負っている様子は感じられなかった。

それを疑問に思った死神が、訝しげな表情でパチュリーのほうへ視線を向けると、パチュリーが捕捉をするように説明を始めた。

「貴方の武器…、鎌が三つも付いてる。必殺の一撃を狙うでもなく、相手に大なり小なり、手傷を負わす事が目的の武器ね。」

相手に手傷を負わす事ができれば、確実に相手を殺す事ができる術を持っているて事でしょ？」

パチュリーが説明の合間に一呼吸を置いた時に、美鈴が捕捉をつけるように説明を始める。

「血液、ですね。貴方が血を舐めた後に、能力を発動しているのを私は見ていました。」

「呪いたい相手とリンクするには、相手の血液を採る必要があるんじゃない？」

「ぐっ……」

鉄の刃が身体を貫き、更に深く地面に決りこんでいる為に身動きがとれない死神。

パチュリーと美鈴の推測を聞いてるうちに歯噛む事で、その推測が正しい事を証明していた。

「ちなみに、貴方が採った血液は自分自身の血液ですね。」

咲夜さんのナイフに付着していた血液を採取し、小瓶に詰めておいたんです。

私に攻撃が命中する瞬間にそれを撒き散らす——つまり、貴方は自分自身に呪いをかけてたってわけですね！」

「血を舐めた後に己の身体を刺す事で、能力の発動は理解できた。けど、それよりも能力の発動条件が整った時点で、”条件は整った”なんて吠えるもんだから

すぐに推測が正しいことが解かったわ。…喚き過ぎなのよ、あんた」

パチュリーが推測の説明を終え、最後に死神を挑発する。
身動きがとれないせいで、大きな動きはできないが、憎悪の表情を浮べてパチュリーに喰いかかる。

「こオんの糞ニアア！！テメー！後でギタギタのズタズタのグチャグチャにしてやるぜエエ！！」

無理に動けば鉄の刃で四肢が切断されてしまう。

ゆっくりと、確実に己に突き刺さった刃を抜こうとする。

しかし、その最中にもある人物が死神の命を狩り取ろうと動き始める。

「後何て…ないわよ」

十六夜咲夜が立ち上がり、死神との距離を詰める。

重症を負っていたが、パチュリーの魔法により応急処置を施したのだ。

手には銀色のナイフをぶら下げ、危ない足取りで死神に近づく。

「お見事ですネ、パチュリー様。後は私が…」

ゆっくりと確実に距離を縮める咲夜を睨みつけ、死神が大声で怒鳴りつける。

声の矛先は、少々離れたところで交戦している、風見幽香だ。

「幽香ッ！手を貸せエ！」

死神が怒声をあげる。

パチュリーが拘束時間を長める為に、魔力を鉄刃に流し込んでいたのだ。

窮地に陥った現状を、自身で打開する術を瞬時に解き出す事ができなかった。

その為に、友人であり戦友でもあろう風見幽香に助けを求めたのだ。

助けを求められた風見幽香は、それに答える程の余裕を持ち合わせてはいなかった。

レミリアの弾幕攻撃を避け、弾き返し、反撃する。

力を有する者同士が弾幕ごっこを繰り広げると、こうした膠着状態に陥る事が多い。

因みに、幽香とレミリアはルールにのっとり、スペルカードルールで戦闘を行っている。

「コラァ！さっさとしろ！」

更に怒気を含めて放った言葉に、ようやく幽香が反応を見せた。

「——ッだから油断するなと言ったでしょ！」

苦戦する死神に目も向けずに、レミリアを迎撃しようと動く幽香。その行動から死神を援護する余裕はないと見える。

怒声をあげながらも、少しずつ全身に突き刺さった鉄の刃を抜き取るうと行動する。

しかし、それも虚しく咲夜が銀のナイフをぶら下げて眼前へと迫る。

咲夜自身も少々抵抗を感じたのか、額に嫌な汗をかきながらも、目を大きく開眼させていた。

今より自らの手で、死神の頸を跳ねようと——

肉を切り裂き、頸動脈を一瞬で切り裂く。

骨も、まるで豆腐を切るかのように、滑らかに銀のナイフが頸を通過する。

頸動脈を切断した事により、夥しい量の血液が噴出する。

片手で一闪、銀色のナイフで死神の首筋を一思いに断つ。

一闪した勢いで、死神の頭が胴体とは離れた場所へと飛んでいった。

「・・・」

只、無言でナイフを振り抜いた咲夜の顔には、死神の返り血が付着していた。

身体に指示を送る、司令塔の役割を担っている脳が胴体と離れたことにより、

司令塔を失った胴体がフラリ、とバランスを崩す。

それを見届けていたパチュリーが、もう良し。とばかりに魔法を解く。

四肢を貫き固定していた鉄の刃が魔術の供給を絶たれ、跡形も無く姿を消す。

その瞬間に、死神の胴体が遂に膝から崩れ落ちた。

——ドサリ、と重く鈍い音が辺りに静かに木霊した。

その音が聞こえたのか、幽香とレミリアも一時的に弾幕を止め、咲夜達のいる方角へと目を向けた。

「…殺ったの？」

レミリアが静かに、確かめるように咲夜達に質問した。

対する咲夜達も、それを肯定するように頭を縦に動かした。

——幽香は考えていた。

私と殺し合った時、彼には不死が宿っていると確信していた。

今の今までそう思っていたし、現に足を貫き、胴体を串刺しにされても平気な顔をしていたから事実と思っていた。

そんな力強い彼の頸が刎ねられた。

その瞬間に、胴体が糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

不死身の身体を持ってしても、脳を保護している頭部を切断されてしまつては駄目か。
思考を巡らせているうちに、額に一筋の水滴が垂れてくる。
焦りや焦燥、怒りや悲しみ等が混ざり合つた複雑な感情。
私とつて、目の前の人外どもは仇敵――？

幽香や、死神の頸を刎ねた咲夜、レミリアやパチュリーが静まり返つた戦場に佇む。

その間にも、紅魔館に新たな刺客が向かっているとも知らずに――

*

「ちょっと、そんなに急がなくても……」

二人の金髪の少女が紅魔館へと向かつていた。
片方は箒に跨り、空を飛び、もう片方は何物の力を借りずに、己の身一つで宙を飛ぶ。

「なんだよアリスう！お前は気になんないのかよ？」

アリス、と呼ばれた少女が箒に跨る少女の問いに答える。

「そりゃあ気になんない事はないけど……」

アリスは言葉を濁す。

第に跨った少女…霧雨魔理沙が若干興奮気味にアリスに詰め寄る。

「なら善は急げ、だ！もう紅魔館だぜ」

魔理沙がやや速度を上げ、アリスを置いて一足先に紅魔館へと飛んでいった。

一人になっても速度をあげようとするアリスは、一人ごちた。

「“死神”って、どう考えてもあいつよね。何やってるのかしら…
態々紅魔館だなんて。」

何か嫌な予感が胸を過ぎるが、無理矢理押さえ込む。

興味本位で、新聞の記事に踊らされた魔理沙とアリスが、紅魔館へと足を運んでいたのだ。

時間的には、丁度死神の頸が跳ね飛ばされた頃合だ。

あまりにも偶然のような、神が操作しているのではないか、というタイミングで紅魔館に辿り着く二人。

彼女らが目にするのは当然、火を見るよりも明らかな事象。

——ドサリ、と頭部が地に落ちる鈍い音が響く。

その音に、戦闘中の幽香とレミリアが思わず攻撃の手を止めた。地に落ち、二転、三転と転がった後に、死神の頭部が静止する。

そして頭部だけになった死神が、ギロリ、と視線を幽香のほうへと向け――

「つつーか！おめーが遅せーんだよ幽香アツ！！ てめーワザとだろ！？」

充血した眼球を幽香のほうへ向け、更には口の端から地を流しながら、死神がそう叫ぶ。

対する幽香は、死神に怒鳴られた事に少々肩を震わせながらも、生気に満ち溢れた死神を見つめて思わず安堵した。

「っさいわね！というか貴方、今調子にのって吠えられる立場じゃあないでしょ？」

幽香が死神に言い返す。

確かに幽香はレミリアと激戦を繰り広げていたので、死神を援護する余裕はなかった。

怒気を含めた二人の言い争いを眺め、パチュリーが思わず呟く。

「私達、何と戦っているのかしら……」

パチュリーの呟きに、美鈴と咲夜が思わず、さあ……。と呟いた。レミリアも口をあぐりと開き、立ち尽くしていた。

現来、幻想郷にも不死の生物は存在する。

だがそれも、頸を切断されれば物事を口にする事はなくなり、大人しくなる。

変わりに、驚異的な蘇生能力を秘めている為、その必要がないのだ。

例えばバラバラにされようが、細胞分子レベルに消滅されようが、髪の毛一本からでも復活する事ができる。

だが、目の前の死神はまた別の種類の不死身だ。頸を切断されれば、再度くっ付ける必要がある。

バラバラにされても然り、身体に栄養を供給しなければ死ぬ事もある。

頸一つになっても喚き散らす事ができる。だが、自然に蘇生する事は無い。

その為に、頭一つとなった死神が、しおらしく幽香に懇願する。

「…悪かったよ幽香。強く当たっちゃっただけで、別にお前を侮蔑してるわけじゃあねーよ。」

「ふん、どうだかね…」

「なあ幽香あ…。体、持ってきてくんねーかなア…」

ばつが悪そうに表情を崩す死神に、幽香が溜息を一つ吐き、了承する。

静まり返ってしまった場で、戦闘を継続しようとする者はおらず、幽香が歩き出しても手を出してくる人物はいなかった。

死神の頭部が転がってる場所を通過し、胴体の倒れてるほうに向かっていた幽香。

そこにタイミング良く、室内の窓が蹴破られて刺客が現れる。

「おーっすパチュリーー！死神野郎は来て……なんだこりゃ！」

「魔理沙！何も窓から入らなくても……って」

窓から侵入してきたのは、白黒魔法使いの霧雨魔理沙と人形遣いのアリスだ。

二人が目にしたのは、いつも通りの面子に、紅魔館にしては珍しい、風見幽香の姿。

そして何よりも二人を驚かせたのが、地面に横たわる頭を無くした人の形をした死体。

「あ？誰か来たのか？」

生首になった死神が目をギロギロと動かすが、人物を特定する事ができない。

独りでに喋りだした生首に対し、魔理沙は恐怖するどころか、興味津々に訊ねる。

「うお！なんだお前、病院行ったほうがいいぞ？」

「九頭…、貴方何してるの・・・？」

興味津々で訊ねる魔理沙に引き換え、アリスが溜息混じりに訊ねる。

「知らねえ声と、お前は…アリスか！」

魔理沙がアリスに、知り合いか？と訊ねたが、アリスは無言で答えた。

視線で人物を特定することができない死神が、口調や声の質で知り合いが混じっている事に気付いた。
そしてある事を思いつき、閃いたかのような表情をする。

「丁度良かったアリス。俺の頸、縫ってくれねーか？」

「……ちょっと状況が理解できないけど、要するに頭と体を元に戻せば良いのよね？」

アリスに顔を向けることができないので、あらぬ方向に視線を向けてアリスに願う死神。

アリスもそれに同意する。

生首になった友人を見ても驚かないのは、やはり妖怪ならではの度胸か。

或いは事前にそういった事柄の話を聞いていたか等は不明である。

そのやり取りを傍観していた幽香が眉間に皺を寄せた。

胴体を運ぼうとしていた幽香が足を戻し、地面に転がっていた死神の頭部を拾い上げる。

手には万力の力を込めて。

「——ッ！ コラ幽香！ 体だ！ 体のほうを持って来いっつつてんだろーが！」

「こっちのほうが軽いわ」

頭部を掴み上げたかと思えば、今度はブラリ、と頭部を垂らし、髪の毛で頭部を持ち上げる。

「痛てエ……いてて… オイ！髪を引っ張んじゃあねーよ、コラ！」

「痛がるのなら首のほうを痛がりなさいよ」

幽香が不機嫌そうな表情を浮かべ、死神の頭を運ぶ。

とりあえずは胴体の元へ運ぶ為に、足を動かすがその間に死神が幽香の嫌味に答える。

「バカヤロー、そりゃこの首の痛みは半端ねえ…。どうみてもコレ、怪我ってレベルじゃねーからな…」

そう幽香に呟くと、空中にブラ下がる頭だけでパチュリー達の方へと視線を向ける。

眼を充血させ、怒りに満ち溢れた表情でパチュリー達に吠え始める。

「むちゃくちゃ痛えぞコラアア！！首なんか斬りやがって！！超スーパー激痛だクソヤロー！！」

パチュリー達にそう怒鳴り散らす死神を他所に、幽香が淡々と歩く。死神の胴体がある場所には、先程首を切断した咲夜が佇んでいた。

幽香の通行路に咲夜がいる。

彼女の行為を寄せる人物の首を斬りおとした咲夜。

そう一人思考を活動させるうちに、幽香の腹の底から煮え滾る様な憎しみが溢れ出てくる。

そして、彼の胴体のある場所にいる咲夜を障害とみなし…

「邪魔、よっ！！」

「——がッ！？」

幽香の通行路にいた咲夜に思い切り飛び膝蹴りを浴びせる。

怪我を負っており、機敏な動きができぬ咲夜はそれを避けることができなかった。

思い切り顔を蹴られ、真横に吹き飛ばされ咲夜。

それを見ていたレミリアやパチュリーが思わず身を乗り出そうとするが、堪えた。

此処で風見幽香を刺激することは、得策ではないと理解していたのだ。

「風見、幽香ね。悪いけれど、彼は渡してもらわよ。」

「貴女一人じゃあ運べないでしょ？私も手伝ってあげるわよ。」

不敵な笑みを浮べてアリスにそう言い放つ。

対するアリスも同じように笑みを浮かべ

「必要ないわよ。人形達に運んでもらうから。」

アリスがそう言い放つと、上海人形や蓬莱人形が動き出し、死神の胴体を持ち上げる。

その瞬間に、胴体の頭部へと繋がる部分から流血が始まる。

アリスが思わぬ回答をした事に、幽香が顔を顰めるが、死神がそれを宥める。

「悪りーな幽香、アリスに縫合してもらうからよ。また後でな」

「じゃ、そういう事だから。ほら、早く渡しなさいよ」

アリスが手を差し出し、死神の頭部を渡すことを急かす。傍から見れば、異様な光景ともとれる。

レミリアもパチュリーも、美鈴も魔理沙もポカン、としてその取引を見届けていた。

結局のところ、幽香が死神の頭部を渡した。渋々といった表情で幽香が顔を顰めている。

「さ、行きましよう九頭。——ふふっ」

「…あー？どした？」

死神の頭部を小脇に抱え、アリスが思わずほくそえむ。何かを企んでいるような表情だ。

「悪いわね魔理沙。そういう事だから…」

「そういう事ってお前…もう帰るのかよ！」

「ええ、やる事ができちゃったからね」

アリスがそう言いながら、窓から急いで飛び出す。飛び出す瞬間にアリスが、人傀儡…人を核として…等と呟いていたのを魔理沙は聞き逃さなかった。

幽香が不機嫌そうに、静寂した室内を見渡す。

先程のような戦意などは見られなくなった一室。

レミリア達も、幽香をあまり刺激したいとは思っていないようであった。

幽香も友人がいなくなってしまう、やる事を見失ってしまった。その為につまらそうな表情に変貌、すぐに紅魔館を後にした。

レミリア達もほんの遊び心もあつたので、追撃をしようとも思っていなかった。

咲夜たちのほうは予想外で、レミリアもまさか死神があそこまで強いとは思っていなかったようだ。

そもそも、スペルカードルールで戦闘を行っていなかったようで、互いに被害甚大なのは致し方なかった。

「…お嬢様」

咲夜が思わず呟く。

「ええ、面白かったけれど、まさか幽香が一枚噛んでたとはねえ…。彼一人だった手籠めにしても良かったけれど、厄介なのに好かれたものね。」

最近、落ち着きを取り戻し始めたフランの子守をさせても良い、そ

う考えていたレミリア。

死神と言う面白い遊び道具があれば、フランも喜ぶだろうと思って
いたのだろう。

しかし、死神は死神で、相当に厄介な人物に付き纏われているよう
だ。

その事に思わず溜息し、腕を組むレミリア。

「で、貴女は何をしにきたのよ？」

「何って、例の死神野郎を一目見ておこうと思ってな。それと、今
日も本を借りに来たんだぜ」

パチュリーの質問に、魔理沙が意気揚々に答える。

相変わらず魔理沙は変わらないな、そう思いつつもパチュリーが魔
理沙を追い返そうとする。

空気と化した美鈴は、その後にレミリアに、咲夜に話しかけてみた
ものの、誰にも相手にされずに泣きながら門番の仕事に戻ったそう
な。

アリスに連れてかれた死神こと、九頭龍。

彼女の卓越した人形作りの腕にかかれば、切断した個所を縫合する
など造作もないだろう。

だがしかし、アリスに策有り。彼はどうなってしまふのか――

断頭、死体の行方（後書き）

はいども、お久しぶりです。

これで一区切りです。

予約投稿凄いね！

さて、どうみても飛段、性格変わりすぎじゃね？等等感想を頂いてる事を想像できました。

最後は申し訳ない。

仕事が忙しくなってきたので、早く終わらせようという気持ちが強くなってしまい、ぐだぐだに…。

因みに、こんな事を言ってしまったら他の方々に叱咤されてしまうかもしれませんが、私の一区切りした小説、誰か続き書いてもいいよ！

…そんな物好きな方はいないと思いますが！

恐らく、今頃筆者は別の小説を執筆しているかもしれないです。

ではでは、またあおいしましょう。

否、お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8734q/>

東方死神行

2011年3月11日11時27分発行